研究紀要 第２５集
令和６（２０２４）年度

生涯をとおして自ら学ぼうとする子供を育てる授業の在り方

令和７年２月

長崎大学教育学部附属特別支援学校

はしがき

第２５次研究では、「生涯をとおして自ら学ぼうとする子供を育てる授業の在り方」を研究主題として三か年の研究に取り組んでまいりました。今回の研究は「ウェルビーイングと主体性をもった子供の育成」を目指したものです。皆様には、忌憚のない御意見や御教示を賜りますようお願い申し上げます。

ところで、過去の研究を改めて振り返りますと、第１０次研究「社会生活を豊かにするコミュニケーションの指導」、第１１次研究「“自らが生活を充実させようとする”教育を求めて」、第１２次研究「自立を支える指導法の研究 ～自ら考えて行動する子供を育てる授業の在り方を探る～」とあり、これらの研究は「子供たちの主体性」に着眼した研究でした。当時の研究紀要を読み返してみると、現代の教育課題をも見据えた諸先輩方の教育への熱い情熱と子供たちへの深い愛情が読み取れ、心に沁みました。これらの研究は、その後、本校の教育理念である「自己の形成」の研究に取り組む基盤になりました。

第１１次研究の紀要には「子供の主体性に着眼する」ことについて、次のように書かれてあります。

> （前回の研究は、）どの段階の子どもであっても、一人ひとりの子どもを見つめ、状況や心の動き等を的確に捉え、それに重きを置きつつ指導を行うことの大切さを示唆するものであった。すなわち、私達が行いがちな子どもの社会参加や将来へ向けての過度で一方的な願いからの指導ではなく、私達の指導は、子ども自らの主体的なかかわり、働きかけを積極的に取り入れ、一人ひとりをよりよく見すえた上での状況、場、時等に応じた無理のない自然な指導でなくてはならないと強く方向づけるものであった。そのことは、子供自らの主体的なかかわり、働きかけがあってはじめて子供の真の充実した生活があると推し量らせた。（原文のまま）

ここに書かれてあることは、私たちが今取り組んでいることの源流であり、今回の研究や日頃の教育実践を振り返る上での指針であるように思えてなりません。

さて、平成２９年８月に文部科学省が公表した「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて－国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書－」の中で、附属学校の課題が挙げられました。それは、「附属学校での教育実践や研究の成果が全国や地域で生かされていない」、「附属学校には教育実践や研究の成果が地域の学校運営や児童生徒への指導に具体的にどう活用されたのかということを効果的に測り、その成果を示すエビデンス（客観的な根拠）が求められる」というものでした。開校以来、附属学校としての矜持を抱いて、障害児・者周辺の社会環境の変化、障害者福祉、特別支援教育の動向を見据えながら、教育実践、研究を推進してきた本校にとりましても、報告書で示された課題は、本校の現状や今後の進むべき道筋を問われる非常に厳しいものであると受け止めました。今回の研究成果が皆様の日々の教育実践に少しでも役立つものと評価していただければ幸甚に存じます。

結びになりますが、本校の職員は、日々の教材研究に励み、教育実践や研究に一所懸命に取り組んでいます。これからも、教育学部と連携・協働しながら附属学校としての力量形成に努め、その成果を広く発信していく所存です。県内唯一の附属特別支援学校である本校に対して、皆様のお力添えを賜りますよう、心からお願い申し上げます。

令和７年２月

校　長　　田　中　昭　二

目　次

はしがき

第１章　本校の概要 1

第２章　研究の概要
Ⅰ　研究テーマ 3
Ⅱ　研究テーマ設定の理由 3
Ⅲ　研究の目的 3
Ⅳ　研究の仮説 4
Ⅴ　研究の内容・方法 4
Ⅵ　研究組織 5

第３章　研究の実際
Ⅰ　研究の経過 6
Ⅱ　各部の実践
1　小学部の研究 35
2　中学部の研究 50
3　高等部の研究 71

第４章　研究のまとめ
Ⅰ　研究の成果と課題 95
Ⅱ　本研究を振り返って 96

研究紀要バックナンバー一覧（第１集～第24集）

引用・参考文献

あとがき

第１章　本校の概要

Ⅰ 本校の性格、使命

本校は、日本国憲法および教育基本法、学校教育法の精神にのっとり、知的障害のある児童生徒に対して自立と社会参加のために必要な知識、技能及び態度の育成を図ることを目的とする特別支援学校である。併せて、附属学校として次に挙げる使命をもっている。

○教育学部と一体になり、知的障害のある児童生徒に対する教育の在り方について、長崎県域のモデル校として、実証的・理論的な研究を行い、その成果を広く発信することで、特別支援教育の充実・発展に貢献する。
○教育学部の計画に沿って、理論と実践が往還した教育実地研究の指導にあたり、特別支援学校等の教員をめざす学生の指導・育成に努める。
○教育学部と連携して、特別な教育的支援を必要とする幼児・児童生徒が在籍する幼保・小中学校・高等学校等に対する支援や教職員を対象とした研修を積極的に推進する。

Ⅱ 校訓

「生きる喜び」　「生きる力」

「生きる喜び」

変化が激しく予測困難な時代において、自立し社会に参加・貢献するには、様々な学習活動や生活体験を通して、自分の内面や外界に「生きる喜び」をつくることが大切である。児童生徒は、物事に対して知的好奇心や興味関心を抱き、主体的に課題を解決する経験を通して、成就感や喜びを味わう。また、社会に広く向き合い、多様な他者の考えを尊重して共に協働することで、よりよい人間関係を築くとともに他者を思いやる心を育んでいく。このようにして「生きる喜び」を児童生徒一人一人がつくり、それを原動力として意欲的な生活を送ることで、自己実現に向けて精一杯取り組んでほしい。

「生きる力」

変化が激しく予測困難な時代において、自分のよさや可能性を肯定的に捉え、個々の特性と発達に即した「生きる力」を身に付けることが必要である。児童生徒は、様々な学習活動や生活体験を通して、自己を育みながら、生きるために必要な資質・能力を身に付けていく。さらに、様々な課題に対して、ものの見方・考え方を働かせて自己選択・自己決定するとともに、自分の考えや行動を客観的に理解する力を身に付けていく。このようにして「生きる力」を児童生徒一人一人が身に付け、それを活かして自分の生き方を自己選択・自己決定しながら生涯を通じて豊かな生活を送ってほしい。

Ⅲ　学校教育目標

生きるために必要な資質・能力を育成するとともに児童生徒一人一人の自己の形成（キャリア発達）を促すことで、生涯を通じて社会に参加・貢献して豊かな生活を送ろうとする人間の育成をめざす。

Ⅳ　めざす児童生徒像

表Ⅰ-1　めざす児童生徒像

めざす児童生徒像	めざす児童生徒像の具体的な姿
健やかにたくましく生きる子	○自らの成長を受け入れ、心身ともに健やかな子 ○生活習慣を確立し、自立した生活を送る子 ○自分を大切にし、安全に気を付けながら生活する子
生き生きと学ぶ子	○物事に興味関心を抱き、意欲的に取り組む子 ○ものの見方や考え方を働かせて、主体的に学び、生活に生かす子 ○決まりや社会規範を理解し、自分で判断し行動する子
生きがいをもち努力する子	○憧れや希望を抱き、チャレンジする子 ○自分のことを理解し、自分のよさを発揮しようとする子 ○生き生きと働いたり余暇を楽しんだりする子
思いをもって決められる子	○自分の思いや考えをもてる子 ○自分の思いや考えを周りに伝えることができる子 ○様々な人々との関わりの中で、自分の思いや考えを調整できる子
思いやりのある子	○他者の存在を尊重し、よりよい人間関係を築く子 ○他者と共に協働し、学びあう子 ○社会に向き合い豊かな感性を磨く子

Ⅴ　各部教育目標

表Ⅰ-2　各部教育目標

小学部【意欲づくり】	中学部【基盤づくり】	高等部【主体づくり】
○身近な人や物と関わる中で自分に気付き、自分なりに考え、自分から行動しようとする意欲を育てる。	○仲間とともにいろいろなことにチャレンジし、自分の成長を実感することを通して、社会参加の基盤となる力を高める。	○社会を生きる主体として、自分の生き方・在り方を考え、自ら選択・決定する過程を通して、自立的な生活・社会参加をめざす。
・言葉や数などの基礎的・基本的な力を身に付けるとともに、身近なことへの興味関心を広げる。	・日常生活や社会生活で活用できる知識や技能の習得を図るとともに、自ら主体的に学ぼうとする意欲をもつ。	・社会で自分らしく活躍するために必要な知識や技能を習得し、多様な人々と協働するための表現力を身に付ける。
・友達や教師との関わりを広げ、協力する態度を身に付ける。	・自分のよさに気付き、仲間と協力して、いろいろなことにチャレンジする態度を身に付ける。	・社会のルールやマナーを守り、自分も他の人々も大切にしながら、生きるために主体的な判断力と行動力を身に付ける。
・基本的な生活習慣を身に付けるとともに、元気に体を動かすことを通して、健康で丈夫な体を育む。	・生活習慣を確立し、身体の成長を受け入れながらたくましく生きるための体力や精神力を養う。	・生涯にわたり、健康に生きるための体力と生活習慣を理解し、自己管理する力を高める。

第２章　研究の概要

Ⅰ　研究テーマ

「生涯をとおして自ら学ぼうとする子供を育てる授業の在り方」

Ⅱ　研究テーマ設定の理由

本校では、校訓である「生きる喜び」「生きる力」の実現を目指し、変化の激しい予測困難な時代を生きるために必要な資質・能力を児童生徒に育成することを基本方針としている。同時に、児童生徒一人一人の自己形成（キャリア発達）を促し、生涯を通じて社会に参加・貢献して豊かな生活を送ろうとする児童・生徒の育成を目指している。

これまでの研究において、第23次研究では学習指導要領を踏まえた教育課程の編成に取り組み、第24次研究では「主体的で対話的な深い学び」を主眼に置いた授業づくりやカリキュラム・マネジメントの研究に取り組んできた。これらの研究成果により、教科指導の系統性が整備され、充実した授業づくりが可能になったとの教員からの評価を得ることができた。一方で、学習や日常生活能力の習得が難しい児童生徒の増加や教科指導体制の確保など、学校全体で幅広い課題に直面している。特に、児童生徒の内面的な成長やキャリア発達を促す指導の在り方について、多くの教員が課題と感じていると同時に、将来の社会生活に必要な力を身に付けさせるための指導には系統性が欠かせないとの意見も挙がっている。

本校は、令和3年に創立50周年を迎え、この間に多くの卒業生が社会生活を送り出している。ほとんどの卒業生が就労を中心とした生活を送っている中で、本人や保護者から「学校で身に付けたことを生かす機会が少ない」「自発的に外に出ることが難しくなっている」という声を聞くことが多い。平成16年にまとめられた第16次研究での卒業生へのアンケートにも同様の回答があったことから、児童生徒が主体的・能動的に生活する力を育成することは長年の課題であり、障害者の生涯学習が推進されるこれからの社会において、特に重要な課題であると考えている。

我が国では、平成26年に「障害者権利条約」を批准し、以降「障害者基本計画」や「障害者の生涯学習の推進方策について」などの政策が策定されてきた。これらの施策は、障害者の生涯学習を支援し、地域社会への参加を促進することを目指している。さらに、令和5年6月に閣議決定された「教育振興基本計画」では、「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を掲げ、幸福感や協働性、自己実現を重視する教育の実践が求められている。以上のことから、本校においても新しい時代を担う児童生徒を育成する上で社会情勢を踏まえた指導を学校全体で取り組まないといけないと考えた。

そこで、本研究では、児童生徒の卒業後の生活を視野に入れ、これからの社会を生きるために必要な力を関係機関へのアンケートや本校の現状分析、時代の社会的要請を踏まえて明らかにし、「目指す児童生徒像の具体的な姿」を学校全体で再定義することにした。そして、これらの成果を基に、本校のキャリア教育との関連性を図りながら、児童生徒の主体性を育む授業づくりを実践することにした。校訓「生きる喜び」「生きる力」の実現を目指し、主体的に社会と関わり、新しい時代を担う児童生徒を育成することを目指し、研究主題を「生涯をとおして自ら学ぼうとする子供を育てる授業の在り方」とし、児童生徒を新しい価値観で育成することを目指し研究を進めることにした。

Ⅲ　研究の目的

生涯にわたって学び続ける児童生徒を育成するために、学校全体で主体的な学びを促進する体制づくりと主体性を育む授業づくりに取り組む。

Ⅳ　研究の仮説

これからの社会を生きる児童生徒に求められる資質・能力を反映した指導体制の構築と児童生徒の主体性を育む授業を実践することで、学校全体で校訓「生きる喜び」「生きる力」の実現を目指した教育を推進する。このことにより、児童生徒が自ら学び、多様な社会で活躍できる態度を身に付けていくことができるであろう。

Ⅴ　研究の内容・方法

第 25 次研究は、3 か年計画で実施することにした。

1 年目（研究主題設定期）

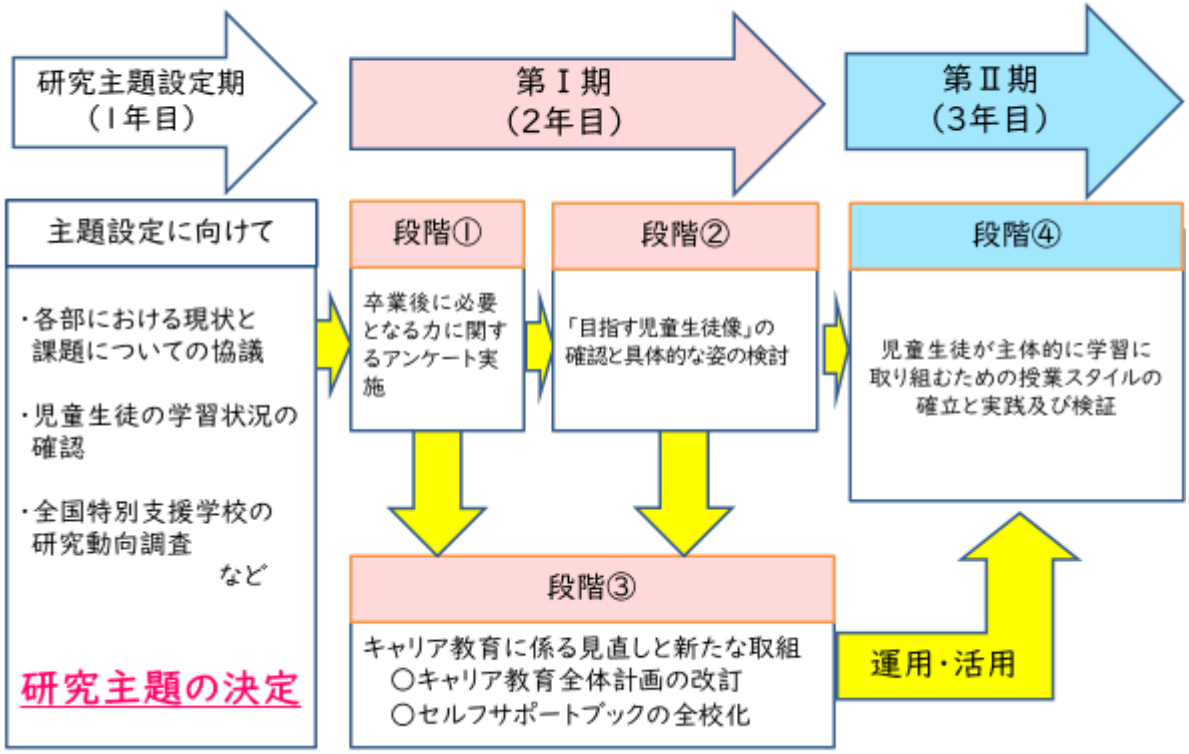
本校の課題と全国的な動向調査から、研究主題を設定し、研究の方向性を定めた。具体的には、「各部における現状と課題についての協議」、「児童生徒の各教科の履修状況確認」、「全国特別支援学校の研究動向調査」などを実施した。

2 年目（第Ⅰ期研究）

関係者へのアンケート調査を実施し、児童生徒が卒業後に必要となる力を多角的に分析し、本校の目指す児童生徒像の具体的な姿に反映させた。また、本校の指導の系統性とキャリア教育の充実を図るため、キャリア教育全体計画とセルフサポートブック（本校版キャリアパスポート）を改訂した。

3 年目（第Ⅱ期研究）

児童生徒の主体性を育成するための授業の在り方について研究を行い、児童生徒が生涯にわたって主体的に生活できる力を育成するために必要な指導の在り方について検証した。



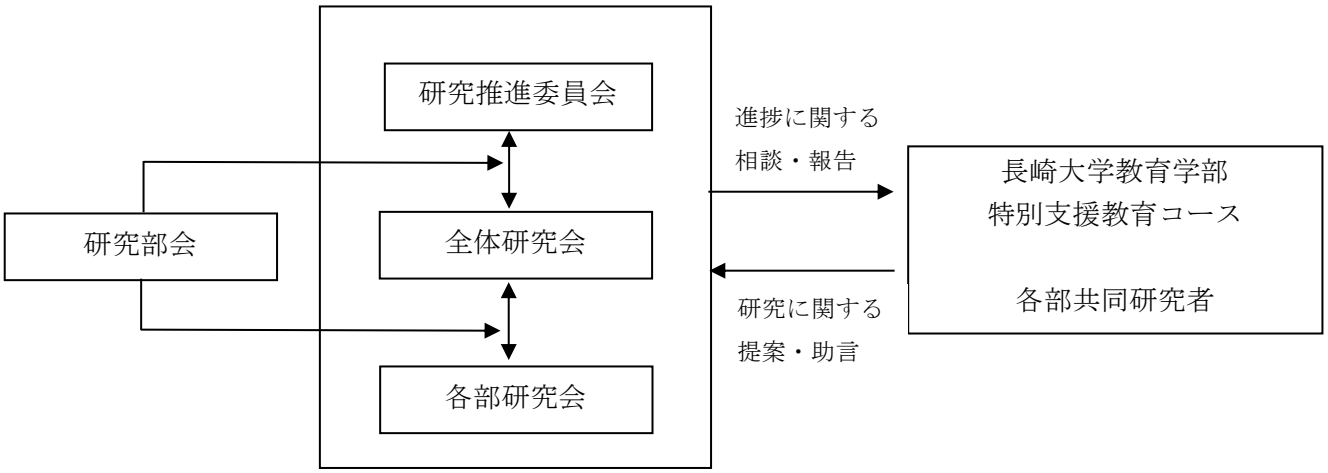
図Ⅱ-1　研究計画

Ⅵ　研究組織

研究組織は、以下の図のように構成した。

本研究は、校内において、研究推進委員会、研究部会、全体研究会、各部研究会を設置した。

研究の進捗状況は、研究推進委員会で報告し、その助言に基づいて全体研究会で研究の方向性を定め、各部研究等で具体的な研究活動を行った。さらに、長崎大学教育学部特別支援教育コースの教員と共同で研究を進めた。



図Ⅱ－2　研究組織

表Ⅱ－1　共同研究者一覧

全体	小学部	中学部	高等部
長崎大学大学院 教育学研究科 教授　鈴木 保巳　氏 【R6～】 長崎大学教育学部 准教授　荻布 優子　氏 【～R5】 長崎大学大学院 教育学研究科 教授　吉田 ゆり　氏 （現・九州大学 基幹教育院教授）	長崎大学大学院 教育学研究科 准教授　西村 大介 氏	長崎大学教育学部 准教授　石川 衣紀 氏	長崎大学教育学部 准教授　高橋 甲介 氏

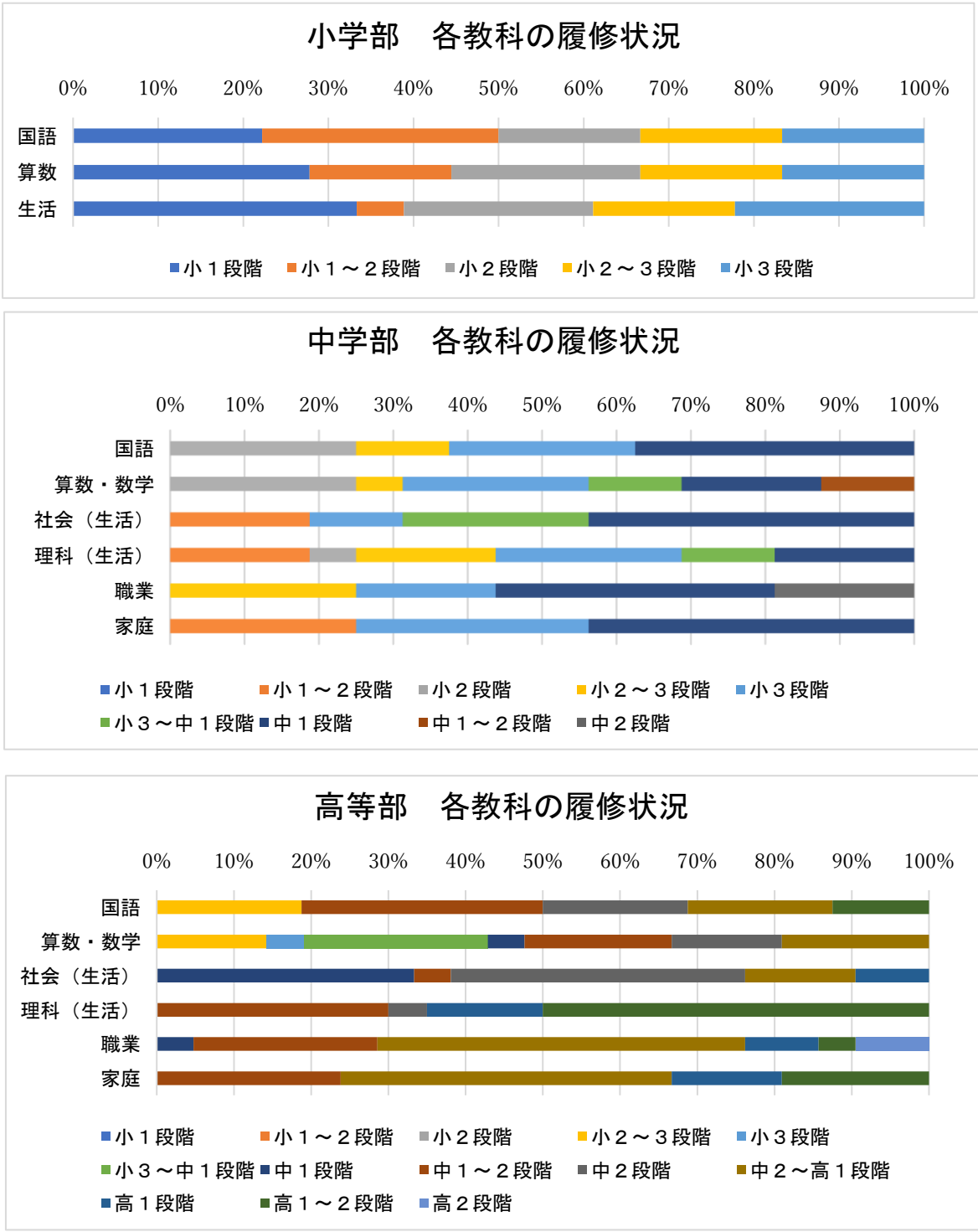
第３章　研究の実際

Ⅰ　研究の経過

1　研究主題設定期（１年目）

（１）児童生徒の学習履修状況と本校の教育課題

第 25 次研究を進めるにあたり、児童生徒の各教科の履修状況の調査や各部における教育課題、協議を基に、本校の現状や課題の整理を中心とした事前研究に取り組んだ。



図Ⅲ−1　在籍する児童生徒の各教科の履修状況

表Ⅲ-1　「各部における現状と課題」協議記録

小学部	○現行の教育課程の指導内容は明確になってきたが、子供の成長にプラスになっているかは現状では不透明 ○国語、算数は実態別で指導しているとはいえ、その中でも実態差がある ○5、6 年生が卒業する頃には、3 段階を学習する児童はかなり少なくなると感じる ○部の中、学級の中でリーダーとなる児童の育成 ○児童の実態は近年幅広くなってきていると感じる
中学部	○教科指導は充実したが、担当者の負担は増している ○教科によっては教育課程表に記載されている単元が多く、時間をかけて指導することが難しい ○挨拶、返事、身だしなみが十分でない生徒が増えてきている ○自信のなさが目立つ ○中学生らしい振舞いと言動を身に付ける必要がある
高等部	○友達同士の関わりが少なく感じる ○生活年齢に合った社会性 ○適切な気持ちの表出（伝える力） ○内部進学生徒と外部入学生徒の差（学力、社会性等） ○学習に向かう態度、生活面等、目指したい姿が明確ではない ○将来に向け、ワークライフバランスを身に付けさせる必要性

（２）全国及び長崎県内特別支援学校の研究動向調査

全国の附属特別支援学校ならびに長崎県内の知的障害特別支援学校の研究動向を参考にしながら、本校が研究主題を設定する目的で調査を実施した。全国の附属特別支援学校の調査は、各校から提供いただいた研究資料を中心に、長崎県内の特別支援学校については、各校の研究主任に研究内容を尋ねる形で情報を収集した。それらの情報を分析した結果、以下の動向が明らかになった。

○全国的な動向
・授業づくりや教育課程に関する研究が多くを占めている。
・次期学習指導要領を意識した発展的な研究に取り組む学校が一定数見られた。
・「未来」や「将来」をキーワードとしたキャリア教育を意識した授業づくりの研究に多くの学校が取り組んでいる。

○長崎県内の傾向
・授業づくりや教育課程に関する研究が多く、本校がこれまで取り組んできた研究内容と重なる部分が多いことが確認された。

以上の調査結果を踏まえ、研究主題の設定にあたっては、地域的視点に留まらず広い視野をもつことや未来志向のキャリア教育や学習指導要領の改訂を意識した授業づくりに注力し、教育実践の質を高める研究を進めていく必要があると考えた。

（３）研究主題の設定

研究主題を設定するために行った協議・調査により、本校では、旧教育課程（各教科等を合わせた指導を中心とした教育）から、教科指導を中心とした新たな教育課程を編成したことで、指導内容の明確化と教科指導の系統性を図ることが可能となった。一方で、児童生徒の実態が多様化している現状を踏まえ、指導の在り方について以下の課題と方向性が浮かび上がった。

①　本校における現状の課題
協議を重ねる中で、多くの教員が、実態の幅広い児童生徒に対して、内面の成長やキャリア発達をどのように支援し、育成していくかを重要な課題として認識していることが分かった。
②　社会的要請への対応
教育を取り巻く社会情勢として、障害者の生涯学習やウェルビーイング（幸福感）の考え方が注目されており、卒業生の声も含めた外部の視点を参考にすることの重要性が高まっている。
③　目指すべき授業づくり
キャリア発達の視点を重視し、児童生徒が主体的に学び行動する力を育む授業づくりを実践する必要性を改めて確認した。

以上を基に、本校では**研究主題「生涯をとおして自ら学ぼうとする子供を育てる授業の在り方」**と設定することで、児童生徒一人ひとりの主体性を中心に最大限に可能性を引き出す教育実践を目指すことにした。

2　第Ⅰ期研究（2年目）

研究主題設定期（1年目）の検討を通じて、現行の教育課程は教科指導を行う上では整備されていることが確認された。しかし、児童生徒の内面を育成するための指導の在り方については、さらに検討する必要があることが明らかになった。そこで、児童生徒に必要な力をキャリア発達の視点から捉え、以下の内容（表Ⅲ-2）に基づいて研究を進めることにした。

表Ⅲ-2　本研究の具体的な内容

<table>
<tr><td rowspan="4">第Ⅰ期</td><td colspan="2">段階①
卒業後に必要となる力に関するアンケートの実施</td><td>これから新しい時代を生きていく児童生徒にとって、「働く力」「暮らす力」「楽しむ力」を基盤とする「ワークライフバランス」を身に付けることは非常に重要であると考えられる。そこで、本校では、教員、保護者、卒業生が就労している企業及び各福祉事業所を対象に、「働く力」「暮らす力」「楽しむ力」がどの程度重要視されているかを調査し、その結果を新たなキャリア発達の視点として整理することにした。これらの力は主体性をもつことで初めて生かされるものであるため、アンケート調査の結果を基に、今後の研究を推進するための体制整備につなげることにした。</td></tr>
<tr><td colspan="2">段階②
「めざす児童生徒像」の確認と具体的な姿の見直し</td><td>段階①で得られたアンケートの分析結果をカリキュラム・マネジメントや授業づくりに反映するため、「めざす児童生徒像の具体的な姿」の各項目について検討を行うことにした。この検討を通じて、本校の「めざす児童生徒像」を全教員で再確認し、指導の系統性を研究する上での「共通のものさし」としての役割を果たすことができるのではないかと考えた。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">キャリア教育に係る取組</td><td>段階③
キャリア教育全体計画</td><td>現行の「キャリア教育全体計画」の見直しを行い、児童生徒が新しい時代を生きるために必要となる力を育成するための指針となることを目指す。</td></tr>
<tr><td>段階③
セルフサポートブック（SSB）の全校化</td><td>本校高等部では、自己理解を深めること、卒業の引継ぎ時に本人が主体的に活用できる支援ツールとして、セルフサポートブック（SSB）を導入している。さらに、SSBを充実・発展させていくために、小・中学部版を作成し、これらを「附属版キャリアパスポート」と位置付け、全校で活用することを目指す。</td></tr>
<tr><td>第Ⅱ期</td><td colspan="2">段階④
児童生徒が主体的に学習に取り組むための授業スタイルの確立と実践及び検証</td><td>「めざす児童生徒像の具体的な姿」や本校におけるキャリア教育を軸にした主体性を育成するために、児童生徒の主体性の育成に大切な要素（「附属スタイル」）を設け、その視点に基づいた授業実践と検証を行う。</td></tr>
</table>

（1）卒業後に必要となる力に関するアンケートの実施

① アンケートの目的

高等部を卒業し、社会人として長い人生を送ることになる児童生徒にとって、日中活動における働くためのスキルに加え、労働への原動力（モチベーション）となる余暇の過ごし方を含めた「ワークライフバランス」を身に付けることは、豊かな社会生活を送る上で重要であると考えた。そこで、「働く力」「暮らす力」「楽しむ力」に関連するアンケートを実施し、児童生徒が社会の一員としてより豊かな人生を送るために必要な力を分析することにした。

アンケートの概要

〇アンケートの対象

保護者、教員、本校生徒及び卒業生に関係する各所（企業、移行支援事業所、A 型事業所、B 型事業所、生活介護事業所）

〇アンケートの方法

4 件法、定量分析

〇回収率

	企業・移行支援	A 型	B 型	生活介護	本校教員	保護者
回収数／送付数	12／26	7／13	21／42	8／32	26／26	33／54
回収率	46%	54%	50%	25%	100%	61%

表Ⅲ-3　キャリア発達に向けた育てたい力　アンケート項目

Work（仕事）について		
1	規則の遵守	規則や決められたことを守る
2	出席（出勤）状況	正当な理由（通院、病気、交通事情）のない遅刻・早退・欠席（欠勤）はない
3	挨拶・返事	相手に応じた挨拶・返事ができる
4	意思表示	自分の意思（参加したい、助けてほしいなど）を相手に伝えることができる
5	電話などの利用	用件を伝えるのに、電話、メール、FAX を利用できる
6	情緒の安定	感情のコントロールができ、安定している
7	協調性	他人と力を合わせて助け合うことができる
8	体力	1 日（7～8 時間）を通して作業ができる体力がある
9	指示内容の遵守	指示どおりに作業をする
10	機器・道具の利用	作業機器や道具類を教えられたとおりに正しく使える
11	正確性	ミスなく正確に作業をする
12	器用さ	器用に作業をする
13	作業速度	必要とされる作業速度がこなせる
14	作業変化への対応	作業の内容、手順などの変化に対応できる
15	報告・連絡・相談	必要な時に適切な報告・連絡・相談ができる
16	時間の遵守	時間（作業開始時間・締切りなど）を守る
17	責任感	与えられた作業や当番などは最後までやる
18	整理整頓	作業場の整理整頓ができる
Life（生活）について		
19	身だしなみ	場に合った服装をし、清潔であるなど身だしなみがきちんとしている
20	食事①	一人で食事をとることができる
21	食事②	バランスの良い食べ方ができる（1 品ずつ食べるのではなく、三角食べができる）
22	起床	目覚まし時計やアラームなどを使って、決まった時間に自分で起きることができる
23	睡眠	夜更かしをせず、十分な睡眠時間を確保することができる
24	入浴	一人で体を洗ったり、髪を洗ったりすることができる（洗い残しがない）
25	トイレ①	一人で用を足すことができる
26	トイレ②	用を足した後、きれいにふき取ることができる
27	掃除	掃除機やほうき、ワイパーなどの道具を使って掃除をすることができる
28	洗濯①	洗濯機のスイッチを入れたり、洗剤を適量入れたりすることができる
29	洗濯②	洗濯物を干すことができる
30	洗濯③	洗濯物を畳むことができる
31	調理①	簡単な調理（ご飯を炊く、即席麺を作る、レンジを使うなど）ができる
32	調理②	栄養バランスを考えて、調理をすることができる
33	交通機関の利用	電車やバス、JR を一人で利用できる
34	健康管理	健康に気を付けて、良好な体調を保っている
35	服薬	必要な用量を守り、一人で薬を飲むことができる
36	金銭管理	小遣いなどを計画的に使う、必要な物を買う、保管するなど金銭管理ができる

【自由記述項目】

2　上記以外の項目で身に付けてほしい項目があればご記入ください。

【保護者項目】

3　お子さんが今現在、家庭での手伝いとして取り組んでいることがあればご記入ください。

4　今後、家庭での手伝いとして取り組ませてみたいことがありましたら、ご記入ください。

5　土日祝日や長期休業中などに、お子さんが楽しんで取り組んでいることがありましたら、ご記入ください。

【事業所項目】

3　余暇活動についてお答えください。

（1）どのくらいの頻度でおこなっていますか。

（2）具体的にどのような余暇活動を行っていますか。

（3）今後、取り入れてみたい余暇活動（計画している余暇活動）がありますか。

② アンケートの分析

アンケート結果を「企業・就労継続支援 A 型（以下、A 型)」「就労継続支援 B 型（以下、B 型)」「生活介護事業所（以下、生活介護)」「保護者」「教員」の 5 つに分類し、それぞれの分析と協議を実施した。分析は各部の教員を、所属部を超えた縦割りグループとして編成し、各分類の回収率に応じて定量分析と定性分析を組み合わせた形で行った。定量分析では、「将来の生活に向けて児童生徒に身に付かせたい力」を測るために数値基準を設け、条件を満たした項目は「今後の生活に必要とされる力」とすることで協議がスムーズに進行できるように工夫した。

各分類の分析結果は下表の通りである。

表Ⅲ-4　アンケート調査の分析と評価

分類	分析結果
企業、A 型	児童生徒の身辺自立については、支援を受けずに自らできることが基本とされている。また、仕事や日常生活において必要となる指示理解の力として「国語力」、さらに人間関係を築く上で重要な「ソーシャルスキル」や「規則の遵守」が求められる傾向が明らかになった。同時に、誠実な態度や気持ちの切り替えといった内面的な成長の重要性も明らかになり、これらの力を育む必要性があると考えた。また、就労を中心とした企業や事業所においては、事業所側が主体となって余暇を楽しむ時間を設定することはほとんどないため、児童生徒が自分自身で楽しみを見つける力をもつことを求められていることもわかった。
B 型	多くの事業所が、基本的生活動作の履修を求めていることが分かった。しかし、利用者の受け入れ実態や施設の運営方法が多岐にわたるため、回答にはばらつきが見られた。このことから、児童生徒が在籍中に少しでも多くの力を履修しておく必要性があると考えた。また、B 型に進んだ卒業生の現場実習や就労先での様子から、「規則を守る」「必要な時に適切な報告・連絡・相談ができる」「最後までやり遂げる」といった力は、アンケート結果に関わらず、非常に重要であると考えられる。一方で、余暇活動については、各事業所が計画的に実施している例が多いことも確認された。
生活介護	アンケート結果や生活介護に進んだ生徒の指導を通じて、「情緒の安定」「規則の遵守」「日常生活動作の習得」が重要であることを改めて確認することができた。また、生活介護は日常生活全般を支援するサービスであるが、アンケートの自由記述欄には「人員不足もあり、最低限の日常生活動作を習得していると助かる部分もある」という意見が寄せられており、この点の重要性も再認識することができた。
保護者	保護者が児童生徒の成長に見通しをもちづらい現状を踏まえ、在籍する部を卒業するまでに習得してほしい力を基準にアンケートを実施した。その結果、卒業が近い高等部保護者からは、各項目の数値が特に高い結果が得られた。また、アンケートの自由記述欄の分析では、「嫌がらずにとりあえずやってみる力」の習得を求める声が寄せられた。休日の過ごし方（余暇）については、「家庭でのゲーム、スマホ、テレビ」が多い一方で、5 名が「ない」と回答しており、この点は見過ごせない課題と考えられる。また、「家庭での手伝い」に関しては、小学部から高等部までの取り組み内容がほぼ横並びであることが分かった。これを踏まえ、発展的な活動内容につなげる指導の重要性が示唆された。
教員	全教員がほとんどの項目について、指導が重要であるという認識をもっていることが明らかになった。各部で平均値が高い項目を比較すると、卒業が近い生徒が在籍する高等部では、就労に直結する項目が重視されている傾向があり、小学部・中学部に比べて、平均値が最も高い項目が多いことが分かった。

③　まとめ

ア）児童生徒が卒業後に求められる力

児童生徒が卒業後に求められる力に関するアンケート結果から、事業所によって求められる力は多岐にわたることが明らかになった。企業・A 型事業所においては、人間関係構築能力を含む幅広い能力が求められている一方、福祉の理念に基づいた運営が特徴的な生活介護事業所では、教育現場が進路に向けた指導を行う上で重視している点が必ずしも挙がらず、教員が児童生徒に身に付けさせたいと考える力との間に若干の差異が見られた。

しかしながら、どの種類の事業所においても、「最低限の日常生活動作」の習得が求められるという共通の意見が見られたことから、在学中に家庭と協力してこれらの技能を身に付けさせていくことの重要性が改めて浮き彫りになった。

また、高度な技能が求められる事業所になるほど、規則遵守能力やコミュニケーション能力が求められる傾向が見られたが、これは教員が将来、児童生徒に育成したいと考えている能力と多くが一致していることがわかった。

イ）余暇の充実

福祉事業所では定期的に余暇活動が設定されている一方、企業は主体的に余暇活動を設定することはなく、児童生徒が在学中に何らかの楽しみを見付けることの重要性が改めて浮き彫りになった。しかしながら、保護者アンケートの結果から、児童生徒の余暇の過ごし方が限定的であるケースや、そもそも楽しみを見出せていない児童生徒がいることが明らかとなり、自分が興味のあることを見付ける力やそれを楽しむ力を育成していくことの必要性を認識することができた。

ウ）今後の展望

アンケートの結果を、本校の「めざす児童生徒像の具体的な姿」と照らし合わせて分析したところ、「健やかにたくましく生きる子」「思いやりがある子」といった項目は、アンケート結果と多くの共通点が見られた。一方、「生き生きと学ぶ子」「生きがいを持ち努力する子」「思いをもって決められる子」といった項目については、アンケート結果に反映されている項目が比較的少ないことが明らかになった。

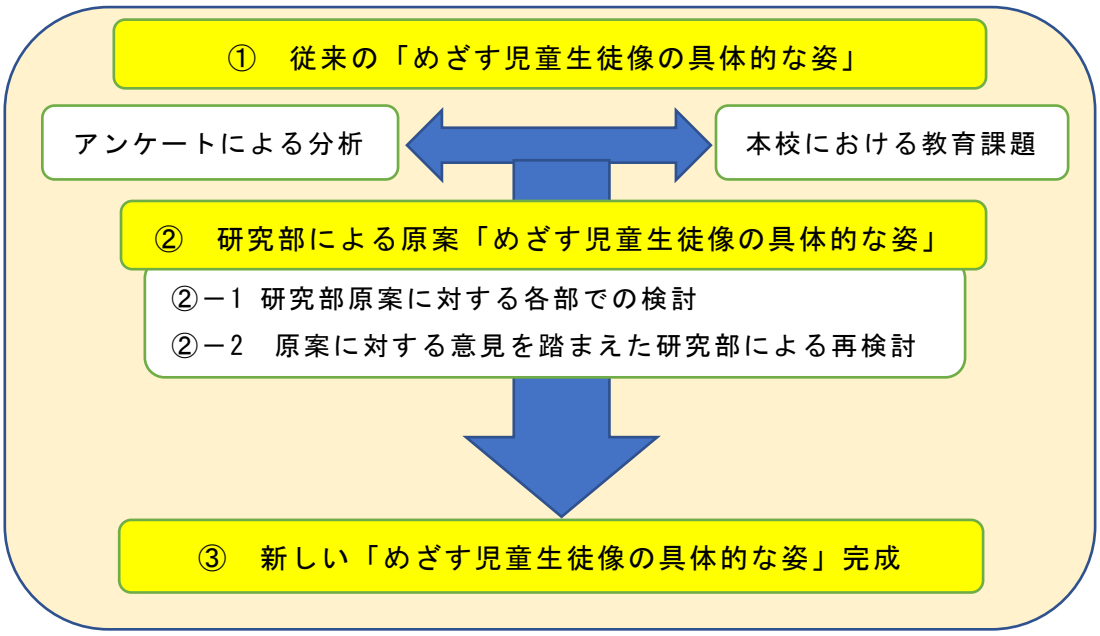
このことから、本校の「めざす児童生徒像の具体的な姿」に、現在の教育課題や今回のアンケート結果の一部を積極的に取り入れることで、新しい時代に求められるキャリア発達を支援する体制整備や授業づくりへとつながるのではないかと考え、次の段階で取り組むことにした。

（２）「めざす児童生徒像」の確認と具体的な力の見直し

①　研究の進め方について

本校では、育てたい子供像として「めざす児童生徒像」を掲げ、それを基に教育実践を行っている。その具体的な姿について、教職員間で共有を図りながらアンケートの分析結果を反映させるために、以下の計画（図Ⅲ-2）を立て研究を進めることにした。

研究にあたっては、まず研究部が原案を作成し、それを基に各部で協議を行った。その協議で出された意見を踏まえ、再度研究部を中心に検討を重ねる過程を経て、「めざす児童生徒像の具体的な姿」を策定することとした。



図Ⅲ-2　「めざす児童生徒像の具体的な姿」検討過程

表Ⅲ-5　従来の「めざす児童生徒像の具体的な姿」

めざす児童生徒像	めざす児童生徒像の具体的な姿
健やかにたくましく生きる子	○自らの成長を受け入れ健やかな体を育む子 ○生活習慣を確立し健康で安全に過ごす子 ○逆境に屈しないしなやかな心を育む子
生き生きと学ぶ子	○物事に興味関心を抱き、意欲的に取り組む子 ○基礎基本となる知識や技能を習得し、活用する子 ○自己選択・自己決定して自分の考えを表現する子
生きがいをもち努力する子	○憧れや希望を抱き、チャレンジする子 ○自分のことを理解し、自分のよさを発揮しようとする子 ○生き生きと働いたり余暇を楽しんだりする子
思いをもって決められる子	○自分の思いや考えをもてる子 ○自分の思いや考えを周りに伝えることができる子 ○自分の思いや考えを調整して生活できる子
思いやりのある子	○他者の存在を尊重し、よりよい人間関係を築く子 ○決まりや社会規範を理解し、自分で判断し行動する子 ○社会に向き合い豊かな感性を磨く子

② 研究部原案の作成

研究部では、新しい「めざす児童生徒像の具体的な姿」に関する原案作成に向けて、段階①で実施したアンケートの分析結果や本校の教育課題を踏まえた協議を行った。その協議の結果を基に、表Ⅲ-6の研究部原案を作成し、全教員に提示した。

原案作成に向けた協議内容（抜粋）

【健やかにたくましく生きる子】
○「生活習慣を確立し健康で安全に過ごす子」
アンケート分析や従来の具体的な姿に「自立」の表記がないことから、「生活習慣を確立し、自立した生活を送る子」という表記にする。
【生き生きと学ぶ子】
○社会生活に必要な姿として表記されている「社会に向き合い豊かな感性を磨く子」は、『思いやりのある子』よりも『生き生きと学ぶ子』の項目にあることがふさわしいのではないかという考えから移動させる。
【生きがいをもち努力する子】
○従来の「生き生きと働いたり余暇を楽しんだりする子」については、アンケート分析等から大切な項目であることから、一つの項目を二つに分けることにする。
【思いをもって決められる子】
○アンケート分析や本校の課題から、社会生活においては多くの人との関わりの中で自分の意思を表出することが大切であることが明らかになったことから「多様な人々との関わりの中で、自分の思いや考えを調整できる子」の項目を設ける。
【思いやりのある子】
○本校の課題である人間関係を構築する力を身に付けるには、ソーシャルスキルの他にも他者を思いやる力が必要なことから「物事に対して感動する心を抱く子」の項目を設ける。

表Ⅲ-6 研究部原案「新しいめざす児童生徒像の具体的な姿」

めざす児童生徒像	めざす児童生徒像の具体的な姿
健やかにたくましく生きる子	○自らの成長を受け入れ、心身ともに健やかな子 ○生活習慣を確立し、自立した生活を送る子 ○自分を大切にし、安全に気を付けながら生活する子 ○逆境に屈しないしなやかな心をもつ子
生き生きと学ぶ子	○物事に興味関心を抱き、意欲的に取り組む子 ○ものの見方や考え方を働かせて、主体的に学び、生活に生かす子 ○社会に向き合い豊かな感性を磨く子
生きがいをもち努力する子	○憧れや希望を抱き、チャレンジする子 ○自分のことを理解し、自分のよさを発揮しようとする子 ○責任と役割をもって、生き生きと働く子 ○自分の好きなことを見つけ、余暇を楽しむ子
思いをもって決められる子	○自分の思いや考えをもち、自己選択・自己決定できる子 ○自分の思いや考えを周りに伝えることができる子 ○多様な人々との関わりの中で、自分の思いや考えを調整できる子 ○決まりや社会規範を理解し、自分で判断し行動する子
思いやりのある子	○他者の存在を尊重し、よりよい人間関係を築く子 ○他者と共に協働し、学びあう子 ○物事に対して感動する心を抱く子

※下線は表Ⅲ-5からの変更箇所

③　研究部原案の検討～新しい「児童生徒像の具体的な姿」の策定

研究部が作成した原案については、各部で検討を行い、意見を出してもらうことにした。その後、各部から寄せられた意見を研究部で集約し、それを基に修正案を作成するための協議を実施し、新しい「児童生徒像の具体的な姿」(表Ⅲ-7)を策定することができた。

研究部原案に対する各部からの意見（抜粋）

＜小学部＞
○具体的な姿は、どのような実態の子どもを想定しているのか説明が必要である。
○イメージが共有できればよいのでは。具体的過ぎるとそこに当てはまらない児童生徒はどうしても出てくる。
＜中学部＞
○「健やかにたくましく生きる子」の「逆境に屈しない」を、「最後まで諦めずに取り組む」など少し分かりやすい表現にしてはどうか。
○生きがいをもち努力する子の「働く子」という表現は、社会参加につなげるためだと思うが職業に偏った感じがする。
＜高等部＞
○具体的な姿は、教育活動の特徴的なものを精選してあげる方が本校の特色が明らかになると思う。
○校訓の説明と具体的な姿を照らし合わせて書いた方がよい。

原案に対する意見を踏まえた研究部による協議内容（抜粋）

【健やかにたくましく生きる子】
○「逆境に屈しないしなやかな心をもつ子」
失敗が許されないように捉えることもでき表現としては厳しい。他の項目に含まれるようにする。
【生き生きと学ぶ子】
○「社会に向き合い豊かな感性を磨く子」
豊かな感性という表現が曖昧ではあるが、様々な学習の中で大切にされなければならないフレーズだと考える。
○「生き生きと学ぶ子」の具体的な姿としてのイメージが難しいので、従来の「思いやりのある子」に戻す。
【生きがいをもち努力する子】
○「責任と役割をもって、生き生きと働く子」「自分の好きなことを見つけ、余暇を楽しむ子」
従来、一つの文章だったものを分かりやすさを求めて分けたが、「めざす児童生徒像」の各項目数を三つに統一した方が良いとの意見から元の表記に戻すことにする。
【思いをもって決められる子】
○「自分の思いや考えをもち、自己選択・自己決定できる子」
自己選択・自己決定の表現は、校訓の定義で詳細に記されていることもあり、改めて取り上げる必要はないのではないかという意見から削除することにする。
○「多様な人々との関わりの中で、自分の思いや考えを調整できる子」
多様性を求められる時代ではあるが、児童生徒にとって必要な力を分かりやすく表現するため「多様な→様々な」に変更する。
○「決まりや社会規範を理解し、自分で判断し行動する子」
社会のルールを守った上でその中で自分らしさを発揮して行動できる力が大切であることから、「生き生きと学ぶ子」に変更する。
【思いやりのある子】
○「物事に対して感動する心」
心豊かにを理解できるようになるためには感性が必要。そのため、「社会に向き合い豊かな感性を磨く子」を戻す。

表Ⅲ-7　新しい「めざす児童生徒像の具体的な姿」

めざす児童生徒像	めざす児童生徒像の具体的な姿
健やかにたくましく生きる子	○自らの成長を受け入れ、心身ともに健やかな子 ○生活習慣を確立し、自立した生活を送る子 ○自分を大切にし、安全に気を付けながら生活する子
生き生きと学ぶ子	○物事に興味関心を抱き、意欲的に取り組む子 ○ものの見方や考え方を働かせて、主体的に学び、生活に生かす子 ○決まりや社会規範を理解し、自分で判断し行動する子
生きがいをもち努力する子	○憧れや希望を抱き、チャレンジする子 ○自分のことを理解し、自分のよさを発揮しようとする子 ○生き生きと働いたり余暇を楽しんだりする子
思いをもって決められる子	○自分の思いや考えをもてる子 ○自分の思いや考えを周りに伝えることができる子 ○様々な人々との関わりの中で、自分の思いや考えを調整できる子
思いやりのある子	○他者の存在を尊重し、よりよい人間関係を築く子 ○他者と共に協働し、学びあう子 ○社会に向き合い豊かな感性を磨く子

※下線は表Ⅲ-5からの変更箇所

④　まとめ

新しい「めざす児童生徒像の具体的な姿」の検討においては、アンケートの分析結果や本校が直面する教育課題を踏まえ、これからの時代を生きる児童生徒に必要な力を「めざす児童生徒像の具体的な姿」として明確化することができた。また、この検討を通じて、「めざす児童生徒像」と各部の教育活動との関連性を再確認する機会にもなった。これらの成果は、主体性を育成するための授業づくりや本校におけるキャリア教育の在り方を検討するための基盤を築くものとなったと考えている。

（3）キャリア教育に係る本校の取組

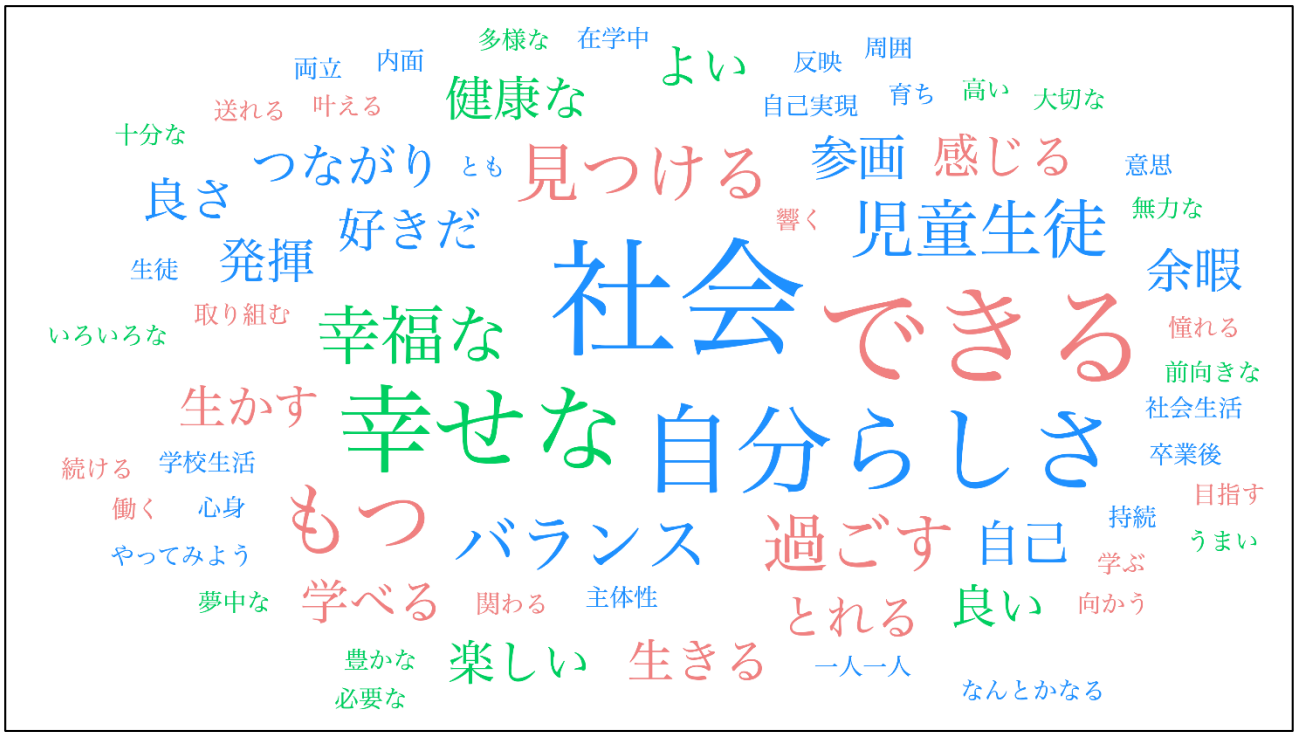
①キャリア教育全体計画

本校では、キャリア教育全体計画を作成していたものの、学校全体として有効活用や全職員が内容を十分把握するまでには至っていなかった。文部科学省によると「全体計画は、自校のキャリア教育の基本的な在り方を内外に示すとともに、学校の特色や教育目標に基づいたキャリア教育の教育課程への位置付けを明確にするものであり、キャリア教育を体系的に推進していくために欠かせないものである」と示されている。今回（第25次研究）の研究主題、「生涯をとおして自ら学ぼうとする子供を育てる授業の在り方」はキャリア教育に大きく関わっており、言うまでもなく全体計画は作成して終わりというものではなく、学校全体でキャリア教育を推進していくために不可欠なものである。しかしながら冒頭述べたように本校のキャリア教育全体計画は、十分機能していなかった。そのような現状を目の前にし、進路指導部を中心に本計画を緊急に見直す必要性を感じた。さらに、作成後も運用できるものになるように改変していかなければならないと考えた。

そこで本研究の2年目に、キャリア教育全体計画の見直しに着手した。まず初めに、これまでの全体計画がなぜ活用されていなかったのかについて、その要因を整理することにした。全体計画を作成した当時の研究主任に作成過程などについて話を聞くと、そのほとんどを研究主任が担っていたとのことだった。それ故、作成過程を知らない職員がほとんどで、本計画について学校全体で十分な周知がなされていなかった。次に本計画の全体像を改めて見てみることにした。第一印象として文字が多く、小中高のつながりや本校として何を軸にキャリア教育を進めていくかということが明確に表記されていなかった。しかしながら、文字が多いという部分については、本計画に限ったことではない。教育現場には様々な計画書が存在し、それらのほとんどが文章表記したものになっている。本計画は、一部、図式化している箇所もあったが、全体として文字が多いという印象が強く残るものであった。これにより、小中高のつながりが見えにくかったと考えられる。さらに軸となるものも明確ではなかったため、十分な活用まで至らなかったのではないかと思う。

要因の整理が終わった後、進路指導部が中心となり新たなキャリア教育全体計画の見直しを始めた。まず、県内の特別支援学校や全国の先進校が作成しているキャリア教育全体計画を集め、様式や内容を見て本校の全体像を作成する際の参考とした。以前の全体計画には記載がなかったが、多くの学校で「自校におけるキャリア教育全体目標」を掲げていた。そこで本校も新しく目標を立てることにした。全体目標を考える際、キーワードとして挙げた言葉が「ウェルビーイング」である。この言葉は昨今よく耳にするが、医療現場や福祉現場では早くからこの言葉が使われていた。医療現場におけるウェルビーイングは「健康」、福祉現場におけるウェルビーイングは「福祉」とそれぞれ理解されている。本計画の全体目標に「ウェルビーイング」という言葉を掲げたとき、教育現場におけるウェルビーイングとは何か、本校におけるウェルビーイングとは何かを定義付けなければならないと考えた。そこで全職員に対し、本校におけるウェルビーイングとは何かについて自由記述のアンケートをとり、その結果をテキストマイニングにかけて分析した（**図Ⅲ-3**）。結果は卒業後、社会の一員として生きていく際も健康で自分らしく、楽しく過ごしていってほしいという本校職員の思いが現れたものとなった。このことを受け、本校におけるウェルビーイングの捉えを「人・地域社会とのつながりを大事にし、様々な場所で自分らしさを発揮しながら、安心して、健康で幸せな生涯を送ることができること」とし、在学中にそのようなことを目指せる力の育成を本計画の全体目標とした。この目標については、明文化した後、改めて全職員へ提案し了承を得た。

次に本計画の核となる三本柱、「役割・仕事（Work）」、「楽しみ・余暇（Enjoyment）」、「生活・健康



図Ⅲ-3　職員アンケートをテキストマイニングにかけた結果

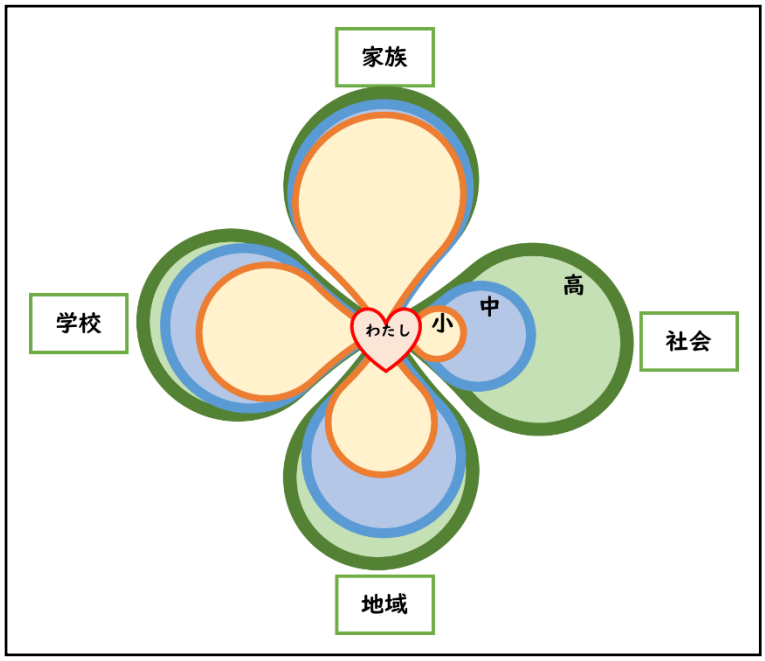
(Life・Health)」を提案した（各項目を英単語にした際、一文字ずつ拾いウェルビーイングのウェル＝Well と関連付けた)。この三本柱は、ウェルビーイングの実現を目指す際に必要となると共に、小・中・高の 12 年間を意識した授業づくりにも関連するものである。また、後に紹介するセルフサポートブックにもつながるものとなっている。全体像が少しずつ固まってきたところで、各部のキャリア教育の方針を考えることにした。部方針の原案については、先に挙げた三本柱を基に、それぞれの発達段階に応じたものになるよう各部主事に作成協力を依頼した。部で方針を検討した後、それらを各部主事で持ち寄り、文言や表現の統一や小・中・高と系統性がとれたものになっているかの確認を行った（図Ⅲ-4)。完成したものを部の職員に提案し、了承を得られた後、キャリア発達に向けて各部で育てたい力を検討してまとめた。

キャリア教育　部方針		
小学部【「生きる喜び」の基礎づくり】	中学部【「生きる力」の基礎づくり】	高等部【「生きる喜び」「生きる力」を活用する力を育む】
○いろいろな役割を経験し、協力しようとする意欲や態度を育む。	○できることや得意なことを生かし、それぞれの役割を果たしながら協力してやり遂げる意欲の向上を促す。	○社会で主体的に活躍するための知識や技能を習得し、周りの人と協働するための表現力を身に付けることができるように促す。
○基本的生活習慣を身に付け、健康で丈夫な体を育む。	○日常的に運動を継続して行い、基礎的な体力の向上を図るとともに、規則的かつ社会規範に応じた生活習慣の確立を促す。	○生涯にわたり、健康に生きるために、自己管理する力を育めるように促す。
○様々な活動場面を設定し、身近なことへの興味・関心を広げるように促す。	○興味・関心の拡大を図り、学習をとおして生活の楽しみにつなげようとする意識の向上を促す。	○自分に合った楽しみや余暇の過ごし方を選択・決定し、生活の中で生かすことができるように促す。

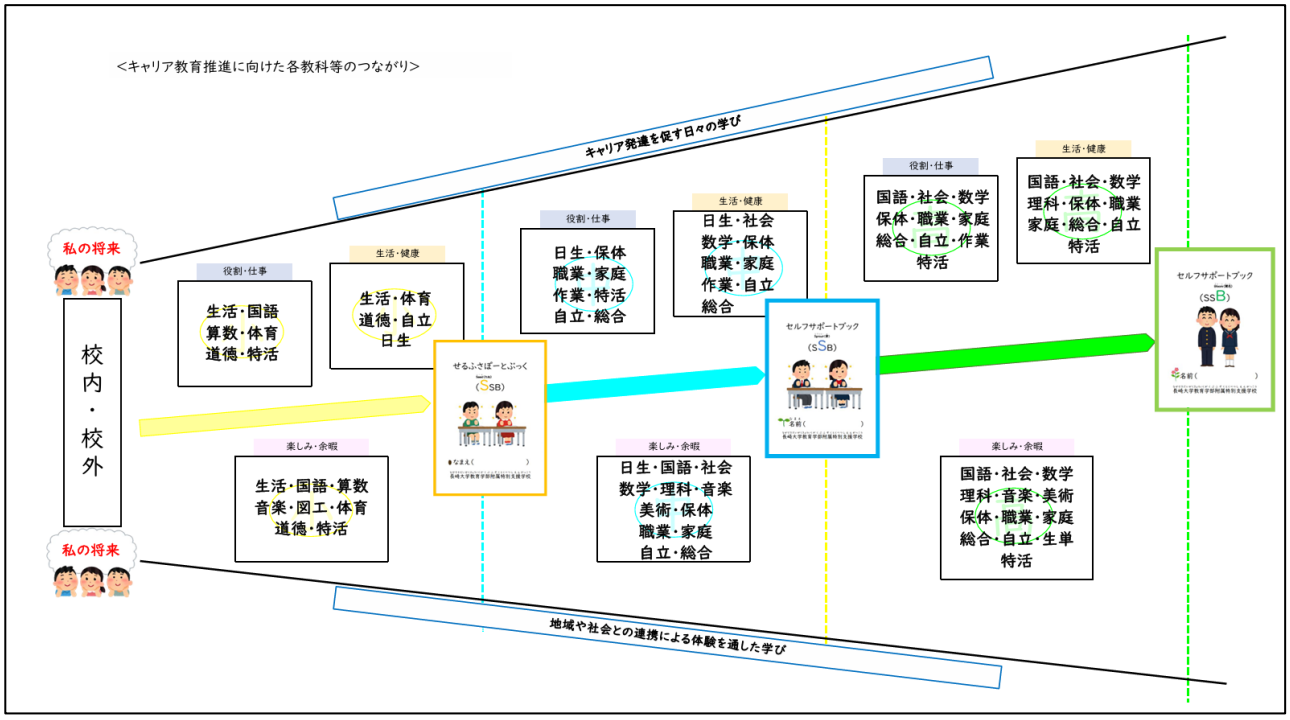
図Ⅲ-4　キャリア教育　部方針

従来の全体計画がうまく活用されなかった要因の一つとして、「文字が多い」ということを述べたが、この要因を解決すべく児童・生徒と周囲を取り巻く関係者とのつながりを「ふとく☆キョウイク

ローバー」という図を使って表すこととした（図Ⅲ-5）。児童・生徒の周りにいる関係者として「家族・学校・地域・社会」の四者を置き、発達段階に応じた四者との関わりの深さをクローバーの葉の大きさで表した。小学部段階では、家族や学校（担任・副担任）との関わりが必然と大きくなる。中学部段階では、市内散策や附属校との交流など地域との関わりが増えると共に、社会との関わりも少しずつ見えてくる。高等部段階では、卒業を控えた時期となるため現場実習などを通し、地域や社会との関わりが大きくなる。しかし、どの段階においても家族や学校がゼロになることはなく、根底となるところでのつながりは深く存在する。この関係が一目瞭然となるように図を作成した。さらに、「キョウイク」を片仮名表記にした点は、二つの「キョウイク」が関係していることを表している。家庭や学校の「教育」と地域や社会における「共育」である。児童・生徒たちが様々な人や環境に触れながら育っていく姿をネーミングに重ねた。最後に小・中・高のつながりが見えにくいことや日頃の授業で学んだことのつながりの見えづらさを解決するために「キャリア教育推進のための教育内容とのつながり」を考案した（図Ⅲ-6）。本計画の三本柱に日頃の授業を当てはめたものである。これにより小・中・高の学びのつながりを意識した授業づくりの一端を担うことができ



図Ⅲ-5　ふとく☆キョウイクローバー



図Ⅲ-6　キャリア教育推進のための教育内容とのつながり

ればと考える。

②セルフサポートブック（SSB）の全校化

本校高等部では、生徒が主体的に作成・活用できる支援ツールとして「生徒版個別の移行支援計画書＝セルフサポートブック（以下 SSB)」を導入している。これは、本人・保護者が中心となって作成するもので、表Ⅲ-8 に示しているように 5 つのカテゴリー、16 のシートから構成されている。元来 SSB は高等部のある学年で作成・活用してきたものだが、高等部全体で取り組むことが決まり、教育課程上に位置付けられたことから、指導にあたる高等部職員や作成を依頼する保護者、さらに進路先となる外部機関へ SSB の取組や作成意義などの周知を促すため「SSB 活用冊子」を作成した。本冊子配付後、SSB の内容の充実や効果検証を図るため、外部機関に向けて現場実習や卒業後の受入れに際して役立つと思われるものを各カテゴリーから選んでいただいたり、自由記述で意見を募ったりした。その結果、各カテゴリーから一つずつ 8 割以上の支持を得たシートがあった（表Ⅲ-8)。

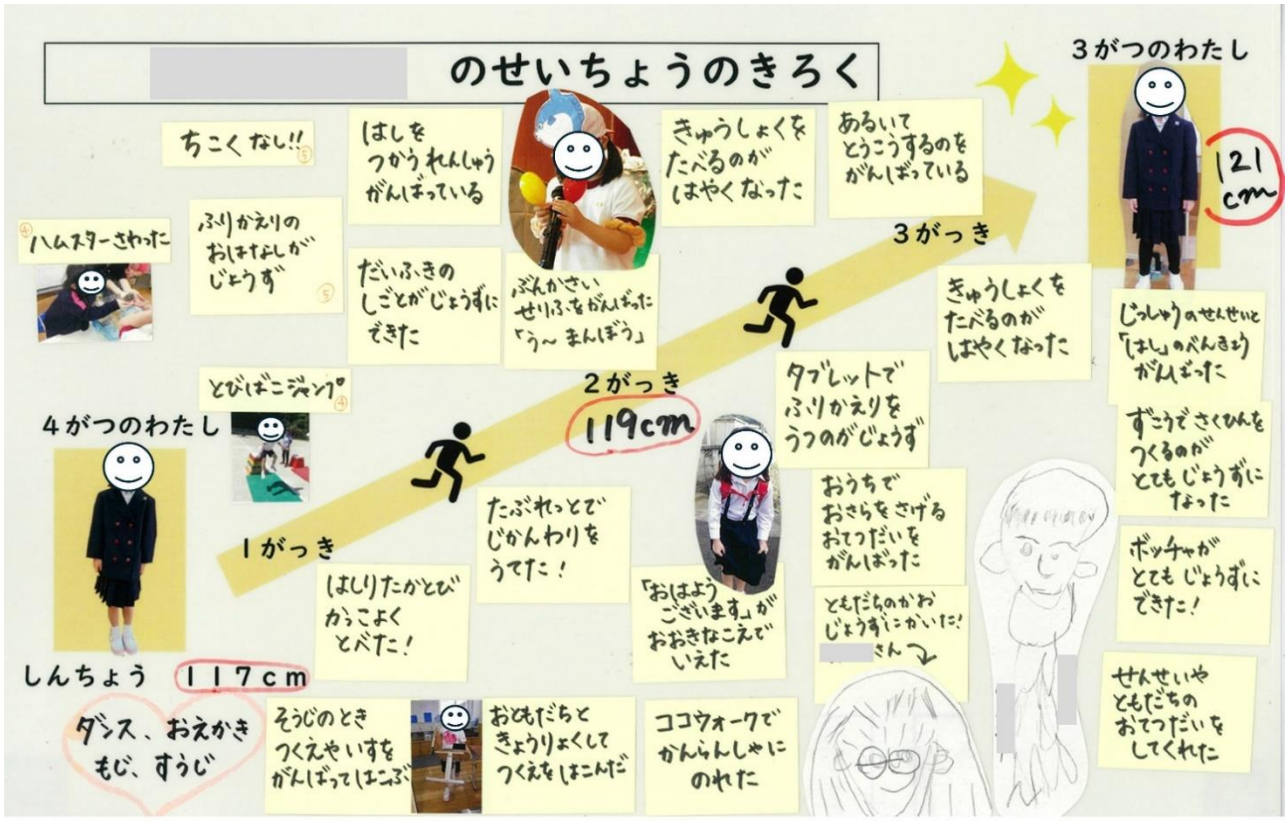
表Ⅲ-8　関係機関へのアンケート結果

カテゴリー		シート		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	計
1	プロフィール	(1)	基礎情報	○	○			○	○	○	○		○	7
		(2)	自分のからだ		○	○		○	○	○	○	○	○	8
2	私の周りのサポーター	(1)	学校			○	○	○						3
		(2)	家族				○	○	○		○		○	5
		(3)	福祉	○			○	○	○		○	○	○	7
		(4)	病院	○		○	○	○	○		○	○	○	8
3	得意なこと・苦手なこと	(1)	チェックリスト		○		○	○	○	○	○		○	7
		(2)	私が見つけた得意と苦手	○	○	○		○	○	○	○	○	○	9
4	現場実習の履歴	(1)	記録	○			○	○	○	○	○	○		7
		(2)	写真	○										1
5	進路決定プロセス	(1)	高等部○年生で頑張る目標			○				○			○	3
		(2)	人生設計図	○			○	○		○	○	○	○	7
		(3)	夢ピラミッド	○				○	○	○	○			5
		(4)	進路決定ガイドライン	○			○				○			3
		(5)	座右の銘				○	○						2
		(6)	ICFロボット君	○		○	○	○	○		○	○	○	8

自由記述については、おおむね好評価を得たが、余暇に関する情報が欲しいことやアレルギーについては食物だけでなく、日常生活を送る上で支障が出るものについてより詳しい情報が欲しいという声があった。そこで、余暇やアレルギーについてより詳細な情報が記入できるシートの作成に着手した。新たなシート作成の過程で、余暇については高等部 3 年間では、収集できる情報量に限りがあること、また、SSB は自己理解を深めるツールとしての機能も有しているため、早期から情報収集や整理を行うことで情報の蓄積だけでなく、自己理解の深まりにも効果が期待できるのではないかと考え、小中学部版の SSB を作成し、この取組を全校に導入することとした。

小中学部版の SSB 作成にあたっては、教育支援部と協力しながら内容の検討を行った。令和 6 年度は試行的に SSB 作成に取り組んでいるため、その効果検証については 2 月に職員アンケートをとり、内容の検討等を行う予定である。小中学部では、高等部の SSB につながるように「私の成長記録」というシートをそれぞれ作成した。小学部（図Ⅲ-7）は、「自分の好きなこと・できることを知る時期」と位置付けた。自己肯定感を高めることを大事にしたいと考え、「できたこと・褒められたこと」を教師が付箋紙に記入し、A3 サイズの用紙に貼る方法をとった。併せて、自分の成長を振り返ることができるように活動の様子を撮った写真なども貼り、児童がいつでも目にすることができるように、教室

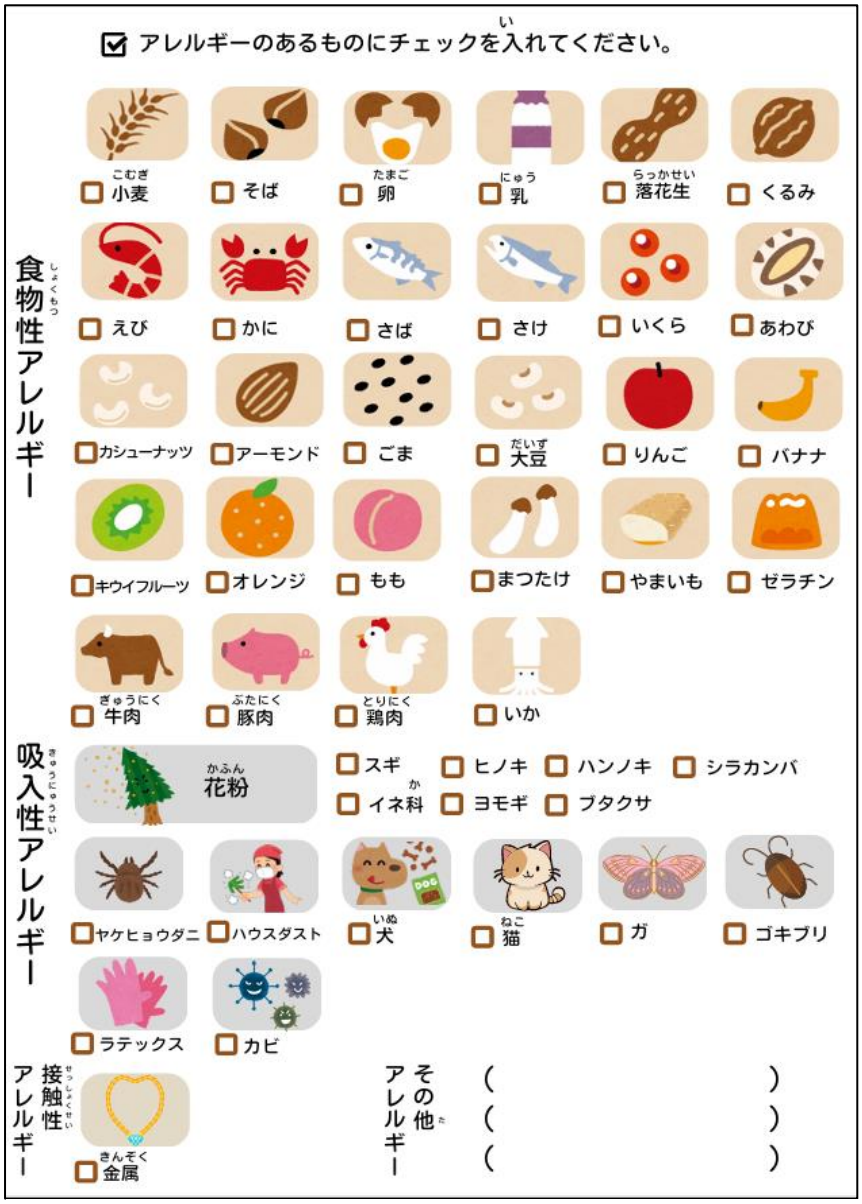
内や廊下に掲示するようにした。小学部職員からは、付箋や写真が増えることに喜びを感じる児童の姿や様々な場面で意欲の向上が見られたとの報告があった。



図Ⅲ-7　わたしのせいちょうのきろく（小学部版）

図Ⅲ-8　私の成長の記録（中学部版）

次に中学部だが、「苦手なことがある自分を受け入れる時期」と位置付けた。高等部を前に、苦手なことがある自分も肯定的に受け入れる気持ちをもってほしいと考え、「得意なこと」に加え「苦手なこと」も教師や保護者と対話しながら付箋紙の色を変えて記述する方法をとった（図Ⅲ-8）。中学部職員からは、苦手なことを書くことに抵抗感があり、得意なことやできたことばかり書き出す生徒がいたとの報告があった。しかし、その生徒がある日、高等部の教室を訪れた際、憧れの先輩が苦手なことを書き出したホワイトボードを目にし、驚きの声を上げたと同時に「〇〇先輩にも苦手なことがあるなら、僕にも苦手なことがあってもいいのかな」とそばにいた職員に話したというエピソードを聞いた。それから少しずつ苦手なことも受け入れようとするなど気持ちの変容が見えたとのことだった。部を越えて、このような変化や学びが見られたことは、今後 SSB を全校で取り組む上で様々な効果が期待できるものとなった。最後に高等部についてだが、余暇に関するシートについては「高等部におけるキャリア教育の取組について」で述べる。アレルギーに関するシートについては、養護教諭に相談したところ作成協力を得ることができ、分かりやすいシートが完成した（図Ⅲ-9）。当初は、高等部生徒を視野に本シートの活用を考えていたが、完成したものが小中学部の児童・生徒にとっても分かりやすいもので、アレルギーについても早期から本人や周りの支援者が知っておくべき重要な項目であることから、小中学部にも同シートを追加しようと考えている。高等部段階であっても自分のアレルギーについて知らない生徒は少なくない。従って本シートの作成には、保護者の協力は必須である。長期休業中などに SSB を自宅に持ち帰った際、家族と一緒に作成し、自分のことを知る（自分自身に興味をもつ）きっかけになることを期待している。小中学部の児童・生徒にも同様のことを期待している。

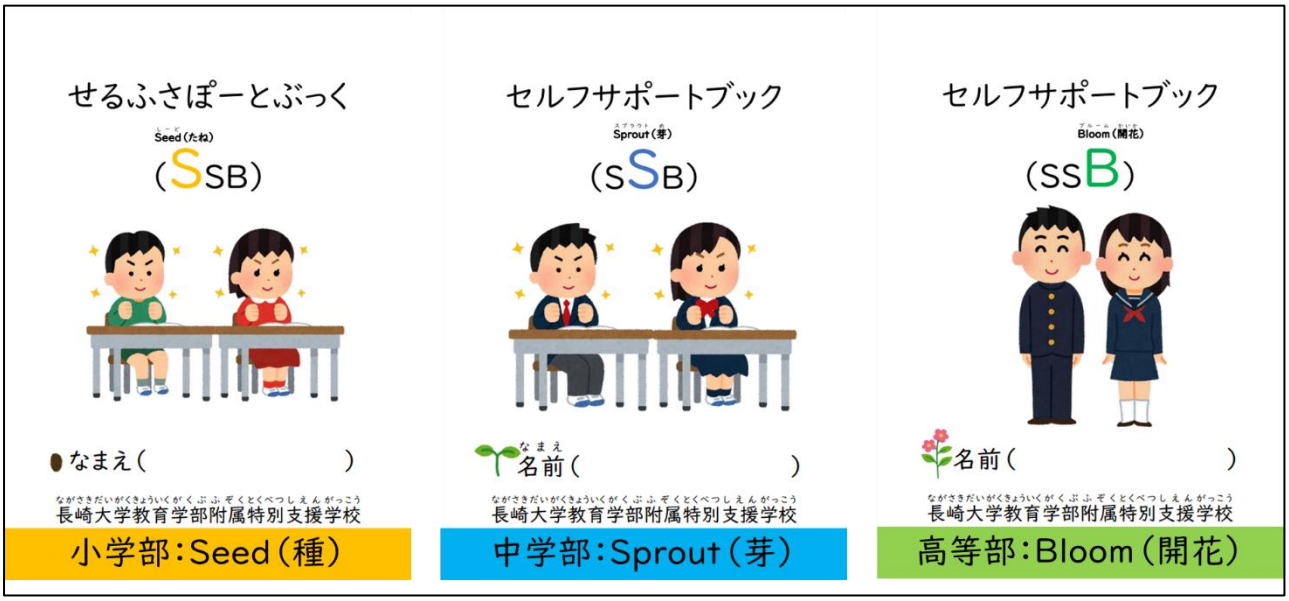


図Ⅲ-9　アレルギーに関するシート（高等部）

SSB については、今年度から全校で取り組み始めたため、全職員へ作成の意義や各シートの意図を十分周知することができていない。そのため、SSB 導入について肯定的でない声があるのも事実である。この件については、以前高等部で作成した活

用冊子が効果的であったことから、小中学部版 SSB の活用冊子を作成し、周知のツールとして活用する予定である。指導にあたる職員が、また違う書き物が増えたという誤解や負担感を抱くことがないように、また、SSB 作成が児童生徒にとって有効なツールになり得ることを検証できるように、キャリア教育を推進する進路指導部として理解や働きかけに努めていきたい。

最後に、「セルフサポートブック」の名称についてだが、作成当初は「SSB＝Self-Support Book」としていた。ところが全校化するにあたり改めて各部段階の児童生徒の姿や 12 年間の学びのつながりを考えたとき、新たな SSB が生まれた。小学部段階を Seed（種）、中学部段階を Sprout（芽）、高等部段階を Bloom（開花）と表したものである（図Ⅲ-10）。児童・生徒一人一人が違う**種**を持って、いろいろな経験を積み重ね、様々な場所で自分らしい**芽**を出し、自分の得意・苦手をしっかり把握した上で将来について考え、自分らしい色の**花**を咲かせて社会で活躍していく姿をイメージした。在学中はもちろん、社会に出た後も在学中と同じサイクル（Seed→Sprout→Bloom）を経て、新しいステージで種をまき、芽を出し、開花していく…ということを生涯の中で何度も繰り返しながら自分らしく、健康で幸せな日々を過ごしていくこと（ウェルビーイングの実現）ができる未来を期待したい。



図Ⅲ-10　SSB の表紙（小・中・高）

③　小学部の取組

ア）セルフサポートブック（SSB）の取組状況

小学部では、各学級の児童の生活年齢等を踏まえて、各担任が児童に作成できると判断した項目から始めたため、「マイプロフィール」は全学級が作成したが「私の周りのサポーター」について低学年では作成を見送るなど、現在は取組状況が学級で異なる。また、「学期目標」の具体性、「成長の記録」に貼る写真やコメントの掲載の仕方など、児童への取り組ませ方も学級で異なっている。各学級からは、SSB 活用の成果と難しさの両方が意見として挙がっており、今後は各学級で取り組んだことを共有しつつ、小学部としてのよりよい活用の仕方について検討を行っていく必要がある。

表Ⅲ-9　SSB の取組に関する各学級からの感想や意見等

- 目標の振り返りについて、少しずつだが「できた/できない」を児童が選択する際に、よく考える姿が見られるようになってきた。
- 児童によっては、家庭でのお手伝いが活発になるなど取組の成果がでている。
- 発達年齢を踏まえれば、“学期”“１年間”という記憶の留まりにくい長いスパンではなく、もう少し短いスパン（行事ごと、月ごとなど）で振り返りの経験を重ねる方がよいのではないか。
- 発達年齢が低い児童ほど、目標や振り返りを分かりやすく示す工夫がうまくできずに悩む。
- 「成長の記録」を上手く活用できなかった。学級活動や生活の授業など、どこでどのように取り組んでいくのか整理をしておけばよかった。
- 今年の目標、学期の目標・・・と子供が意識する目標が多すぎて知的障害が比較的軽度の児童でも立てた目標を忘れがちだったので、立てる目標をもう少し精選してもよいのではないか。

イ）キャリア教育全体計画を活用した教育課程見直しの取組

○特別活動における学級活動の題材の整理

特別活動は「キャリア教育の要」（学習指導要領総則）であるが、小学部では週 1 時間の学級活動において、内容を踏まえた題材の整理が十分でなく、また、キャリア教育との関連についても検討ができていなかった。そこで改めて、学習指導要領の内容と「キャリア発達に向けて各部で育てたい力」と照らし合わせることで、令和 7 年度に学級活動で取り組む題材の整理を行った。（図Ⅲ-11 参照）

内容	題材	時数	各教科等との関連
(1) 学級や学校における生活づくりへの参画			
ア　学級や学校における生活上の諸問題の解決	①学級のきまり	1	生活「じぶんでできるよ」 保健「暑い日のすごし方」 保健「プライベートゾーン」 道徳「きまりを守ろう」
	②学校のきまり	1	
イ　学級内の組織づくりや役割の自覚	③係決め	3	生活「春(秋)となかよし」「花を育てよう」 ※植物/生き物の世話 道徳「生き物にやさしく」
	④生き物をお世話しよう	1	
ウ　学校における多様な集団の生活の向上	⑤仲良く遊ぼう(学級レク)	3	生活「面白い遊びがいっぱい」 道徳「ともだちとなかよく」 道徳「みんなのために」
	⑥附属小学校と交流学習をしよう	2	

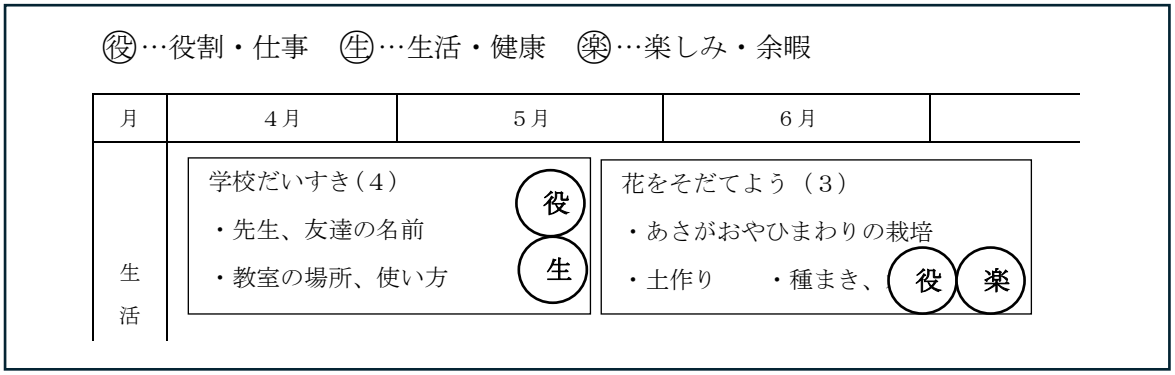
○キャリア教育(全体計画)との関連

役割 仕事	○係の仕事や当番活動等の役割に取り組み、成功体験を重ねる。	③④⑯
	○社会や身近にある簡単な決まりや約束を守る。	①②⑪⑫
	○校外学習や体験的な学習を通して、教師や友達と協働・協力する場面を経験する。	⑥

図Ⅲ-11　学級活動とキャリア教育との関連性の整理（一部抜粋）

○生活科の各単元との関連の整理

教師が授業作りを行う際に、キャリア教育の視点を意識して題材選びや学習活動を考えていけるように、まずは生活科について、各単元の内容と本校が考える「キャリア教育を支える三本柱（役割・仕事、生活・健康、楽しみ・余暇）」とを照らし合わせ、関連が深いと思われるものを整理することから始めている。図Ⅲ-12 は、現在整理中の資料の一部である。



図Ⅲ-12　小学部生活科の各単元とキャリア教育の関連性の整理（一部抜粋）

④　中学部の取組

ア）授業とセルフサポートブックの関連

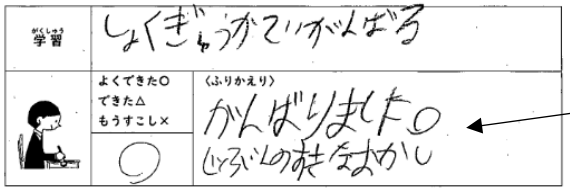
セルフサポートブックには、毎学期ごとに生徒が目標を立て、学期末に振り返る「○年生○学期がんばること（目標）」というシートがある。中学部では、セルフサポートブック導入以前から、学期ごとに生徒が目標を立て、学期末に振り返るという取り組みを継続して行ってきているが、これまでの課題として、学期末まで生徒が何を頑張って、何が難しかったかを覚えておくことが難しく、直前に学習した内容に関する記述に偏りがちだった。

また、目標設定と振り返りは学級での活動であるが、実際の授業担当は担任とは別であることも多く、取り組みにくさがあることも課題であった。そこで、本研究で、振り返りに重点を置いた授業づくりを行った際に作成した「振り返りシート」を蓄積していくことで、振り返りがより充実するのではないかと考えた。活用の仕方は以下のとおりである。

1　授業担当者が、授業中に振り返りシートを生徒と一緒に作成する。
2　振り返り専用のファイルに教科ごとに振り返りシートを保管する。
3　学期末の振り返りの時間に、振り返りシートを見ながら生徒と担任が学習の様子を振り返る。

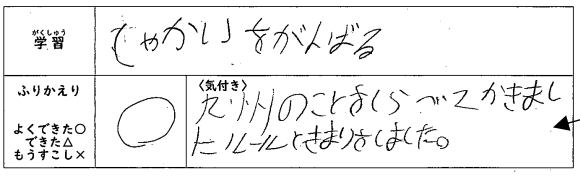
実際の授業では、振り返りシートで書いた自分の感想を読み直すことで、何を頑張ったか思い出すきっかけとなった。振り返りシートに添付している写真は、授業時に自分で選んだ写真であるため、教師が選んで提示する写真よりも関心をもって見ることができた。

研究前



具体的な内容の記述はなく、直前に学習したことを記載するパターンが多

研究後



授業の内容を詳細に記述することができる。

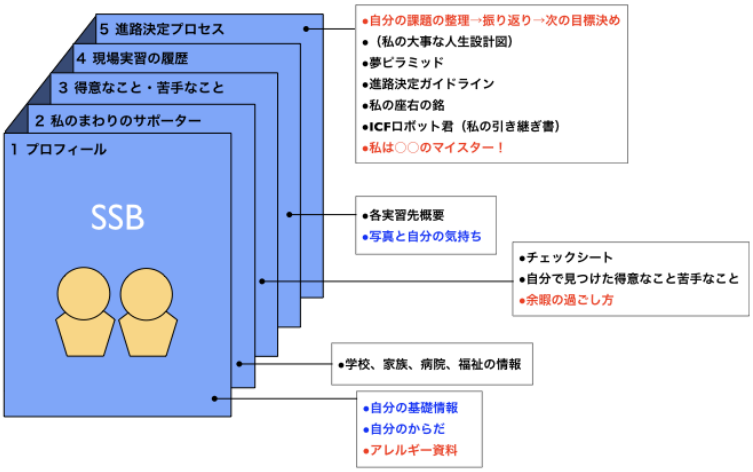
また、成長の記録については、こまめに記録する必要があることから、毎日生徒が目にすることができる位置に掲示し、日々の記録を残していくことにした。記録の仕方については、中学部の生徒にとって、難しかったことや苦手なことに気付けたことも成長の一部だと捉えることが難しかったため、成長の記録に残すことは、主に「頑張ったこと」と「楽しかったこと」とした。記録をつけることで、自分の成長が可視化され、「前は～だったけど、今は～だ。」と生徒自身が気付きやすくなった。教室に掲示したことで、自分の成長の記録だけでなく、友達の成長の記録も見ることができるため、友達が書いていることを見て、「自分もこんなことができるようになったな」と考えている様子もあった。

図Ⅲ-13　教室掲示の様子

⑤　高等部におけるキャリア教育の取組について

ア）セルフサポートブック（高等部版）の取組

高等部では、生徒が主体的に作成・活用できるツールとして「生徒版個別の移行支援計画書＝セルフサポートブック（以下 SSB)」を導入している（勘田ら，2022)。SSB は、自己理解を深めることや卒業時の引継ぎの場における情報伝達に有効なツールの一つとなっており、進路先からは生徒に関して知りたい情報がまとめられているため、今後の目標設定に役立つとの評価を得ている。



図Ⅲ-14　高等部版セルフサポートブックの構造図

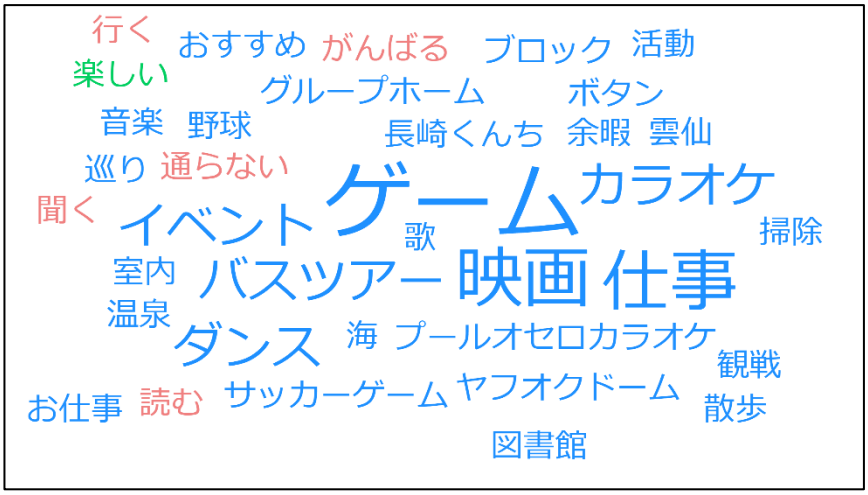
SSB 作成は令和 3 年度から高等部の教育課程上に位置付けられた。現在は職業、ホームルーム、総合的な探究の時間などで作成に取り組んでいる。SSB は(図Ⅲ-14)に示すように、「1 プロフィール」、「2 私のまわりのサポーター」、「3 得意なこと・苦手なこと」、「4 現場実習の履歴」、「5 進路決定プロセス」の 5 つのカテゴリーで構成されており、シートは合計 19 種類の項目からなっている。カテゴリー1・2 では、特に個別の教育支援計画と内容をリンクさせ、3 は自己理解、4 は現場実習、5 は個別の移行支援計画につながる内容として位置付けた。各シートの作成にあたっては、対象生徒が知的障害であることから、自己理解を促す支援に工夫が必要となる。すなわち、生徒たちは自分の周りにある様々な情報を捉えにくいため、生徒自身が理解でき、イメージしやすく活用しやすい情報にするため、情報の可視化を大事にした。

SSB は生徒自ら作り上げていくものであること、作成過程では、生徒自身が「自分のことをより知るため」、「自分のことをより周りの人に分かってもらうため」に作成するものであることを授業開始時に毎回生徒たちと確認し、意識付けを図っている。併せて、自身に成長や変化が見られた場合は、随時、情報を更新していくことも確認した。さらに、夏季休業など長期の休みに入る際は、SSB を自宅へ持ち帰らせ、不足している情報や加除修正が必要な箇所を保護者に確認してもらうこととしている。教師との対話だけでなく、家族と対話しながら作成していく過程は SSB の特徴の一つである。

イ）余暇の情報の追加

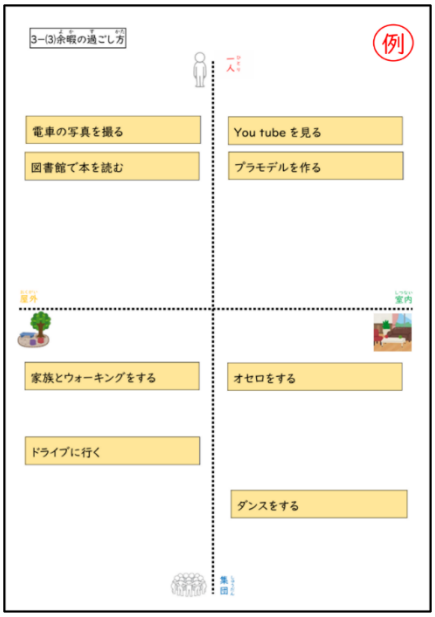
前述したように高等部全体で SSB 作成に取り組むことを受けて、直接指導にあたる高等部職員や作成に協力を依頼する保護者、さらに現場実習や卒業後の進路先となる事業所に向けて、SSB の取組や作成意図などを周知するため、活用冊子を作成した。活用冊子配付に併せて、事業所には SSB の内容を見ていただき、各シートの中で現場実習や卒業後の受入れに際して役立つと思われるものを選んでいただくアンケートや現シート以外に事業所として必要な情報がないか書いていただくように依頼した。後者について多かった意見は「余暇の情報が知りたい」というものだった。確かに、活用冊子を作成した時点では余暇に関する情報を記入するシートがなく、どちらかといえば職業寄りのシートが多かった。しかし、社会人になった後も楽しみをもつことや余暇の充実は、日常生活を送る上で大事

な項目となる。そこで、その必要性を探るため昨年度の同窓会に参加した同窓生に「今の楽しみは何ですか」というアンケートをとり、25 名の同窓生から回答を得た。その結果、約 9 割の同窓生が何らかの楽しみをもっていた（図Ⅲ-15）。一見、同窓生のほとんどが楽しみをもっているという、うれしい結果だが、一方で 1 割の同窓生は無回答で「楽しみがない」ということが明らかになった。また、楽しみをもっている同窓生もゲームやダンス、映画など在学時からの楽しみとして続けているものが多く、余暇の広がりは見られなかった。余暇は私たちの生活には欠かせない活動の一つで、ストレス社会と言われている昨今、特にリフレッシュできる活動の重要性がうたわれている。



図Ⅲ-15　同窓生アンケートをテキストマイニングにかけた結果

そこで、SSB にも余暇に特化したシートの必要性を改めて感じ、令和 6 年度から新しく追加した。余暇の新しいシートの様式は、縦軸を活動人数（一人～集団）、横軸を活動場所（室内～屋外）で表した 4 象限のグラフとした（図Ⅲ-16）。活用方法は、まず生徒たちが現在、休日に行っていることについて自由に付箋紙に記述する。次にこれからやってみたいことについて別の色の付箋紙に記述し、グラフに整理していくという流れにした。ただし、何もない状態から新しい余暇や楽しみを生徒本人が考えることに難しさを感じたため、高齢者向けデイサービス等で用いられている「NPI 興味・関心シート」を活用し、それらを提示して選択させる流れで進めていく。実践はこれからになるが、どのような生徒の様子が見られるか楽しみである。



図Ⅲ-16　余暇の過ごし方シート

今後は、昨年度作成したキャリア教育全体計画を活用しながら、NPI 興味・関心シートに記載されている余暇活動が、どの授業と関連しているか整理し、授業につなげることができる部分は、大いに活用していきたい。また、本シートを教室や廊下などに掲示し、他者の余暇に興味を抱いたり、一緒にやってみたりするなど生徒たちの興味・関心の幅を広げることにつなげていきたい。

≪参考文献≫

○勘田・鈴木・石川（2022）「知的障害特別支援学校高等部の進路指導における生徒版個別の移行支援計画：セルフサポートブックの活用とその効果」長崎大学教育学部教育実践研究紀要, 21, pp. 35-44

３　第Ⅱ期研究（3 年目）

（１）児童生徒が主体的に学習に取り組むための授業スタイルの確立と実践及び検証

①主体性を育む授業の手立て「附属スタイル」の作成

第Ⅰ期研究では、新しい時代を生きる子どもたちが必要な力を育成するため、指導指針の見直しと体制づくりを行った。この成果を踏まえ、第Ⅱ期研究では、キャリア発達との関連性をもたせながら、児童生徒の主体性を育成する授業づくりについて研究を進めていくことにした。

そこで、生涯にわたり主体的に社会に関わろうとする力の育成には、学校における児童生徒の「学習への主体性」を促進することが重要であると考え、学習指導要領が掲げる「主体的・対話的で深い学び」の視点を参考にすることにした。同時に、子供達が単に知識や技能を学ぶだけではなく、自らの価値観や目標をもとに行動する「主体性」を育成するための教育の方向性を示した「OECD ラーニングコンパス 2030」も参考にしながら検討を行った。

学習指導要領では、主体的な学びについて「学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげること」と定義していることから、児童生徒が主体的に学習に取り組むための要素を整理し「興味・関心を高める」「見通しをもつ」「自分と結び付ける」「粘り強く取り組む」「振り返って次へつなげる」の五つの要素にまとめた。さらに、関連項目の整理を進め「学習の見通しをもつ」「粘り強く学習に取り組む」「協働的に学習に取り組む」「学習を振り返る」の四つが主体性を育成する上で重要な視点として抽出することができた。

『OECD ラーニングコンパス 2030』は、21 世紀を生きる子供たちが複雑な社会の中で主体的に学び、多様な課題を解決できる能力を身につけるための指針として位置付けられている。このコンパスでは、単に知識を詰め込むだけの教育ではなく、自ら考え、学び、行動する力を育むことの重要性が強調されている。その中核となる概念の一つである「共同エージェンシー」は、子供たちが単独で学ぶのではなく、教師、保護者、地域社会など、様々な主体と協力し合い、互いに影響を与えながら学習を進めていくことを意味している。この「共同エージェンシー」は、『OECD ラーニングコンパス 2030』の理念を実現する上で極めて重要な要素であるとされている。

そこで、本研究では、「共同エージェンシー」の考えを授業実践に取り入れることとで、生徒の主体的な学びの促進だけでなく、社会参画能力の育成、Well-being（ウェルビーイング）の実現に寄与すると考えた。

以上の考察に基づき、児童生徒の主体性の育成する上で重要な要素として、**「学習の見通しをもたせる」「粘り強く学習に取り組む手立ての充実」「協働的な学びの充実」「振り返りの充実」**が主体性を育成するために不可欠であると考えた。そして、これらの要素を**「附属スタイル」**（P31 表Ⅲ-10）と名付け、全教員が同じ視点で児童生徒の主体性育成に取り組むため、その定義を設けて表形式で示した。

表Ⅲ-10 主体性を育成する四つの要素「附属スタイル」

附属スタイル			
学習の見通しをもたせる	**粘り強く学習に 取り組む手立ての充実**	**協働的な学びの充実**	**振り返りの充実**
子供が学習の目標をより意識して学習に取り組めるための「めあての明確化」	自分で考える、根気強く学ぶなどの「粘り強く学習に取り組む態度の育成」	多様な他者との対話や ICT 活用などを通して、学びを深めるための「協働的な学び」の充実	子供自身が単元や本時の学習を次の学びへとつなげるための「振り返り」の充実

② 研究方法

「附属スタイル」は、四つの要素で構成されており、教科の一単元を通して 4 要素を授業に取り入れながら実践することを想定している。 今回の研究では、各要素を授業の中でどのように活用するかを深めるため、各学部の特色や発達段階を考慮し、「附属スタイル」の 4 要素の中から 1～2 つを選定し、重点的に研究することにした。

具体的には、小学部では「学習の見通しをもたせる」「振り返りの充実」、中学部では「振り返りの充実」、高等部では「粘り強く学習に取り組む手立ての充実」と「協働的な学びの充実」を重点的に取り上げ、それぞれの成果と課題をまとめることを目的とした。以下は、各学部の研究概要である。（表Ⅲ-11）なお、各部研究の詳細な内容については、P35 以降に記している。

表Ⅲ-11　各部の研究概要

部	研究概要
小学部	小学部児童は、発達段階を考慮すると、記憶機能の特性などから「めあてをもって学ぶこと」や「客観的な自己評価」が難しい児童が多い。そこで、教育課程の大部分を占める生活科の授業作りを取り上げ、児童に「学習の見通しをもつ」「学習を振り返る」ことをどのように意識付けしていくのか検討することにした。これまでの実践の振り返りや分析、先行研究との比較等を通して、授業の在り方を検討することにした。
中学部	中学部の生徒は、生活年齢では思春期を迎えるが、知的発達段階や障害特性により、自分の行動を振り返ることが難しい場合がある。そこで、具体的な学習の成果に基づいて、自分の成長や課題を実感させる授業を構築することが、より良い自己理解や学ぶ意欲の向上につながるのではないかと考えた。「附属スタイル」の「学習を振り返る」に重点を置き、その授業の在り方を研究することにした。
高等部	青年期を迎える高等部生徒にとって、他者との関わりの中で生活を送る経験は、将来の社会生活において非常に重要にある。また、社会と責任感をもって関わることを求められる場面も増える。そこで、「附属スタイル」の「粘り強く学習に取り組む手立ての充実」と「協働的な学びの充実」を重点的に取り上げ、自分らしさを発揮しながら主体的な生活を送るために必要な授業の在り方を研究することにした。

③　学習単元計画の活用

本校では、第 24 次研究において学習単元計画を作成し、それを基に授業実践を進めてきた。今回の研究では、将来の進路先や関係者を対象に実施したアンケート結果を踏まえ、今後のキャリア教育の視点も踏まえた新しい「目指す児童生徒像の具体的な姿」及び「キャリア教育全体計画」を小学部から高等部までの一貫性ある指導を目指すための指針の一つとして位置付けた。

これを受け、第Ⅱ期研究の推進にあたっては、各学習単元が「目指す児童生徒像の具体的な姿」や「キャリア教育全体計画」の各項目とどのように関連するかを明確にすることを目指すことにした。この関連性を授業に反映させるため、「学習単元計画（試行版）」に関連項目を記入する欄を設け、全教員で導入と検証を行うことにした。

この取組により、本校の指導指針で掲げる「目指す児童生徒像」や「キャリア教育全体計画」に基づいた一貫性と系統性のある指導を展開できると考えた。また、学校全体の指導の質を向上させるとともに、児童生徒が将来に向けて自ら学び、考え、行動する力を育むための基盤を整えることにつながると考えた。

単元計画

長崎大学教育学部附属特別支援学校

年度	1	学部	小	教科		単元名	

指導内容

【知識・技能】

【思考力・判断力・表現力等】

【学びに向かう力・人間性等】

単元について

予定時数		時間	キャリア教育を支える３本柱との関連					
			役割仕事	ー	生活健康	ー	楽しみ余暇	ー

「目指す児童生徒像の具体的な姿」との関連	「キャリア発達に向けて各部で育てたい力」との関連

単元目標

【知識・技能】

【思考・判断力・表現力】

【学びに向かう力・人間性等】

深い学びのための方策（どんな見方・考え方で学習に取り組ませ深い学びに向かわせるか）

主な学習活動	教材	手立て				評価の観点			予定時数
		見通	粘強	協働	振返	知技	思判表	学び	

単元評価（児童生徒の様子から：観察法、自己評価等）				◎７割達成　○５割達成　△３割未満	
知識・技能	ー	思考力・判断力・表現力	ー	学びに向かう力・人間性	ー

授業者による評価

評価項目	気づき・課題等
時数・時期	
学習活動	
教材等	

「目指す児童生徒の具体的な姿」との関連性　（◎：かなりあった　○：あった　△：あまりなかった　）

項目	関連性	特記事項

「キャリア教育全体計画」との関連性（◎：かなりあった　○：あった　△：あまりなかった　）

項目	関連性	特記事項

【必要に応じて記入】単元に関する引継ぎ事項/特記事項

図Ⅲ-17　学習単元計画表（試行版）

④　まとめ

第Ⅱ期研究では、主体性の育成するために作成した「附属スタイル」と、第Ⅰ期研究で取り組んだ「目指す児童生徒像の具体的な姿」や「キャリア教育全体計画」の各視点を学習単元計画に記載し、授業に反映させる研究を進めた。

「附属スタイル」を活用した授業については、「見通しや振り返りを行うことで日々の授業に連続性が生まれ、既習事項を授業に生かそうとする姿が見られるようになった」「協働的な学びにおいて、話し合いの中で自分の意見を伝えたり、友達に助言をしたり、一緒に考えたりすることで学びが深まった」といった意見があり、児童生徒の主体性の育成に一定の効果があったと考えられる。その一方で、「附属スタイル」で学んだ児童生徒の評価の在り方について、全校での統一化や検証が十分に行えなかったことが大きな課題として挙げられる。評価にあたっては、心の成長を言葉として具現化することの難しさが指摘されており、本研究で作成したSSBも活用しつつ、児童生徒の成長を記録し、それを将来の生活につなげていくための手法を学校全体で考えていく必要がある。

「目指す児童生徒像の具体的な姿」や「キャリア教育全体計画」の各項目を学習単元計画に記載し、授業に反映させる研究については、「学習指導要領や個別の指導計画だけではなく、学校目標に基づいた視点で教科の授業を行う意識が高まった」との意見があった一方で、「各項目には教科指導だけでは身に付けられない力も含まれている」「教育課程への反映が必要」「学習単元表だけでは、キャリア発達との関連性を十分に確保できたとは言い難い」との指摘も挙がった。また、活用の難しさに関する意見も多く出されたことから、今後は「目指す児童生徒像の具体的な姿」と「キャリア教育全体計画」を学習単元レベルにとどめず、教育課程全体で反映させることが求められる。また、やキャリア発達の視点が各学習単元の指導内容に適切に含まれるかを具体的に示す方法について、更に検討を進めていく必要がある。

Ⅱ－１　小学部の研究

学習のめあてを意識し、主体的に学ぶ児童の姿を引き出す授業の在り方
～学びを生活に生かそうとする子供を育むことを目指した生活科の授業実践～

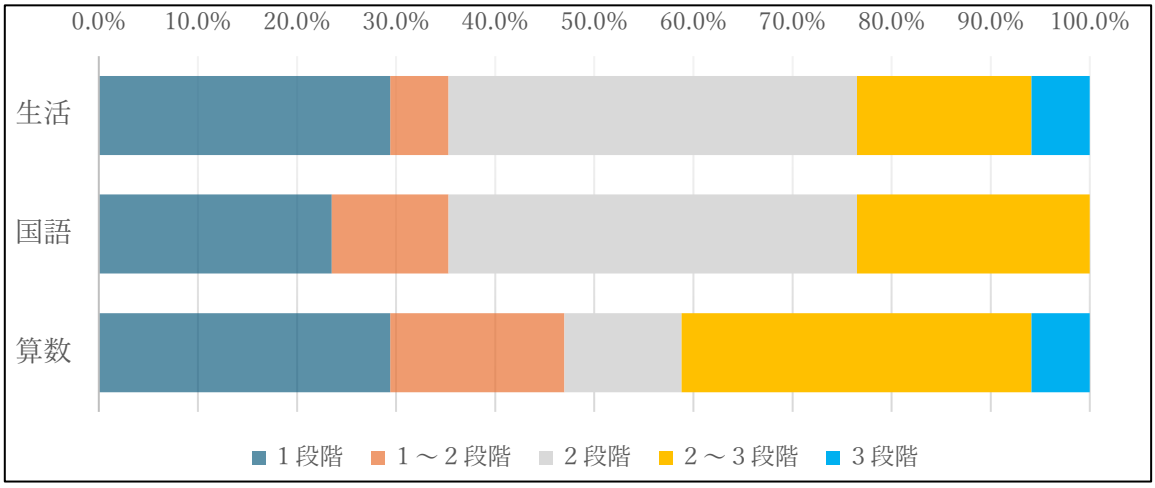
Ⅱ－1　小学部の研究

1　児童の実態と研究のテーマについて

（1）小学部の概要

小学部の児童は、年度により差はあるが、自閉症スペクトラムの児童（ADHD を合わせ有する者を含む）が 6 割以上を占め、3 割程度がダウン症、残りの 1 割未満がその他の障害となっている。また、自閉症スペクトラムの児童数の割合は、近年増加の傾向にある。

小学部は低学年、中学年、高学年の複式学級で編成している。発達や障害の程度に個人差はあるが、個に応じた支援を行いながら、学級集団を中心に必要に応じて実態別のグループを構成するなど、学習集団を工夫して指導を展開している。令和 6 年度における小学部児童の各教科の履修状況は、図Ⅲ-小 1 に示すとおりである。（生活、国語、算数のみ掲載）



図Ⅲ-小 1　生活科、国語科、算数科の履修状況（令和 6 年度）

（2）部研究のテーマについて

①テーマ設定の理由

小学部が本研究で取り組む生活科は、「生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成すること」を目指している。「自立し生活を豊かにしていく」とは、生活科の学びを実生活に生かし、よりよい生活を創造していくことである（学習指導要領より）。まだ生活経験が浅く、未学習や未経験なことも多い小学部の児童が、本研究テーマ「自ら学ぼうとする」姿へと将来的に迫っていくには、こうした生活科の目指す「実生活に生かそうとする」「自らの生活をよりよいものにしようとする」資質・能力を育むことが重要であると考えた。また、生活科の内容は中学部における社会、理科、職業・家庭などにつながるものも含まれ、他教科に比べても多岐に渡るものである。実際、本校小学部の教育課程において、生活科の時数はおよそ半分を占めており、教育課程上の位置付けにおいて重要性が高い。これらの理由から、小学部では生活科を取り上げ、児童が主体的に学習に取り組む附属スタイルに沿った授業づくりについて研究を進めることとした。

また、小学部では今回、附属スタイルに沿った授業づくりの中でも、「学習の見通しをもたせる」「振り返りの充実」について特に研究を深めることにした。小学部児童の多くは、検査結果によると発達年齢が 5 歳未満であり、3 歳未満の児童も多い。一般的に、定型発達の児童でもその場で短期記憶を長期記憶に置き換えられるのは 4、5 歳ごろからと言われており、それ以前は感覚的な記憶が主で、記

憶は繰り返しによって定着が図られると言われている。客観的な自己評価は５歳でも難しいと言われており、このように発達の特徴だけを踏まえれば、「学習の見通しをもつ」「学習を振り返る」ことは、小学部の児童にとって極めて難しいと推察される。しかし、知的障害のある児童でも、抽象的な思考や事柄を分かりやすく具体的な方法で示すなど、学び方を工夫することで理解を進めることが期待できる。よって、小学部児童にとっての「見通しをもつ」「学習を振り返る」をどのように捉えればよいのか、また、どのように学ばせることでそれに迫ることができるのか、検討することにした。

②研究仮説

児童の発達段階を踏まえ、授業分析を通して附属スタイルの項目ごとの引き出したい姿を具体的に示す。また、それらを引き出すために必要な授業展開や学習の手立てを整理して授業実践と授業改善を重ねることで、児童自身がめあてを意識して学習に取り組むなど、より主体的に学ぼうとする児童の姿を引き出すことができるのではないか。

③研究内容及び方法

＜研究内容＞

ア）『附属スタイル』を取り入れた単元設定の手続きの整理

イ）『附属スタイル』に沿った生活科の『授業モデル』の検討

＜研究方法＞

ア）単元設定の手続きの整理

実態把握から評価規準の作成に至る手続きの整理

イ）『附属スタイル』に沿った生活科の『授業モデル』の検討とそれを基にした授業実践

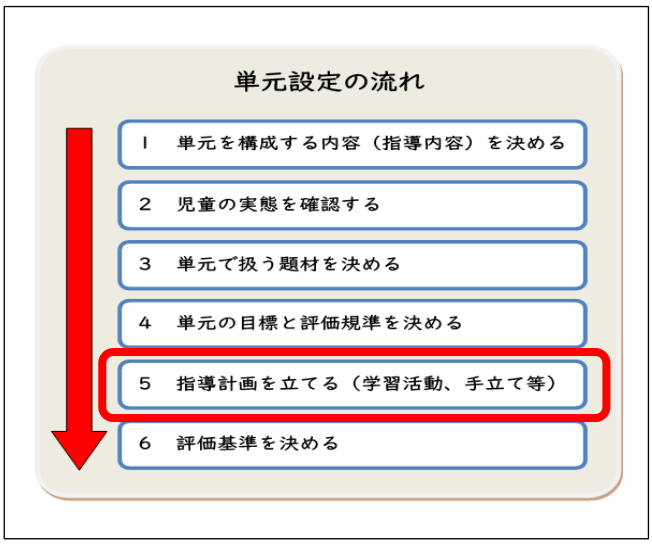
『附属スタイル』ごとの「引き出したい子供の姿と授業の工夫」について整理した一覧表の作成とそれを活用した授業実践

２　研究実践

（１）第１期　附属スタイルを取り入れた単元設定の手続きの整理

各教科の授業の目的は、各教科の内容の習得を通して３つの資質・能力で示された目標に迫ることである。附属スタイルを取り入れた授業づくりについて検討を始める前に、まずは、附属スタイルを取り入れることで、授業づくりの手順や目的は変わるのかを話し合った。

協議を通して、附属スタイルは単元における学びをより深めるための手立ての視点であることを確認した。図Ⅲ-小２は、単元設定の流れを整理したものである。これに照らせば、附属スタイルは「５　指導計画を立てる」段階において、どのように学ばせるのか（活動内容や教材、教師の関わりなど）を整理する視点になる。



図Ⅲ-小２ 単元設定の流れ

（2）第２期　附属スタイルを取り入れた授業実践（７月）

①単元の構想

実施した授業「夏祭りをしよう」は、自分たちで模擬店の準備をし客を招くなどの活動を通して、自分の役割を意識したり、人とやりとりしたりすることをねらった学習である。今回は、小学部の職員全員で図Ⅲ-小２の流れで話合いを行い、内容の選定から評価規準の設定まで構想を固めていった。（図Ⅲ-小３）

附属スタイルの視点から手立てを考えるにあたっては、「学習の見通しをもたせる場面」や「学習の振り返りの場面」で想定される児童のよさと困難さをまずは考え、その困難さに対してどのような手立てが必要かを児童の目標段階ごとに検討していった。（図Ⅲ-小 4）経験が少ないことはイメージすることが難しいので、できるだけ児童の経験を踏まえた模擬店の活動にした方がよいなどの意見が上がり、これらの意見を踏まえて単元計画（図Ⅲ-小５）を作成し授業を実施した。

１　単元を構成する内容（指導内容）を決める

内容	エ　遊び	オ　人とのかかわり	カ　役割
指導内容	○いろいろな遊び ・簡単なルールのある遊びをする ・遊具の後片付け ・自分で使った遊具を片付ける ・友達と協力しながら片付ける	○身近な人とのかかわり ・自分から挨拶をする 「いらっしゃいませ」 「こんにちは」など ・気持ちを伝える応対 ありがとうなどの言葉を言う	○集団の参加や集団内での役割 ・集団で簡単な係活動を果たす ○共同での作業と役割分担 ・集団で簡単な役割を果たす ・友だちと協力して活動や作業に取り組む

２　児童の実態を確認する

		A児
目標段階		２段階
発達検査 主な障害		【K式】　５９ ダウン症
学習状況	遊び	・ときどき友達の輪に入っていく。走っているのについていくことある。 ・友達の様子をよく見て楽しんでいる。 ・教師と一緒に片付けができる。
	人	・教師に促されて挨拶をしたり「ありがとう」を言ったりできる。
	役割	・係の仕事、ときどき自分から行う。促せば確実。
学習上の困難さ		・自分の気持ちを適切に相手に伝えることが難しい。

４　単元の目標と評価規準を決める

２段階		知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
単元目標		夏祭りの準備や身近な教師や友だちを招待し夏祭りを開催する活動を通して、遊びのルールや役割が分かり、遊びの中の応対する言葉を適切に使う。	夏祭りの準備や身近な教師や友だちを招待し夏祭りを開催する活動を通して、夏祭りに必要なものや自分の役割に気付き、場面に合った言葉を選んだり、取り組む遊びや遊びに使う物を工夫して作ったりする。	身近な教師や友だちに自ら働きかけようとしたり、意欲や自信をもって夏祭りの一連の活動に取り組もうとしたりする。
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	遊び	夏祭りで取り組む遊びのルールが分かっている。	夏祭りで取り組む遊びや遊びに使うものを工夫して作っている。	ルールを守って遊ぶことや遊びを工夫すること、また、使った物を片付けることに意欲や自信をもって取り組もうとしている。
	人関	夏祭りでの友達とのやりとりに必要な挨拶や気持ちを伝える言葉が分かっている。	夏祭りの場面に合った言葉を選び、友達とのやりとりを楽しんでいる。	夏祭りの中で、身近な教師や友だちに自ら働きかけようとしている。
	役割	夏祭りでの自分の役割が分かっている。	夏祭りに必要なものや自分の役割に気付いている。	夏祭りの準備や自身の役割に、意欲や自信をもって取り組もうとしている。

単元目標、評価規準を踏まえた、単元の構想（題材観、指導観）に関する意見

エ 遊びの内容に関して
- 遊びを工夫できる児童もいるので、したい遊びを自分で考える時間があってもいい。
- 夏祭りの出店の商品（食べ物屋さんなど）を作る活動を入れて、お店への期待感を高められたらいい。
- 食べ物の出店については、トッピングなどを自分で考えると工夫して商品を出すことにつながるのでは。
- ボウリング、的あてなど、出店ではゲームの場を設定して、簡単なルールを守って遊べる場を設定できるといい。

オ　人との関わりの内容に関して
- 夏祭りの出店やゲームの場では、お店屋さんやお客さんとのやりとりをする場を自然に設けられるように。
- 「いらっしゃいませ」「ありがとう」と、人とのやりとりの言葉を押さえておけるといい。

カ 役割の内容に関して
- お神輿をみんなで担ぐなど、共同した活動が設定できないかな。
- 出店ではメニューに選択肢を設け客に選ばせるようにすることで、お客が選んだものを準備して渡す役割が設定できないか。
- お店屋さんで、一つの商品ができるまでの作業を分担して取り組むことで、お互いの役割が明確になるのでは。
- 出店はそれぞれが自分の担当を選び決めることで、自分が担当するお店屋さんになりきる気持ちも高まるのでは。

図Ⅲ-小３　「夏祭りをしよう」の単元設定の検討（資料を一部抜粋）

【学習の見通し】に関する考えられる手立て

	児童の姿		考えらえる手立て
	よさ	困難さ	
２段階 A 児 B 児 C 児 D 児	写真や映像を見て、知っていることを答えたり、想像したりすることができる。 ・教師の手本を見て真似することができる ・衣装を着ることで自分の役割が分かり、意欲的に取り組むことができる。 ・手順が分かると自分で作ることができる	・自分が経験していないことは想像しづらく、話に興味がもてないことがある。 ・手先の不器用さ ・ひらがなが読めない児童もいる	○児童が経験したことがある活動を中心に行う（お店屋さんごっこ） ○昨年の取り組みの写真を使って、授業の見通しをもたせる。 ○それぞれの実態に合わせた教材を準備する。 ○法被などお祭りの雰囲気を感じられるような衣装や場を準備する。 ○写真やイラストなどを用いた手順表を作成する

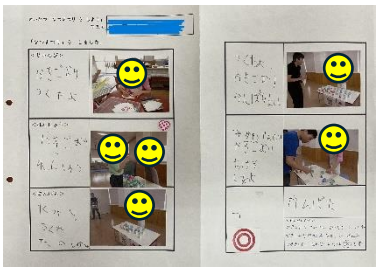
図Ⅲ-小４　「学習の見通しをもたせる」「振り返りの充実」の話合いの記録（一部抜粋）

主な学習活動	教材	手立て				評価の観点			予定時数
		見通	粘強	協働	振返	知技	思判表	学び	
(導入) ○夏祭りについて知ろう ・夏祭りがどのようなものかを知る ・夏祭りでお店屋さんを開くことを知る ・どのお店屋さんをするのかを決める	・パワーポイント教材 ・お店屋さんイラスト ・お店屋さんの道具 (かき氷、魚、釣り竿、ポテト、ジュース)	◎	—	—	—	◎	○	○	1
○お店屋の準備をしよう ・食べ物屋さんの準備(かき氷、ポテト、ジュース)を作る ・ゲームの準備(魚釣り用の魚)を作る	・コーヒーフィルター ・水性ペン ・霧吹き ・プラ板 ・画用紙 ・絵の具 ・ペットボトル ・ビニール袋 ・お花紙 ・はさみ　　など	◎	◎	◎	—	○	◎	◎	1
○お店屋の練習をしよう ・挨拶やお客さんとのやり取りの練習をする ・チケットや商品の受け渡しの練習をする	・かき氷屋さんの道具 ・魚釣り屋さんの道具 ・ポテト・ジュース屋さんの道具 ・チケット	◎	◎	◎	—	◎	◎	○	1
○夏祭りのお店屋さんをしよう ・友達や教師を招待する ・お店屋さんを開く	・かき氷屋さんの道具 ・魚釣り屋さんの道具 ・ポテト・ジュース屋さんの道具 ・チケット	◎	◎	◎	—	○	◎	◎	1
○振り返りをしよう ・夏祭りの写真を見る ・写真を選んで貼る ・感想や気持ちなどを書く ・書いたことを発表する	・写真 ・振り返りシート ・シール	◎	○	—	◎	◎	◎	◎	1

図Ⅲ-小５　単元「夏祭り」の単元計画（学習計画のみ抜粋）

夏祭りの授業の様子

単元の振り返りをしている様子



振り返りの自己評価シート

②授業の成果・課題

授業の動画を見て授業で見られた児童の行動を書き出し、附属スタイルの４つの視点に振り分けていった（図Ⅲ-小6)。授業の中では児童に多くの「見通しをもって意欲的になっている」「学んだことを写真などから振り返っている」姿が見られた一方で、行動は子供によって数にばらつきがあり、特に１段階の児童の行動の少なさが目立った。こうした点を踏まえて、本単元の成果と課題について話し合いを行った。

成果については、見通しをもたせるための工夫として、教科書や視覚教材の有効な活用の仕方、自分がこれからすることをイメージさせるための具体的な活動の設定などを、また、振り返りの充実のための工夫として、振り返りシートの工夫、子供の言葉を引き出す教師の関わりのよさなどが上げられた。一方で課題については、見通しをもたせる点について、子供自身ががんばること（「大きなこえであいさつする」など）をもっと意識させた方がよいのではないか、振り返り方について、写真やイラストなどを使っても振り返りが難しい児童には更に工夫が必要であり、何をどこまで振り返らせるのかも整理が必要などの意見が上がった。（表Ⅲ-小１）

こうした意見を踏まえ、「見通し」とは何を意識させればよいのか、「振り返り」の自己評価も何をどの程度振り返ることができればよいのか、またそれらも、各段階の児童によっても異なるであろうことを押さえた上で、改めて整理が必要であることが分かってきた。

児童生徒名　（　　A児　　）

時	学習活動	見通し	粘り強さ	協働的	振り返り
1 導 入	1　教師の話を聞く 2　教科書の知っていることや興味のあるものを発表する 3　単元のめあて(「夏祭りをしよう」)を知る 4　自分がしたいお店を決める 5　お店の体験をする 6　単元の計画を知る(本時のまとめ)	1顔を上げて盆踊りの写真をよく見ている。 1「知ってる！」等経験あることを伝えている。 2教科書のイラストを見て、見付けたもの（「かき氷！」）と発表している。 3自ら立ち上がり、したいもの（お店のイラスト）を指さして伝えている。 4やりたいお店をイラストから選び、自分の写真カードを貼っている。 4店についての教師の質問に答えている。 5お店の体験をする際に、教師の「次は・・・」の言葉を聞いて期待感を高めたように笑顔になっている。 5お店をすることを聞いて、飛び跳ねて喜んでいる。 5教師の「黄色のジュースは何味？」の質問に「レモンジュース」と答えている。 6カレンダーを見て、(祭の日を)「～曜日！」と答えている。 6（招待したい意志として)「1くみ、3くみ」と言っている。	2教科書のイラストに注目し、見付けたものの名前を言っている。 2教科書を見て、「かき氷！」など知っている物の名前を繰り返し言っている。 3かき氷屋のイラストを見てガッツポーズをしている。 4したいお店を教師から確認された際に「一人でする！」と言っている。 6予定を確認しに行っている。	1A君の真似をしている。 5お店の体験をする友達の様子をよく見ている。 5お店の体験の場面で、友達のポテトの模型を食べに行っている。	
3 練	1　教師の話を聞く、お店の準備 2　教師の手本を見る	1予定表を見てすることが分かっている。 1（準備するものとして)「チケット！」 1その場にいる 2教師に注目している	1ポテト好き？などの質問にはーいと意欲的に返事をする。 2体の向きを変えて注目している。	1Bさんの手伝いをしている。 2友達を注意している。 3「上手だった？」の質問に「うん」と答える。	

図Ⅲ-小6　夏祭りの単元で見られた児童の行動（一部抜粋）

表Ⅲ-小１　児童の行動を基に話し合った「夏祭り」の成果と課題（主なもの）

	成果	課題
2段階の児童	○見通しについて ・写真や教科書を上手に活用していた。 ・教師が実演してすることを示したことで、子供たちもすることが分かり易かった。 ○振り返りについて ・振り返りシートは活動の流れが１シートにまとめてあり、分かりやすく工夫されていた。	○見通しについて ・子供自身ががんばるポイントを、示す必要はなかったか。示すのであれば、子供に分かりやすい工夫が必要。 ○振り返りについて ・子供自身が、何をもって◎○△なのか（～ができたから◎など）を判断していけばよいのか、どう伝えればよいか難しい。
1段階の児童	○見通しについて ・１段階の児童にも分かるように、具体物や写真、イラストなど用いながら自己選択の機会が設けてありよかった。 ・実際の物になるべく近づけてポテトなどの教材が作られておりよかった。 ・繰り返しすることで、自分がすることが少しずつ理解できていった姿があった。	○見通しについて ・子供の理解を行動から全て読み取るのは難しい。 ・教材や教師に注目し続けることが難しい。教師の関わりをより具体的に考えるなど、手立てにより工夫が必要。 ・見立てが難しい児童は単元のイメージがもちにくく、実物を用いた活動も必要だったのではないか。 ○振り返りについて ・シートだけでは振り返りは難しかった。◎や△もどれだけ理解できているのか？ ・振り返りの場面で、写真以外の想起できる活動、例えばもう一度お客とのやりとりをさせてみるなど、想起させる工夫がより必要では。できたことを皆の前でもう一度させて称賛される経験は、振り返りの充実につながるのではないか。 ・1 段階の児童でも、がんばることを簡単にでも伝えておく必要はあるのでは。

（３）第３期　引き出したい子供の姿とそのための授業の工夫の整理

「夏祭り」の授業実践を通して、附属スタイルの４つの視点から「児童に授業の中で何を意識させたいのか」「どんな児童の姿を引き出せばよいのか」「児童の姿を引き出すためにどんな授業における工夫が必要か」を整理する必要があることが見えてきた。そこで、『目標段階別の「引き出したい姿」と「授業の工夫（サンプル）」』（図Ⅲ-小８）を、次の①～③の手続きに沿って作成した。

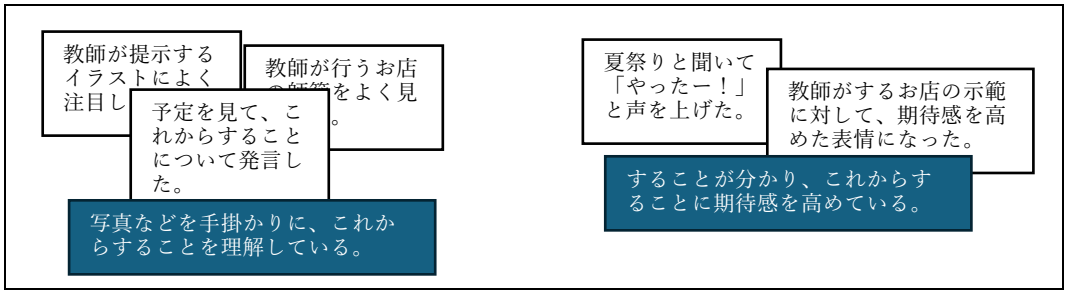
① 先行研究を参考に「子供が意識するポイント」を整理

先行研究（鹿児島大学教育学部附属特別支援学校，2023）を参考に、本校小学部に在籍する児童をイメージして、附属スタイルの４つの視点について児童に何を意識させたいのかを整理した。

② 「夏祭り」で見られた児童の姿（図Ⅲ-小６）を基に「子供から引き出したい姿」を整理

①の「子供が意識するポイント」を踏まえて、目標段階ごとに、夏祭りで見られた児童の行動について類似するものを分類し、引き出したい姿を整理した。（図Ⅲ-小７参照）

3 段階の児童は夏祭りの授業にいなかったため、他の学級の児童をイメージして作成を行った。



図Ⅲ-小７　夏祭りの児童の行動を基にした「子供から引き出したい姿」の整理（例）

③夏祭りでの手立てやこれまでの実践を踏まえた「子供の姿を引き出すための授業の工夫」の整理

②で整理した「子供から引き出したい姿」に対して、具体的にどのような手立てが必要であるか、夏祭りの授業でよかったものやそれぞれの教師がこれまでの実践の中で行ってきた手立てを上げながら、整理をしていった。

また、表の妥当性を高めるために、発達の特徴や先行研究との比較を行った。まずは、小学部に在籍している児童及び過去 3 年の卒業生（6 年時）の生活科の目標段階と発達検査の結果を調べ、各目標段階の児童の平均の発達年齢を把握した。（表Ⅲ-小 2）

把握した発達年齢を踏まえ、それぞれ１段階は 2 歳までの発達段階、2 段階は４歳までの発達段階、3 段階は 5～7 歳程度の発達段階であると捉え、ピアジェの認知発達の段階の特徴と照らしたり先行研究（鹿児島大学教育学部附属特別支援学校，2023）と比較したりしながら、表の修正を行った。

表Ⅲ-小２　小学部全児童(過去３年の卒業生含む)の発達年齢の平均値

生活科の目標段階	サンプル数（人）	発達検査による 発達年齢の平均
１段階	5	１歳９か月
２段階	１４	３歳３か月
３段階	7	６歳６か月

【附属スタイル】
目標段階別の「引き出したい子どもの姿」と「授業の工夫（サンプル）」

		子供が意識するポイント	子供から引き出したい具体的な姿	子供の姿を引き出すための教師の工夫（サンプル）
Ⅰ段階	学習の見通しをもたせる	・教師の支援を受けてすることやしたいことを選ぶ。 ・自分のすることや役割が分かる。	・活動内容を示したりイメージしたりする写真やイラストなどを見ている。 ・教師が提示した２つ程度の選択肢から、することやしたいことを選んでいる。 ・話をしている教師や教材、スライドなどに注目している。 ・集団の中で学習に参加している。	①子供が興味のある題材を用いる。 ②子供が好きな写真やイラストを準備する。 ③目標となる活動について、具体物等を用いて具体的行為として示す。 ④活動の手本を、具体物を用いて示す。 ⑤掲示物を工夫する、教材・教具の設置位置を固定するなど、授業に参加できるような環境作りをする。 ⑥子供の表現に、教師が共感して繰り返したり、対応付いた言葉を伝えたりして、対象と結びつける。
	粘り強く学習に取り組むための手立ての充実	・教師の支援を受けて、活動をやってみようという気持ちをもつ。	・「もう１回したい。」「やってみたい。」ことを、行動や言葉で表している。 ・教師、教具に注目し、意欲的に活動に参加している。 ・教師と一緒に活動の最初から最後まで取り組んでいる。 ・相手のしぐさや動作、音声を真似している。	⑦子供が好きな活動や興味のある活動を取り入れる。 ⑧具体物を用いて、結果や終わりの分かりやすい活動を設定する。 ⑨やりたいもの、関心のあるものを、手に取りやすい状況で提示し、何度でも選択し、取り替えることができるようにする。 ⑩友達がやっている姿や教材・教具が見える場の設定にする。 ⑪何度でも操作できるような、場や活動・時間の設定をする。 ⑫やったことに対して、子供が何らかの言葉や表現で伝えたときに、子供にとって聞いてもらえる環境にし、教師は快の感情になるリアクションをする。 ⑬取り組む姿勢や気持ちを大事に賞賛する。 ⑭児童の近くで活動を促すような声掛けをし、行動に対して教師が認めたり意味づけたりすることで、自身の行動に喜びを感じられるようにする。
	協働的な学びの充実	・教師の支援を受けて、教師や友達の言動に注目する。	・教師や友達の真似（模倣）をしている。 ・友達と簡単なペア活動をしている。	⑮活動しやすいような教材を選ぶ。 ⑯繰り返し、取り組ませる。 ⑰目の前で、大きな動きで手本をする。
	振り返りの充実	・教師の支援を受けて、自分がしたことが分かる。	・自分がしたことを示す写真を選んでいる。 ・教師と一緒に、学習の流れや内容を振り返る写真やイラストを見たり、動作で表現したりしている。 ・できたことに対して、何らかの言葉や表現で伝えている。	⑱活動の写真やイラスト、実際に使った具体物などを見せたり扱わせたりする。 ⑲取り組んだことを、友達の前で紹介させる。 ⑳「できた」瞬間に、教師からできていることを賞賛されたり、喜びを共有されたりする場面を設定する。

図Ⅲ-小８　完成した「引き出したい子供の姿と授業の工夫（サンプル）」の表（図は１段階のもの）

※詳細は「Ⅱ-1 小学部の取組　巻末【参考資料】」参照

（４）第４期　附属スタイルを取り入れた授業実践（１１月）

①『目標段階別の「引き出したい姿」と「授業の工夫（サンプル）」』を参考にした授業の立案

実施した授業「町探検」は、学校の近くにある商店を探したり実際に商店を利用したりしたことを地図にまとめる活動を通して、商店街の様子を知ったり商店を利用することへの関心を高めたりする授業である。授業提供者には（３）で作成した『目標段階別の「引き出したい姿」と「授業の工夫（サンプル）」』の表に照らして授業における手立てを検討してもらい、図Ⅲ-小９の指導案（略案）を作成してもらった。尚、研究授業の対象は７月「夏祭り」との比較検証を行うため、同じ3、4年児童の学級で実施した。

「町探検に行こう」　1/10

学習活動	子供の姿を引き出すための教師の工夫		準備物
	1段階	2段階	
1 町探検の学習について知る ・自分が住んでいる町、学校周辺の町、校外学習で出かけた場所の町などについて確認する ・住吉中園地区について学習することを知る	⑩友達がやっている姿や教材・教具が見える場の設定にする	②活動することをイメージさせるために、絵、写真、教師のモデルなどを提示しながら、簡単な言葉を用いて説明する。 ④既習事項（前次や前年など）の振り返りをして、本時への意欲を高める。 ⑩最後まで活動に取り組ませるために、活動の見通しをもたせる。	学校の写真 児童の顔写真 住吉中園商店街の写真 模造紙 テレビ タブレット
2 住吉・中園商店街にある店について知る ・動画を見ながら、提示された店を見つける。 （郵便局、ジョイフルサン、マツキヨ、洋服や、野菜や、靴や、魚や、肉や	①子供が興味のある題材を用いる ②子供が好きな写真やイラストを準備する ⑤掲示物を工夫する、教材・教具の設置位置を固定するなど、授業に参加で	⑧達成可能な最近接の課題を設定する。 ⑨子供が最後まで取り組めるように、子供が取り組める内容や取り組みやすい場や時間の設定を工夫する。	各種商店の写真（ワークシート用、掲示用）

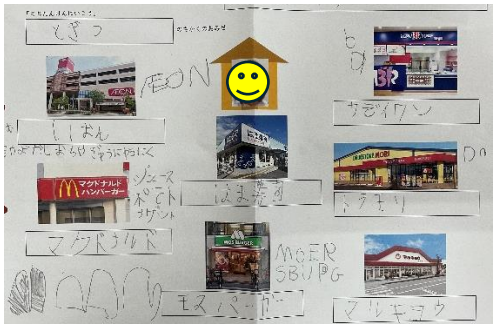
図Ⅲ-小９　附属スタイルの視点を取り入れた授業「町探検」の指導案（一部抜粋）

主な学習活動	教材	手立て				評価の観点			予定時数
		見通	粘強	協働	振返	知技	思判表	学び	
（導入）1021（1） ○「町」について知ろう ・自分たちの町、学校周辺の町、校外学習で行った町 ○学校周辺の町のお店 ・住吉中園商店街の店の動画を見る	・模造紙（地図） ・顔写真 ・校外学習で行った施設の写真 ・タブレット（動画） ・店の写真 ・シール	◎	○	○	○	◎	○	◎	1
○いろいろな商店を見に行く。1021（2） ・住吉中園商店街の店を見つけに行く ○見てきた商店のまとめ1024（1） ・ワークシートに見てきた店をまとめる ・様々な商品がどの店に売ってあるのかを考える。	・店の写真 ・シール	◎	◎	○	◎	◎	◎	◎	3
○住吉中園商店街で買い物をしよう ・商品を決めて、買う店を考える。 ・校内の模擬店で練習する。1030（1） ・決められた商品を買い物に行く。1031（2）	・商品の写真 ・財布、お金	◎	◎	－	○	◎	◎	◎	3
○自分の住んでいる町のいろいろな商店1105（1） ・自分が住んでいる町にある店について知る。 ・友達の住んでいる町や、周辺の店を知る。	・模造紙（地図） ・店の写真	○	◎	○	◎	◎	○	◎	1
○振り返りをしよう1107（1） ・中園町、住吉町の店を地図に貼る。 ・売ってある商品を店の近くに貼る。 ・自分たちの住んでいる町周辺の店を地図に貼る。 ・Googleアースで、様々な町の写真を見る。	・模造紙（地図） ・店の写真	○	◎	○	◎	－	○	◎	1

図Ⅲ-小 10　単元「町探検」の単元計画（学習計画のみ抜粋）

単元の導入の授業の様子

町探検の際に用いたワークシート



町で見つけたものをまとめたワークシート

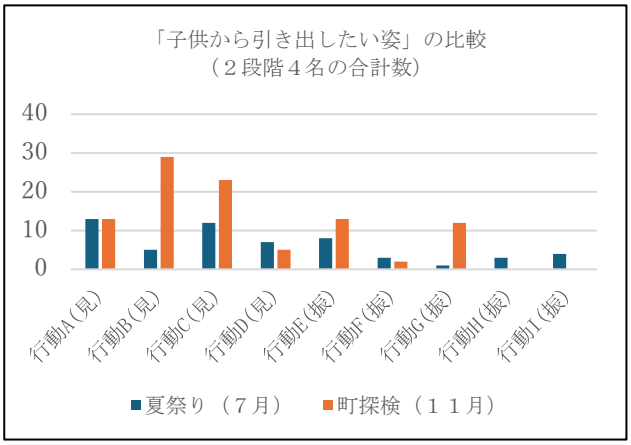
単元の振り返り「地図作り」の様子

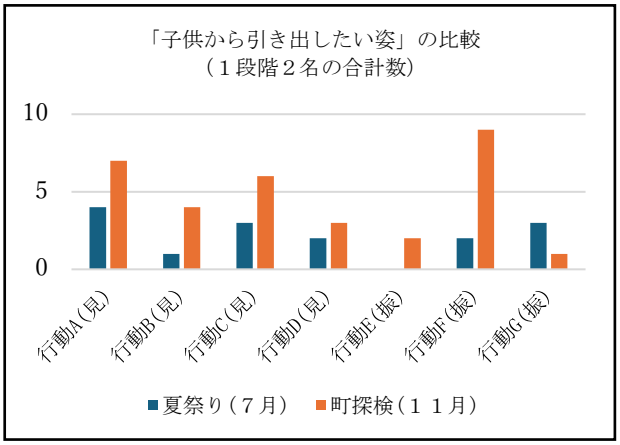
②授業の成果・課題

授業の成果と課題を検討するにあたり、授業の動画を基に次の分析を行った。

ア）「夏祭り」と「町探検」で見られた「子供から引き出したい姿」の数の比較（図Ⅲ-小 11）

イ）「町探検」における個々の児童の「見通し」「振り返り」に関する各教師の評価（表Ⅲ-小 3）





行動 A(見通し) これまでの経験や自分がもっているイメージをこれからする学習に結びつけている。 行動 B(見通し) 絵、写真、教師のモデル、言葉の説明から、今からすることが分かっている。 行動 C(見通し) 活動することが分かり、活動への期待感を高めた発言をしたり活動に関わる言葉を言ったりしている。 行動 D(見通し) いくつかの目標の選択肢の中から、自分ががんばりたい目標を選んでいる。	行動 E(振り返り) 映像や写真を見て、活動したことを思い出している。 行動 F(振り返り) 教師の振り返りを促す簡単な質問に言葉で答えている。 行動 G(振り返り) いくつかの活動の写真から、選んで伝えている。 行動 H(振り返り) 自分の目標に対して、◎か△の二択から一つを選び自分の気持ちを伝えている。 行動 I(振り返り) 活動に対する自分の気持ちを表情カードから選び伝えている。	行動 A(見通し) 活動内容を示したりイメージしたりする写真やイラストなどを見ている。 行動 B(見通し) 教師が提示した２つ程度の選択肢から、することやしたいことを選んでいる。 行動 C(見通し) 話をしている教師や教材、スライドなどに注目している。 行動 D(見通し) 集団の中で学習に参加している。	行動 E(振り返り) 自分がしたことを示す写真を選んでいる。 行動 F(振り返り) 教師と一緒に、学習の流れや内容を振り返る写真やイラストを見たり、動作で表現したりしている。 行動 G(振り返り) できたことに対して、何らかの言葉や表現で伝えている。

図Ⅲ-小 11　７月、11 月の研究授業で見られた「子供から引き出したい姿」の数の比較

表Ⅲ-小３　町探検における児童一人一人の「見通し」「振り返り」に関する教師の評価

（「引き出したい姿」が十分見られたか４件法で評価、全教師による評価の平均値）

		２段階の児童				１段階の児童	
		A児	B児	C児	D児	E児	F児
平均値	見通し	3.75	2.86	3.88	3.88	2.88	3.25
	振り返り	3.5	2.75	3.63	3.63	2.63	3.13

※４十分に引き出せた　３どちらかと言うと引き出せた　２どちらかと言うと引き出せていない　１あまり引き出せていない

二つの単元は活動内容が異なり単純比較はできないが、「見通しをもつ」「振り返る」に関する「子供から引き出したい姿」は、7 月に比べ全体的に増加しており、取組の一定の成果が出た。一方で、個々の児童から「引き出したい姿」を十分に引き出すことができていたかを全教師（8 名）が四件法で評価したところ、児童によって差があり、全ての児童から引き出すことはまだ十分ではなかったこともうかがえた。

これらのことについて小グループに分かれその要因を話し合い、次のような意見が出た。

ア）「子供から引き出したい姿」が、７月よりもおおむね増加した要因

・夏祭りに比べて町探検や買い物は児童にとってより身近で過去の経験も多く、イメージがしやすい上に興味も高いものだったのではないか。
・７月の実践を踏まえて教師の手立て（動画や写真の示し方、教師の声の掛け方など）や地図などの教材がより工夫され、児童にとって何を学ぶのか分かりやすいものになっていたのではないか。
・教師の話を聞く、友達の発言や行動に注目するなどの学習に向かう姿勢への成長が見られ、そのことが影響したのではないか。
・「見通し」や「振り返り」について、授業づくりを行う教師の意識にも変化があり、授業の様子を動画で見る際に子供の姿をそれらの視点からより詳しく見ようとしたからではないか。

イ）児童から引き出したい姿が十分に引き出せていたか、個人差があることの要因

・子供によって教材や題材に対する興味や関心は異なるので、今回の「町探検」の題材に興味がもてなかった児童もいたのではないか。
・言葉による表現に関する行動が少なくなっているので、想定していた「引き出したい姿」が今回の 1、2 段階の子供の言語力に対して難しい部分があったのかもしれない。
・生活科の教育課程（年間の単元配列）は、学年が上がるごとに上の段階の内容を想定した題材の配列になっているため、特に１段階の児童は題材と子供の目標との不一致が生じているのではないか。さらに、目標段階の異なる児童を同じ題材で指導する「同単元異目標」の授業であり、個々の目標に応じた授業づくりがより難しくなるため、そのことが影響しているのではないか。
・手立てや教材を工夫しても、それでも時間軸を捉える力、記憶の力など見通しをもったり振り返ったりするのに必要な力が未熟な児童にとっては、学習したことを結び付けることが難しいのではないか。

（５）各学級での取組

今年度の研究では、部研究で実施した研究授業以外にも、各自が「見通し」「振り返り」を意識した実践を行っている。以下に、年度末にとった研究の振り返りに関するアンケートの一部を紹介する。

・動画を振り返りに使い、自分の言動を動画で振り返らせることができた。
・模造紙などに学習したことをまとめて、授業以外でも思い出せるように工夫した。
・活動の写真や動画を見て、ワークシートで振り返る活動に積極的に取り組んできた。
・授業のねらいや流れを説明するスライドを、写真やイラスト、ときには効果音も効果的に使いながらこれまで以上に工夫して作るようになった。
・各段階の児童の言葉やイラストの理解の力などに応じて、動画やイラストの見せ方、言葉の掛け方などをより工夫して活動の振り返りをさせるようになった。
・生活科では、全ての単元ではないが、単元の始めにめあてとして示したことに対して、シールなどを使って「できた」「できなかった」の２択で振り返りをさせてきた。子供によっては、意味を理解してきて選択の際に悩んで選ぶ姿が見られてきた。
・帰りの会で一日の振り返りをするようにした。その日の出来事を単語で話したり、「がんばった」「たのしかった」などの気持ちのカードをよく見て選ぶようになったりなど、その日を振り返る姿が増えた。生活科の学習で振り返りができつつあることとも関係していると感じる。
・授業の中でこれまで以上に具体物や動画、写真などを活用するようになった。
・子供に分かりやすく目標を示すことを意識したが、授業によっては難しいこともあった。目標、または活動内容でもよいので、ひな形を決めて示すようにしていってもよいのかもしれない。
・身近な題材、実生活に生かせそうな題材をより意識するようになった。

3　研究成果と今後の課題

附属スタイル「学習の見通しをもたせる」「振り返りの充実」に焦点を当てて取り組んだ研究授業や各学級での取り組みを通して、以下のような研究成果と今後の課題が挙げられた。

（1）研究成果

①これまで以上に児童の興味関心や生活経験を踏まえて題材選びや活動内容を設定しようとする教師の意識の変化があり、題材選びの視点が広がった。

②児童への見通しのもたせ方や振り返らせ方をより意識した教材準備や手立てを行おうとする教師の意識の変化により様々な取り組みが行われ、導入やまとめの授業が充実してきた。

③見通しをもって学んでいるか、学びを振り返ることができているかの視点で児童を見る教師の意識が高まり、より児童主体での授業づくりを考えるようになった。

④教師の話を聞いたり友達の発言や行動に注目できるようになったりといった児童の成長も相まって、単元やその日の授業を振り返る学習の流れや仕方が児童に定着してきた。

（2）今後の課題

①児童の興味関心や生活経験に沿った授業づくりは重要である一方で、児童の興味関心や生活経験は個々で異なっている。児童の興味関心や経験を広げていく視点は重要なので、学校周辺の教育資源、時代の潮流、児童の将来（キャリアの視点）など、また違った視点から題材や学習活動を充実させていく必要がある。

②「見通しをもたせる」「振り返りの充実」の視点から教材や学習の手立てが充実した一方で、想定していた「引き出したい姿」が児童の実態（言葉の表現力や理解力等）に応じたものになっていたかの検討は十分でなかったので、今後の実践を通して「引き出したい姿」を整理できるとよい。

③目標段階の異なる児童が集団で学ぶ授業づくりにおいて、題材選びや学習活動の設定に難しさを感じる教師が多く、研究授業等を通してその在り方を検討していけるとよい。

④言葉の理解が難しい児童、表出が少ない児童、抽象的なイメージの理解が難しい児童、自分を客観視することが難しい児童など、「見通しをもって学ぶ」「学習を振り返る」ことが難しい児童に対して、どのような学習活動が適しているのか、繰り返すことで身に付くものもあるので、実践を重ねながら引き続き検討が必要。

⑤今年度、各学級で取り組んだものを共有することはできなかったので、それぞれが取り組んだめあての示し方や振り返りシートの形式など、よかったものを部共通のツールとして活用できるようにしていけるとよい。

（3）まとめ

最後に、「附属スタイルを取り入れたことで授業は変わったのか」「児童が主体的に学ぶ生活科の授業とはどのようなものか」について、研究の成果と課題を踏まえて改めて意見を出し合い、部研究を総括した。

授業の主体者である児童が、何を学ぶのか（見通し)、授業を通して何を学んだのか（振り返り）を自覚することが主体的な学びでは大切であると考える。今回「見通しをもたせる」「振り返りの充実」の視点から引き出したい姿を整理し、手立てをより具体的に考えて授業に取り入れたことで、児童が何を学ぶのか、学んだのかを自覚する機会が増えてきた。それが生活科の目標にある「意欲や自信をもって学ぶ」ことにつながり、特に学びに向かう力や人間性等の目標達成により迫ることができたのではないかと考えている。

また、生活科の授業は前述「テーマ設定の理由」の記述通り、「学びを実生活に生かし、よりよい生活を創造していく」ことを目指した教科である。研究成果に示したとおり、児童の興味関心や生活経験に根差した題材選びや学習活動の設定を行うことは、児童が主体的に学ぶ上では大切な視点の一つであった。「学びを実生活に生かし、よりよい生活を創造していく」ためには、児童が「身近な人々、社会及び自然を“自分との関係で捉える”」ことが、重要であるが児童がこれらを“自分との関係で捉える”ためには、まずは自分自身の経験や興味関心をその手掛かりにしていくことが重要であると考える。我々教師も、生活科の授業づくりにおいては、児童の興味関心や生活経験を手掛かりに、学習内容を習得し目標達成を目指す上で必要な題材や学習活動は何がよいのか、キャリア教育の視点、学校周辺の教育資源なども踏まえた上で、今後さらに検討していく必要があると考えている。

これからも、児童一人一人が「自ら学び、学びを実生活に生かせる」児童主体の生活科の授業づくりについて検討を重ねながら、児童が主体的に学ぶ授業とは何か、実践と検証を重ねていきたい。

【附属スタイル】

参考資料

目標段階別の「引き出したい子どもの姿」と「授業の工夫（サンプル）」

		子供が意識する ポイント	子供から引き出したい具体的な姿	子供の姿を引き出すための教師の工夫（サンプル）
Ⅰ段階	学習の見通しをもたせる	・教師の支援を受けてすることやしたいことを選ぶ。 ・自分のすることや役割が分かる。	・活動内容を示したりイメージしたりする写真やイラストなどを見ている。 ・教師が提示した２つ程度の選択肢から、することやしたいことを選んでいる。 ・話をしている教師や教材、スライドなどに注目している。 ・集団の中で学習に参加している。	①子供が興味のある題材を用いる。 ②子供が好きな写真やイラストを準備する。 ③目標となる活動について、具体物等を用いて具体的行為として示す。 ④活動の手本を、具体物を用いて示す。 ⑤掲示物を工夫する、教材・教具の設置位置を固定するなど、授業に参加できるような環境作りをする。 ⑥子供の表現に、教師が共感して繰り返したり、対応付いた言葉を伝えたりして、対象と結び付ける。
	粘り強く学習に取り組むための手立の充実	・教師の支援を受けて、活動をやってみようという気持ちをもつ。	・「もう１回したい。」「やってみたい。」ことを、行動や言葉で表している。 ・教師、教具に注目し、意欲的に活動に参加している。 ・教師と一緒に活動の最初から最後まで取り組んでいる。 ・相手のしぐさや動作、音声を真似している。	⑦子供が好きな活動や興味のある活動を取り入れる。 ⑧具体物を用いて、結果や終わりの分かりやすい活動を設定する。 ⑨やりたいもの、関心のあるものを、手に取りやすい状況で提示し、何度でも選択し、取り替えることができるようにする。 ⑩友達がやっている姿や教材・教具が見える場の設定にする。 ⑪何度でも操作できるような、場や活動・時間の設定をする。 ⑫やったことに対して、子供が何らかの言葉や表現で伝えたときに、子供にとって聞いてもらえる環境にし、教師は快の感情になるリアクションをする。 ⑬取り組む姿勢や気持ちを大事に賞賛する。 ⑭児童の近くで活動を促すような声掛けをし、行動に対して教師が認めたり意味づけたりすることで、自身の行動に喜びを感じられるようにする。
	協働的な学びの充実	・教師の支援を受けて、教師や友達の言動に注目する。	・教師や友達の真似（模倣）をしている。 ・友達と簡単なペア活動をしている。	⑮活動しやすいような教材を選ぶ。 ⑯繰り返し、取り組ませる。 ⑰目の前で、大きな動きで手本をする。
	振り返りの充実	・教師の支援を受けて、自分がしたことが分かる。	・自分がしたことを示す写真を選んでいる。 ・教師と一緒に、学習の流れや内容を振り返る写真やイラストを見たり、動作で表現したりしている。 ・できたことに対して、何らかの言葉や表現で伝えている。	⑱活動の写真やイラスト、実際に使った具体物などを見せたり扱わせたりする。 ⑲取り組んだことを、友達の前で紹介させる。 ⑳「できた」瞬間に、教師からできていることを賞賛されたり、喜びを共有されたりする場面を設定する。

【附属スタイル】

参考資料

目標段階別の「引き出したい子どもの姿」と「授業の工夫（サンプル）」

		子供が意識するポイント	子供から引き出したい具体的な姿	子供の姿を引き出すための教師の工夫（サンプル）
2段階	学習の見通しをもたせる	・活動することが分かり期待する。 ・達成可能な自分の目標をもつ。	・これまでの経験や自分がもっているイメージをこれからする学習に結び付けている。 ・絵、写真、教師のモデル、言葉の説明から、今からすることが分かっている。 ・活動することが分かり、活動への期待感を高めた発言をしたり活動に関わる言葉を言ったりしている。 ・いくつかの目標の選択肢の中から、自分ががんばりたい目標を選んでいる。	①疑問を引き出したり、やってみたいと思えたりする教材、教具を準備する。 ②活動することをイメージさせるために、絵、写真、教師のモデルなどを提示しながら、簡単な言葉を用いて説明する。 ③児童が達成可能な目標の選択肢を複数準備し、児童に分かるように写真などを用いて提示する。 ④既習事項（前時や前年など）の振り返りをして、本時への意欲を高める。 ⑤三つから四つ程度の学習の計画を提示する。 ⑥具体物などを用いて、学習の目標やゴールを伝える。 ⑦子供の発言を生かしてがんばることを決める。
	粘り強く学習に取り組むための手立の充実	・自分で最後まで取り組む。	・繰り返し活動に取り組んでいる。最後まで取り組んでいる。 ・「～したい」ことを伝える。 ・一連の活動の流れが分かり、一人で取り組んでいる。 ・諦めずに取り組んでいる。（自分の気持ちが伝わらないときに言い換えて伝えようとしている。） ・気付いたことを教師に伝えている。 ・教師の話に注意を向けて聞いたり、提示したものに注目し続けたりしている。	⑧達成可能な最近接の課題を設定する。 ⑨子供が最後まで取り組めるように、活動内容や場、時間の設定を工夫する。 ⑩最後まで活動に取り組ませるために、活動の見通しをもたせる。 ⑪友達や教師の取り組む様子、モデルとなる児童に注目させる。 ⑫活動に取り組むよい行動、姿（経過）を賞賛する。 ⑬伝えたいという気持ちを高めるために、子供が伝えようとしている言葉などに、耳を傾けて聞くようにする。 ⑭活動が停滞しているときは、手順を確認したり「次は？」と問い掛けたりする。 ⑮できないときは教師が手伝い最後は自分でさせることで、達成感を味わわせる。 ⑯できないところは「手伝って」と伝えるように促し、上手くいかないときにはやり直しさせるようにする。
	協働的な学びの充実	・周りの人や活動に目を向ける。 ・人と一緒に活動に取り組む。	・友達の活動している様子をよく見ている。 ・教師や友達がしている言葉や動作を模倣している。 ・活動している友達に対して、自ら声を掛けている。（注意、応援など） ・友達と一緒にごっこ遊びなどの活動をして楽しむことができている。 ・準備や片付けに気付いて、自ら手伝うことができている。	⑰教師や友達が活動している様子が見えやすい場の設定を工夫する。 ⑱抽象的な概念は分かりやすい身近な言葉に置き換えるなど、分かりやすい言葉掛けをする。 ⑲活動のやり方の手本を示したあと、子供たちだけで考えたり取り組めたりするような場を設定する。 ⑳子供たちに考えさせたり、子供たちだけで取り組んだりできるように、教師は必要以上に介入せず待つようにする。 ㉑子供の様子を見て言葉掛けや援助量を少しずつ減らして、自分で考えて取り組めるようにする。
	振り返りの充実	・活動を思い出し（想起し）自己評価する。 ・気持ちを伝える。	・映像や写真を見て、活動したことを思い出している。 ・教師の振り返りを促す簡単な質問に言葉で答えている。 ・いくつかの活動の写真から、選んで伝えている。 ・自分の目標に対して、花丸か三角の二択から一つを選び自分の気持ちを伝えている。 ・活動に対する自分の気持ちを表情カードから選び、伝えている。	㉒次時の予定を視覚的な教材や具体物などを使って説明する。 ㉓活動したことを思い出させるために、分かりやすい言葉、動画、写真を用いる。 ㉔自分が作成したワークシートを確認させる。 ㉕目標に対する児童の気持ちを引き出すために、花丸と三角の二択の絵カードを用いて選ばせる機会を設定する。 ㉖他者からの称賛や評価の機会を設ける。 ㉗活動に対する児童の気持ちを引き出すために、表情カードを用いて選ばせる機会を設定する。

【附属スタイル】

参考資料

目標段階別の「引き出したい子どもの姿」と「授業の工夫（サンプル）」

		子供が意識するポイント	子供から引き出したい具体的な姿	子供の姿を引き出すための教師の工夫（サンプル）
3段階	学習の見通しをもたせる	・達成可能な具体的な目標をもつ。 ・自分が十分ではない点に気付く。 ・目標達成のために必要なこと（がんばることやすること）が分かる。 ・この学習で学ぶことの理由や意義に気付く。	・教師の言葉を手掛かりにして、実現可能な目標を考えている。 ・教師の言葉を手掛かりにして、目標達成のために必要なことを言葉にしたり書いたりしている。 ・「～はできていない。」「～ができるようになりたい。」など、自己を振り返るような発言をしている。 ・「これができたら～だから。」など、この学習で学ぶことの理由や意義を考えている。	①分かりやすく明確な３段階程度の評価基準を提示する。 ②日頃や以前の学習時の子供の様子を、写真や動画で振り返らせる。 ③子供に予想を考えさせる。 ④友達の発言や行動と比較をさせる。 ⑤学習の進め方を考える場を設定する。（誰と、何をする　など） ⑥学ぶ意義や理由を考えられるように、過去の学習を振り返る言葉掛けやキーワードを伝える。（前回はどうだった？　どうして～するのかな？　など） ⑦目標を考えるための簡単なキーワードを伝えたり問い掛けをしたりする。（～ができたらどうなる？～はできているかな？など）
	粘り強く学習に取り組むための手立の充実	・目標達成のために試行錯誤する。 ・ゴールが分かって学習を進める。 ・「したい」という気持ちを継続してもつ。	・うまくいかなくても、最後までチャレンジしようとしている。 ・活動に興味をもって取り組んでいる。 ・うまくいかないときに、違うやり方を考えて取り組んでいる。 ・学習のめあてに沿った行動や発言をしている。 ・困った場面や分からない場面で、自分から助けを求めたり質問したりしている。	⑧活動のめあてを考えたり、提示したりする。 ⑨学習のめあてをプリントに書かせたり、発言させたりする。 ⑩予め立てた学習の計画を基に、どこまで学習が進んでいるのかを確認させる。 ⑪予め立てた予想を思い出させる言葉掛けをする。 ⑫どうして？なぜ？など、考えさせる言葉掛けをする。 ⑬「そのやり方いいね。」「できているね。」などの共感的な声掛けや、そのときの学習のめあてを思い出させる声掛けをする。
	協働的な学びの充実	・友達の様子や成果物を見る、友達の発言を聞くなどして、学習の進め方や違う意見、考えに気付く。（見て学ぶ、聞いて学ぶ）	・友達の作品を見たり意見を聞いたりして、うなずいたり相槌をうったりしている。 ・友達に対して自分の考えを伝えたり、友達の話を真剣に聞いたりしている。 ・友達の様子を見たり発言を聞いたりして、自分のやり方を調整している。 ・困っている友達を助けたり、一緒にやろうと声を掛けたりしている。	⑭友達の作品やプリントを見て気付いたことや良かった点を伝え合わせる。 ⑮グループ(ペア)ワーク、話合いの場を設定する。また、その際に考えるポイントを分かりやすく伝えたりプリントなどで提示したりする。 ⑯友達の意見や行動に着目させ、「あれいいね。」「やってみたら？」などの働き掛けをし、友達を参考にするように促す。 ⑰友達の様子に気付けるような言葉掛けをしたり、友達の様子を見るよう促したりする。
	振り返りの充実	・客観的に自己評価をする。 ※「できたこと」が分かり、「できなかったこと」に気付く。 ・次は（も）がんばるという気持ちをもつ。	・できていることだけではなく、できていないことについても自己評価をしている。 ・自身が学習したことを、どこで、何をして、何が分かったなど、詳しく話している。 ・学習したことの簡単な感想や、次につながる意欲的な言葉（次はがんばる など）を発言したり書いたりしている。	⑱写真や動画で学習を振り返らせる。 ⑲ワークシートなどを用いて振り返りを行う際に、３段階程度の簡単な評価基準を提示する。（一人でできた・先生に手伝ってもらった・できなかった　など） ⑳めあてに対する友達から見た評価や教師から見た評価を伝え考えさせる。 ㉑手掛かりになる言葉を掛けながら、簡単な感想や気付きを書かせる。 ㉒前回との比較などから、到達度が意識できるような言葉を掛ける。 （前回できていなかったけど、今回～はできていたよ　など） ㉓できていたことは褒めつつ、十分ではなかった点も伝えてできていないことに気付かせる。また、「次は頑張ろう」など、次への意欲につながる励ましの言葉を掛ける。

Ⅱ－２　中学部の研究

自分の成長を実感し、学習に対する意欲を高めるための振り返りの時間を設定した授業の在り方
～言葉がもつよさに気付かせるための国語科の授業実践～

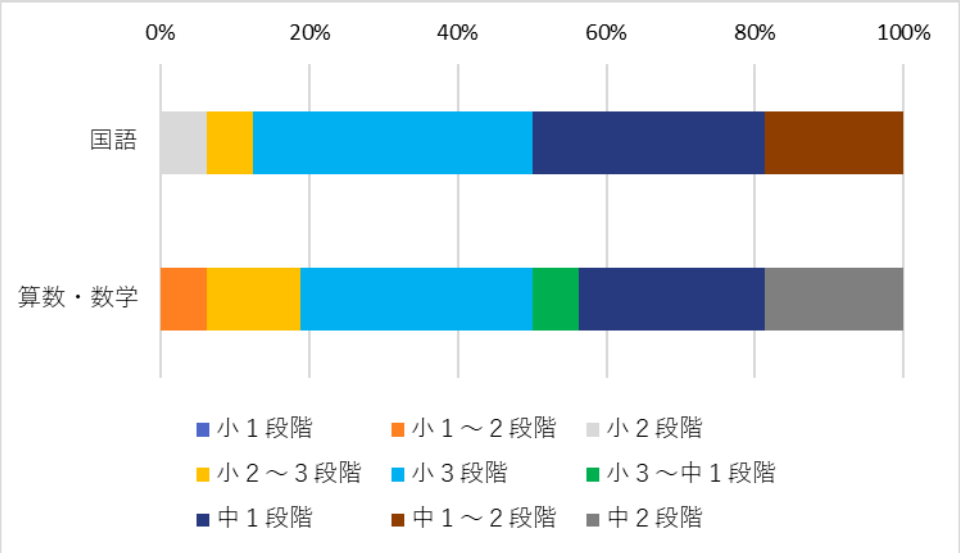
Ⅱ－２　中学部の研究

１　生徒の実態と研究テーマについて

（１）中学部の概要

中学部は１学年１学級定員６名で、現在、16 名の生徒（1 年生 6 名、2 年生 4 名、3 年生 6 名）が在籍している。障害種別では、知的障害 30%程度、自閉症スペクトラム 25%、ダウン症候群 25%、精神発達遅滞 12．5%、その他 6%程度となっている。生徒の実態を知的発達の水準から見ると、検査実施年度に差があるが、田中ビネー知能検査で IQ25 台の生徒から WISC-Ⅳで全検査 IQ70 台の生徒まで、実態の幅が広く、知的能力に差がある集団であることが分かる。生活年齢でみると、思春期を迎える時期であるため、自我の確立や、興味の変化、感情の不安定さ、仲間関係を重視するなど、思春期の特徴的な様子がみられる生徒がいる。

また、コミュニケーションの様子を見ると、身近な人との会話であれば、2～3 語文程度の言葉を使って話すことができる生徒から、自分の気持ちや伝えたいことを詳しく話すことができる生徒まで様々で、集団指導においては、個に応じた支援を必要とする生徒も在籍している。以下、今年度の中学部に在籍している生徒の国語、算数・数学の学習目標・内容別実態を示す。（図Ⅲ-中 1）



図Ⅲ-中１　在籍する生徒の国語、算数・数学の履修状況（令和６年度）

（２）研究テーマについて

①　テーマ設定の理由

特別支援学校学習指導要領解説には、「学習評価は児童生徒にとって、自分の成長を実感し学習に対する意欲を高める上で有効であり、教師にとって、授業計画や単元計画、年間指導計画等を見直し改善する上でも、効果的に活用していくことが重要である。」と明記されている。しかし、中学部では、学級内の取り組みとして、学校生活の振り返りには、継続して取り組ませることができているが、教科の授業に特化して、授業後に「この授業を受けてどうだったか」を振り返る時間をほとんど設定しておらず、生徒が授業を受けて、自分の成長をどのように実感したかや、次の課題としてどのようなことを考えているかといった自身の成果や課題を把握することが難しい。また、本研究の１年目で明らかにされた「生徒の自信のなさが目立つ」という中学部の現状と課題に対しても、具体的な改善策を見付けることができていない。そこで、附属スタイルの「振り返りの充実」に着目し、学習の振り返りを意図的に計画して行うことで、生徒が具体的に「何ができるようになったか」を理解する機会となったり、次の自分の課題へ向かう動機付けを行ったりすることへと繋がるのではないかと考えた。また、振り返りをきっかけとして、自己の成長を認め、自信をもつことで次の学びへの意欲を高めることもできるのではないかと考えた。

振り返る際には、言葉によって自分の考えを形成することが必要であるため、生徒の言語理解の実態を考慮するために、実践の対象として、国語科を取り上げた。中学部では、4 つの習熟度別グループに分かれて学習に取り組んでいる。また、学習指導要領の国語科の学びに向かう力・人間性等の目標には、「言葉がもつよさに気付くとともに、言語感覚を養い、国語を大切にしてその能力の向上を図る態度を養う。」とあり、ここで挙げられている「言葉がもつよさ」には、言葉によって自分の考えを形成したり新しい考えを生み出したりすること、言葉から様々なことを感じたり、感じたことを言葉にしたりすることで心を豊かにすることなどがあるとされている。本研究の振り返りでは、言葉で自分の考えを形成したり、感じたことを言葉にしたりすることで心を豊かにするという「言葉がもつよさ」を生徒が実感することもねらった。

②　研究仮説

単元計画や授業計画の中に「振り返りの時間」を位置付けし、生徒の授業後の成果を整理することで、自分の成長や課題を実感させ、生徒がさらに学習したいという意欲を高めることができるのではないか。教師としては、授業のねらいを明確にし、生徒が振り返りの時間に、どのような成果を挙げるか予測しながら、授業を計画することで、生徒が学習への意欲をもち続けることができる授業を目指すことができるのではないか。

単元や教科を超えて、他教科や自立活動等と連動しながら生徒の課題の解決を図る学習を設定していくことは、教科等横断的な視点で学ぶ生徒を中心に据えながら、中学部の教育課程を編成することにもつながるのではないか。

③　研究内容及び方法

ア）振り返りの時間の授業スタイルの検討（振り返りの目的、振り返りシートの検討、SSB との関連性）

・日頃の授業実践で、振り返りをするときにどのような手立てを行っているかを共有する。

・中学部として考える「振り返り」の取り扱い方を発達段階に合わせて検討する。

イ）　振り返りの時間を設定した国語科の授業づくり

・授業のねらいと予測される生徒の成果を検討する。（授業実践前）

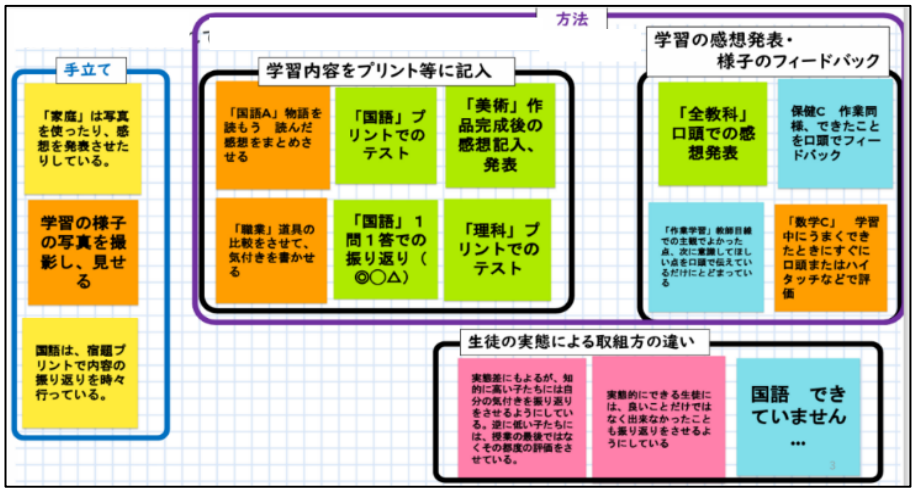
・生徒の振り返りを設定した、単元計画、授業計画の検証をする。（授業実践後）

２　研究実践

（１）第１期　これまでの授業づくりについての確認と中学部における振り返りの定義づけ

①　これまでの「振り返り」についての情報共有

中学部職員で、日頃の授業における振り返りの方法や手立て、頻度について、情報共有を行った。「生徒に学習の感想を口頭で発表させたり、ワークシートに記入させたりする」や、「教師が生徒の様子をフィードバックする」、「学習内容をプリント等に記入する」という方法が多くとられていて、その際の振り返りを促すための手立てとしては、「写真や動画を見せる」が主に使われていた。振り返りを行う頻度は、教科の特性や生徒の実態によって異なっていることが明らかになった。（図Ⅲ-中 2）



図Ⅲ-中２　授業で行っている振り返りの方法・手立て（研究前）

②　中学部における「振り返りの充実」のとらえ

附属スタイルでは、「振り返りの充実」を生徒自身が単元や本時の学習を次の学びへとつなげるための「振り返り」の充実と意味付けしている。そこで、中学部の生徒が振り返りをすることで、どのような姿になることを目指したいかを話し合った。現在中学部に在籍している生徒の実態や、学習態度等を踏まえた結果、「自分自身の学習の成果と課題を理解することができる」、「自分の様子と他者の様子を比較することができる」、「評価をもとに、次の学習への意欲をもつことができる」の３点がポイントとなるのではないかと結論付けた。そこで、「振り返りの充実」を図ることでねらう中学部の生徒の姿を「自分自身の学習の成果と課題を理解し、次の学習へ向けた目標を見付けることができる」とした。

③　振り返りシートの作成（P60 参考資料①）

臺（2016）は、知的障害のある児童に対し、単元全体をつなぐ「振り返りファイル」を活用させ、単元を通して振り返る活動を行えば、主体的に学ぶ意欲を高めることができると分かったと述べている。

そこで、生徒が振り返りの活動自体に慣れていくことや、教師が意識して授業の振り返りをする機会をもつことができるように、どの教科でも共通して使用することができる振り返りシートを作成した。作成した振り返りシートは、生徒の振り返りを促すための手立てとするため、シートの中には教師が振り返りをとおして押さえてほしいポイントを記入する様式とした。その際、知識・技能に関する振り返りも必要であるが、それだけでは、次への目標をもたせるという部分へのアプローチが希薄になってしまうと考えたことから、学習のプロセスを振り返ることができるように、感想記入の欄を設けた。感想記入の欄は、生徒が自由な発想で書けるように、頑張ったこと等の文字情報をあえて無くし、イラストの表情を参考にしながら、記入させるようにした。また、学習中の写真、制作物、教材で使ったイラスト等を添付することで、学習の様子を思い出す手掛かりとなるように配慮した。ここ数年、中学部では、情報機器の活用に力を入れており、書字が難しくても、タブレット PC を使って文字入力をすることができる生徒が多いため、振り返りシートの記入の際も、タブレット PC を活用できるようにした。

（２）第２期　研究授業の実施（１回目）とそこから見えた課題

①　学習グループの生徒の実態と授業実践のねらい

授業の概要は、以下のとおりである。(P61～64 参考資料②)

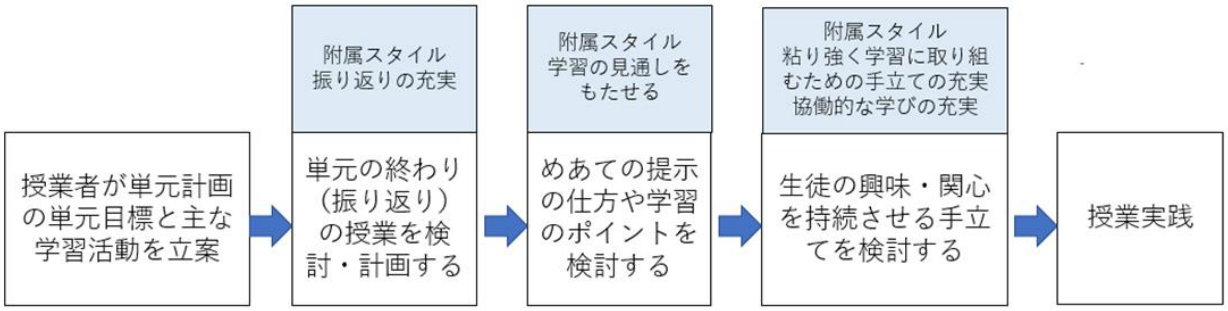
単元名：調べて書こう 学習グループ：B グループ（中学部 1～2 段階） 授業時数：全 5 時間

本グループの生徒たちは、簡単な質問や、自分の興味があることを話すことは得意である。一対一で話をするときはよいが、一対多数で話をしているときは、聞き取りが難しいときがある。また、文章を読むことはできるが、内容の理解はできていないことがあり、教師が補足説明することがある。書字については、平仮名が目立ち、漢字は小学 1～2 年生程度であれば、書くことができる。生活全般の様子として、興味をもつことが限られていて、集団の中の一人であることを意識した行動が少ないという共通点が挙げられた。

中学部 1～2 段階を学ぶ生徒の「調べて書こう」という単元は、情報の扱い方や集めた内容の大体が伝わるように伝える順序等を考えることをねらう学習である。そこで、授業実践では、調べた情報を整理し、他者に伝えることに重点を置いた。そこで、単元を「情報の調べ方を知る」→「情報を調べる」→「情報を整理する」→「他者へ伝える（発表)」という順序で構成した。

②　「振り返りの充実」を図るための工夫

授業づくりのための研究会は、以下の順番で取り組んだ。(図Ⅲ-中 3)

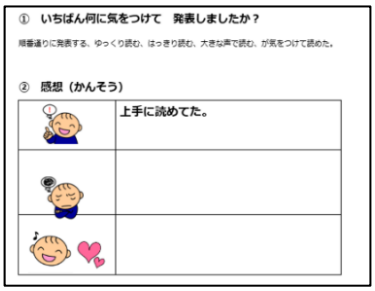
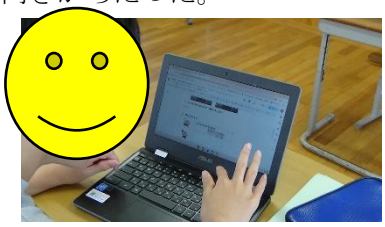
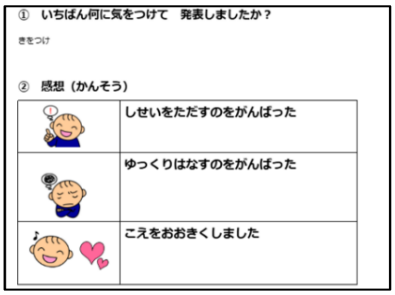


図Ⅲ-中 3　授業づくりの順番

「調べて書こう」という単元の特徴を考慮し、情報を整理する段階では、生徒が伝わりやすい順番になっているか、要点を落としていないか、余計な情報がないかなど、情報の整理の仕方のポイントを確認できるように、まとめ方の順番のテンプレートを提示することにした。また、他者へ伝える段階では、ゲストを１名依頼し、相手にその場で感想をフィードバックしてもらうことにした。また、教師側の評価の視点となるポイントを生徒には「伝え方のポイント」として提示し、意識するべきところを明確にした。発表では、話し方も相手への伝わりやすさの要素になるため、自分の話し方を知ることができるように、練習の際に、動画を撮影し、どのような話し方が伝わりやすいかを考えさせることにした。

③　授業の様子と振り返りの姿

授業に参加した生徒４名中２名の様子と、記入した振り返りシートは以下のとおりである。

対象生徒	単元をとおした授業の様子	単元終了時の振り返り
生徒 D	・教師が提示したポイントを参考に、自分が目標としたことを授業後に書きあらわすことができたが、授業を受けた気持ちの表現は難しかった。 ・発表では、伝える相手を目の前にして、とても緊張していた。 	
生徒 E	・自分の興味がある施設を調べることができたため、調べる活動に意欲的だった。 ・自分の発表している様子の動画は見るが、よくできていないところに意識が向きがちだった。 	

④　考察と課題

教師側の評価の視点となる伝え方のポイントとめあてを関連付けて、2/5 時間目から触れていたため、生徒にとって、めあてを達成するための方法が具体的に分かり、めあてを意識し続けながら、学習に取り組むことができた。伝える相手が目の前にいて分かりやすかったことから、やる気を引き出すことができた生徒がいた一方で、緊張してしまう生徒もいた。授業者としては、振り返りを前提として、授業を作成したことから、授業の終わり方を明確にすることができ、そこから逆算して、毎時間ごとのめあてを明確に提示したり、発問等を生徒に簡潔に伝えたりすることができた。

しかし、振り返りの場面では、「できたこと」については書けるが、「できなかったこと」については、書いていない生徒もいた。池田ら（2023）においても、「肯定的な自己理解の難しさや、自己評価と他者評価のズレ、また授業に対する集中力の欠如などの実態差が課題」とあり、本研究でも、教師が見て、課題に気付いているのではないかと思われる様子があっても、表出をしなかったり、教師の評価とは違うことを書いたりとずれを感じる場面があった。また、一般的に、思春期になると脳の発達や経験の積み重ねにより高度な客観視の能力が育っていくとされているが、本グループの生徒には、比較対象となる行動の経験不足や自分の行動を振り返ること自体への経験不足があるのではないかと考えられた。

（３）第３期　振り返りの充実のさせ方についての検討と研究授業の実施（２回目）

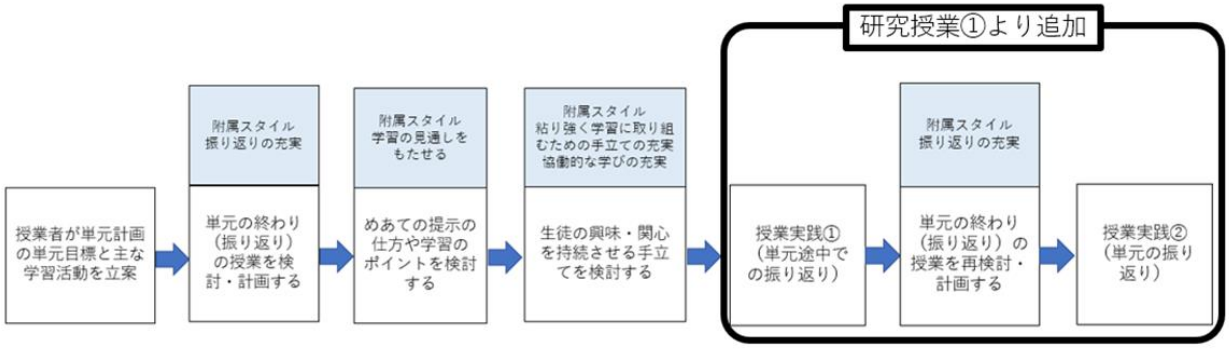
①　振り返りの充実のさせ方についての検討

研究授業の考察と課題や、他教科での振り返りの様子を踏まえ、中学部職員で、振り返りに重点を置いた授業づくりについての検討を行い、生徒の学習の様子の面と教師の授業づくりの面で、成果と課題とその要因を以下の表のように整理した。（表Ⅲ-中 1）

表Ⅲ-中１　振り返りに重点を置いた成果と課題（一学期終了時点）

	成果	課題	課題の要因
生徒	・「振り返りをする=単元の終わり」ということが理解でき、次は新しい学習がはじまるという見通しをもてるようになってきた。	・感想の記入については、できたことや頑張ったことについては書けるが、難しかったことや次に頑張りたいことを記入することは難しい。 ・振り返りに時間がかかる。	①自分の学習前と学習後の様子を比較することが必要であるが、学習前の様子を覚えておくことが難しい。 ②自己を見つめることの経験不足。 ③難しかったことや次への目標を分かっていても、他者へ表出することは難しい。
教師	・生徒の言葉で記録を残すことで、学習を通して何を感じたのかが、明確になった。 ・生徒の言葉を授業改善に生かせるようになった。	・振り返り自体にかかる時間が、生徒の言語理解、自己理解、書字や機器操作の実態によって差があるため、授業時間の配分が難しい。	①評価の視点を生徒の実態に合わせて、より精選し、めあてを提示する必要があった。 ②振り返りの表現の仕方を生徒の力に任せていた。

課題の改善のため、生徒の課題の要因①に対しては、単元の学習が半分過ぎた頃に、中間評価と位置付けて振り返りの時間を設定し、生徒に一旦学習への取り組みを振り返らせることにした。途中で、単元の終わりに向けた目標を考えさせることにより、単元の最後の振り返りを行うときに、目標を達成できたかを考えることができるようになることをねらった。（図Ⅲ-中 4）また、教師の課題の要因②に対しては、自分の言葉だけで、振り返りを促すのではなく、友達や教師、保護者など、身近な他者の意見を参考に自分の意見を生み出すことができるような手立てが必要だと考えた。



図Ⅲ-中４　授業づくりの順番（研究授業①を受けて）

② 学習グループの生徒の実態と授業実践のねらい

2 回目の研究授業でも、1 回目の研究授業と同じ単元で行い、手立ての検証をすることにした。授業の概要は、以下のとおりである。(P65～68 参考資料③)

単元名：調べて書こう 学習グループ：C グループ（小学部 3 段階） 授業時数：全 8 時間

本グループの生徒たちは、障害特性による発語の不明瞭さがあり、話すことをまとめることが難しかったり、話す相手によって話し方が変わったりするが、話すこと自体は好きな生徒たちである。聞くことについては、一対一であれば、集中して聞くことができる。書字については、基本的に平仮名で、促音や拗音が抜けることが多い。生活全般の様子として、特定の他者への関心が高いことや、任された役割には意欲的に取り組むことができること、初めてのことや苦手なことには気持ちがのらないが、パターン化されると、スムーズに取り組むことができることが共通点として挙げられた。

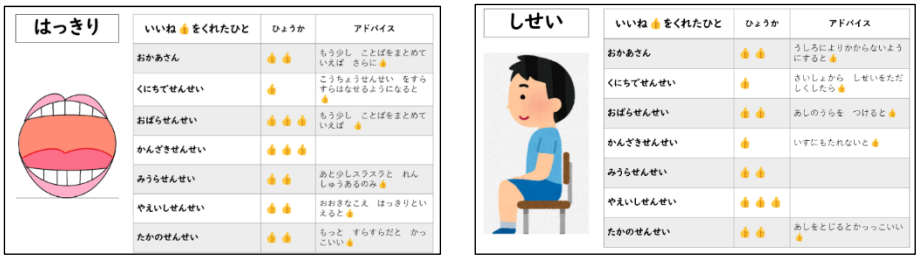
小学部 3 段階を学ぶ生徒の「調べて書こう」という単元は、情報の集め方を知ったり、集めた情報を他者へ伝えたりすることをねらう学習である。授業実践では、インタビュー結果を他者へ伝えることに重点を置いた。そこで、単元を「インタビューをする」→「他者へ伝える（発表）」という順序で構成した。

③ 「振り返りの充実」を図るための工夫

教師側の評価の視点となる伝え方のポイントとめあてを関連付ける際は、伝え方のポイントを 2 点に絞って、めあてとの関連性をより強くした。「インタビューをする」場面は、特定の他者への関心が高いという生徒の共通する実態を生かし、好きな先生にインタビューをするという形式にすることで、学習への意欲をもち続けることができるようにした。また、「他者へ伝える」場面は、伝える相手は自分たちの保護者や先生と明確に提示するが、直接伝える形ではなく、動画撮影をして、その動画を見てもらうという間接的な形をとった。

動画を見て振り返りを行う際は、全体で見るのではなく、自分の動画を自分一人で見ることができるように、一人に一台ずつタブレット端末を用意し、自分の様子にのみ注目させるようにした。

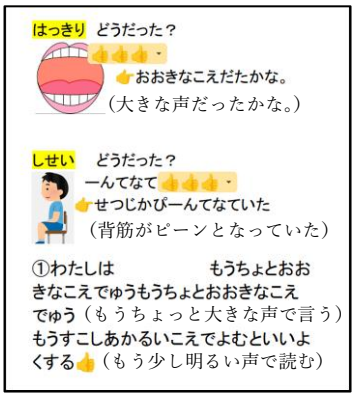
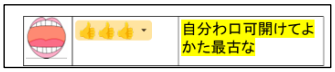
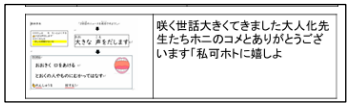
図Ⅲ－中 4 で示したとおり、単元の途中で中間評価をさせるための振り返りの時間を 1 時間設定した。その際も、単元の最後で行う振り返りと同様に、動画での学習の様子の振り返りを行い、自分の様子を客観視させた。また、他者の意見を参考にしながら、自分の考えをまとめることができるように、グループに在籍している生徒の保護者と中学部職員が、発表動画を見て、フィードバックをするためのアンケートを中間の振り返りと単元の振り返りの前の 2 回行った。フィードバックをする視点は、生徒が意識している伝え方のポイント 2 点とし、それぞれに対していいねマーク（👍）を 3 段階でつけ、気付きを自由記述で回答した。



フィードバック用に作成したワークシート

④　授業の様子と振り返りの姿

授業に参加した生徒４名中２名の様子と、記入した振り返りシートは以下のとおりである。

対象生徒	単元をとおした授業の様子	中間評価	単元終了時の振り返り
生徒 B	・アドバイスに書かれていた「明るい声」がどのような声か気になり、話し方を教師と相談することができた。 ・動画を見比べることで、自分の改善点を考えることができた。 		 （もうちょっといけそうかも。 もう少しいけそうかな。背筋ピン。 大きな声ではっきりと言えた。）
生徒 D	・自分が発表している様子を動画で見て、気付きを書くことができた。 ・アンケート結果が、思っていた評価ではなくショックを受けるが、アドバイスを参考にしようとした。 		 （自分は口を開けてよかった。最高だな。）  （作戦は大きくできました。先生たち本当にコメントありがとうございます。私は本当に嬉しいよ。）

⑤　考察と課題

教師側の評価の視点となる伝え方のポイントとめあてを関連付け、より生徒の実態に迫って、項目を精選したことで、生徒はポイントを意識し続けることができた。また、他者へ伝えることを楽しみにしたり、上手に伝えたいという気持ちになったりした生徒もおり、単元を通じて、学習へのモチベーションを高く保つことができた。単元の振り返りにおいて、自分の学習の途中と学習後の様子を動画で比較することができたことで、生徒にとって、変化が目に見えて分かり、自分の成長に気付くことができた。動画視聴の仕方も、一人で自分の動画を集中して見ることができるようにしたことで、他者の目を気にせずに振り返りができた。また、途中で生徒が目標をたてて、単元の終わりに向けて学習を続けていったことで、「目標をもって学ぶ」ということ自体を授業の中で経験させることができ、授業後に達成感を感じたり、次に頑張りたいことを自分で考えたりすることができることにつながったのではないかと考える。

他者の意見を参考にしながら、振り返りをするという点については、他者の意見の中から、自分が言いたかったことを選んでいる様子もあり、表現の仕方を知る機会にもなった。また、自分で見るだけでは気付かない視点にも、他者の意見を参考に気付くことができ、自己を客観視する視点を補うための手立てとしても役に立たせることができた。

3　研究成果と今後の課題

（1）研究成果

①　授業づくりについて

振り返りを重視した授業づくりを行うようになって教師が感じたことについて、アンケートを実施し、自由記述で回答した（表Ⅲ-中 2)。その結果、振り返りの授業での生徒の様子や記述をイメージしながら、授業を作成していったことで、めあてを精選しシンプルに提示することができたり、必要な手立てが考えやすくなったりするなど、教師にとっては効果的であった。また、全ての教師が、研究前と比べて授業で振り返りを行う機会が増加した。池田ら（2022）は、「振り返りを意識して授業を行うようになったことで、教師は児童生徒の変容や成長に以前より注目した」と述べており、本研究でも、同じ傾向が見られた。特に、授業後に生徒が、できるようになったことや難しかったことをどのように考えているかを共有することができたことで、生徒の理解度が教師が求めていたところまで到達したかどうかを判断しやすくなり、目標を達成していなかった場合に学習を補完することがしやすくなった。

表Ⅲ-中 2　自由記述の結果

①授業で振り返りを行う機会が増加した理由を教えてください。	・その授業で生徒が何を知ったか、どう学んだかを把握する必要性を感じたため。そのことが評価や SSB につながるのであればより必要だと思った。 ・知的に重度の生徒がどのように学習できたか、自分でどのように評価するか知りたいと思った。 ・振り返りをすることで、次の授業への課題が見つかることを実感したから。 ・振り返りが子供の SSB につながると考えると、しっかり評価しないといけないと思ったから。 ・その授業での各生徒の理解度や関心、感じたことなど、入力させることで新たな発見があることが多いから。
②振り返りをすることで感じたメリットは何ですか。	・口頭だと忘れてしまう生徒が、写真等を見ることで思い出すことができる。 ・学期末の SSB で振り返ることができる。 ・振り返りシートの量で、「たくさん勉強したなぁ」と実感することができる。 ・できるようになったこと、難しかったことが明確になる。 ・生徒が単元について、何を思ったかを知るツールとして非常に良かった。 ・授業中には出てくることが少ない、子供の授業に対しての取組や理解度を知ることができる。 ・話すことや書字が難しい生徒でも、タブレット PC の入力ができれば、思っていることや分かったことについて知ることができた。
③振り返りをすることで感じたデメリットは何ですか。	・振り返りで、◎○△を使用すると、途端に自己評価の低い生徒がでる。授業で、「できてたよ」と具体的に伝えても、生徒にとっては「できなかった」となる。 ・集団が大きいと授業内ではフォローの時間が十分にとれない。 ・振り返りに時間がかかるため、単元全体の授業の時間配分の調整が必要。毎時間設定することが理想だが、現実的に難しい。教育課程の改善が必要。 ・振り返りをすることで、振り返りの時間が必要となる。 ・言語理解が十分でない生徒の振り返りが難しい。 ・生徒の感想をそのまま返す（ファイルに綴じる）だけになりがちである。

④振り返りに関連して、生徒の自己理解や表現力に変化があったと感じるエピソードがあれば、教えてください。	・振り返りの学習があったら「終わり」と認識しているようだ。 ・授業の感想が「がんばった」だけではなく、「～することをがんばった」と具体的に書くことが時々できるようになった。 ・単語を並べただけの記述であるが、感想を書くことが早くなった。 ・初めは、「楽しかった」などの感想を書くことにとどまっていたが、「○○が楽しかった」、「小学校のときにしたことを思い出した」など、具体的に書き表すことができるようになった。 ・授業で取り組んだことが、以前ならしばらく経つと忘れることがあったが、定着できるように（もしくは長い期間覚えていられる）なった。

② 振り返りシートについて

振り返りを促す手立てとして使った「振り返りシート」は、生徒にその使い方が浸透してきており、学習のプロセスを記入する「感想」の欄の記述が増えてきている。

書字が難しい生徒のためにタブレットPCを使用できるようにしたが、タブレットPCを使用することで、書字ができる生徒にとっても、簡単に訂正ができたり、絵文字を使って気持ちを表現したりするなど、良い効果があった。言語表出が乏しく、教師と一緒に振り返りシートを記入する生徒にとっては、これまでと変わらず教師が生徒の気持ちを推測しながら、振り返りを促すことが多かったが、タブレットPCを利用すれば、複数の写真の中から、印象に残った活動の写真を自分で選ぶことができ、本人の意思を反映する場面ができたことで、教師の推測も本人の意思に寄り添ってできるようになったのではないかと考える。

（2）今後の課題

① 国語科の学習について

今回の研究は、国語の授業実践を中心として取り組んだ。取り上げた単元では、生徒が他者へより伝わりやすい伝え方を考えたり、工夫したりする機会があったため、言葉によって自分の考えを形成するといった言葉がもつよさを感じさせるとともに、どのような言葉を選んで表現するのが適切であるかを考えさせることができた。しかし、話し方や書き方などの指導は、他教科や教育活動全体でも取り組んでおり、本授業実践を行ったことで生徒が変容したと成果を捉えることは難しかった。また、国語科の学びに向かう力・人間性等を意識して、言葉で理解したり表現したりする際の正誤・適否・美醜などの感覚を養うことについては、本研究では、取り組むことができなかったため、生徒の振り返りの記述には、タブレットPCの予測変換で出てきた漢字を、意味を考えずに入力したり、文字が抜けた形で入力して予測変換で出てきた正しい文字を選択したりするという事例があった。今後の教育課程の改善も含め、学びに向かう力・人間性等の取り扱い方を再検討し、生徒の学びの履歴や言語理解の実態に合わせた言語感覚を国語科として養っていく必要がある。

② 附属スタイルの活用に向けて

中学部では、今回、振り返りの充実に重点を置いて、附属スタイルを活用していったが、授業づくりの中で、附属スタイルの4つの視点は、どれも重要であり、互いに関連し合っているものであった。今後は、「学習の見通しをもたせる」、「学習に粘り強く取り組むための手立ての充実」、「協働的な学びの充実」についても、中学部の生徒の段階に合う手立てがどのようなものか検討していく必要がある。また、他教科でも、振り返りシートの活用を通して、振り返りの機会が増加したり、本校版のキャリアパスポートであるセルフサポートブックへの関連が見られたりしてきたため、この取組をさらに継続していき、生徒が自分自身の成長を感じながら学習する機会を確保していく必要がある。

【参考資料①】

えらぶ▾月えらぶ▾日　教科えらぶ▾

「単元名または題材名」

めあて「教師が提示しためあて」

学習の様子の写真等	学習の様子の写真等

① 学習自体の振り返り（知識・技能）

② 感想（かんそう）

【参考資料②】

単元計画

長崎大学教育学部附属特別支援学校

年度	6	学部	中	教科	国語Bグループ	単元名	調べて書こう

指導内容

中学部1段階～2段階
【知識・技能】情報の扱い方
イ 事柄の順序など、情報と情報の関係について理解すること。
イ 必要な語や語句の書き留め方や、比べ方などの情報の整理の仕方を理解し、使うこと。(中2段階)
【思考力・判断力・表現力等】
A読むこと・話すこと
ウ 見聞きしたことや経験したこと、自分の意見などについて、内容の大体が伝わるように伝える順序等を考えること。
ウ 見聞きしたことや経験したこと、自分の意見やその理由について、内容の大体が伝わるように伝える順序や伝え方を考えること。(中2段階)
C読むこと
エ 文章を読んで分かったことを伝えたり、感想をもったりすること。
オ 読んで感じたことや分かったことを伝え合い、一人一人感じ方などに違いがあることに気付くこと。(中2段階)

単元について

予定時数	5	時間	キャリア教育を支える3本柱との関連					
			役割仕事	◎	生活健康	―	楽しみ余暇	○

「目指す児童生徒像の具体的な姿」との関連	「キャリア発達に向けて各部で育てたい力」との関連
生き生き 物事に興味関心を抱き、意欲的に取り組む子	役仕【高】社会の一員として、必要な知識や技能を身に付ける
生きがい 生き生きと働いたり余暇を楽しんだりする子	生健【小中】規則的、衛生的かつ、マナーや時間を守ろうとする生活習慣を身に付ける
意決 自分の思いや考えを周りに伝えることができる子	楽余【小中】学習に興味・関心をもち、学んだことを自ら深めようとする

単元目標

【知識・技能】
・事柄の順序など、情報と情報の関係について理解することができる。
【思考・判断力・表現力】
・見聞きしたことや経験したこと、自分の意見などについて、内容の大体が伝わるように伝える順序等を考えることができる。
・見聞きしたことや経験したこと、自分の意見やその理由について、内容の大体が伝わるように伝える順序や伝え方を考えることができる。(中2段階)
・文章を読んで分かったことを伝えたり、感想をもったりすることができる。
・中心となる語句や文を明確にしながら読むことができる。(中2段階)
【学びに向かう力・人間性】
・インターネットや図鑑などに興味をもち、見出しや項目、目次などを活用して、いろいろなことを知ろうとすることができる。

深い学びのための方策（どんな見方・考え方で学習に取り組ませ深い学びに向かわせるか）

総合的な学習の時間と関連させ、校外学習に関連することや興味があるものを調べることで意欲を引き出す。また、パソコンなどによる情報収集の仕方を身に付け、調べたことを教師や友達、家族へ伝えようとする関心を高める。

主な学習活動	教材	手立て				評価の観点			予定時数
		見通	粘強	協働	振返	知技	思判表	学び	
○「調べる方法」について学習する。 ○学校のことを調べる。5項目は校内の先生方に尋ねる。 ○総合の校外学習の行先に合わせ、各見学先の施設（業務）内容、最寄りの駅やバス停、施設の創立年などを総合の資料を参考にしたり、インターネットで調べてたりしてワークシートに記入する。 ※参考：総合Aグループ（長崎の船）4名、総合Bグループ（長崎の電車）1名	スライド ワークシート0（学校） ワークシート1（総科大or電気軌道）	◎	◎	◎	―	◎	○	◎	1
○前時の続きがあれば、各項目について調べる。 ○前時に調べ、まとめたことを発表する。 ○ゲストの前で発表する。 ○「ふりかえりシート」に記入し、学習の振り返りをする。	ワークシート1(総科大or電気軌道) 振り返りシート1	○	◎	○	◎	○	◎	○	1
○自分の興味のある施設について、施設の目的、施設の設立年、学校からの交通手段などをインターネットで調べたり、わからなかった言葉の意味を辞書で調べたりし、ワークシートに記入する。 ※生徒ごとに自由に選択する。	スライド ワークシート2	◎	◎	―	―	◎	○	◎	2
○前時に調べ、まとめたことを発表する。(練習) ○ゲストの前で発表する。(本番) ○「ふりかえりシート」に記入し、学習の振り返りをする。	ワークシート2 振り返りシート2	○	◎	―	◎	○	◎	○	1

国語科学習指導案

令和６年７月 17 日　２校時
（10：05～10：50）
中学部　国語Ｂグループ　５名
場　所　中学部３年生教室
授業者　國知出　幸美

１　題材名「調べて書こう」

２　本時（5／5）

（1）目標

○【思考力・判断力・表現力】

・選んだ施設の目的や交通手段などまとめた資料について発表する際に、内容の大体が伝わるように伝える順序や伝え方を考えることができる。

【学びに向かう力、人間性等】

・様々な方法で調べることに興味をもち、分かったことを他者に分かりやすく伝えようとする態度を養う。

（2）展開

学習活動	指導上の意図・留意点	準備物
１　本時の学習を知る ○前時の振り返りをする ○教師の話を聞く	○前時でまとめた各ワークシートを読み、学習したことを思い出すことができるようにする。 ○ゲストの前で発表し、本時がこれまでの単元の集大成であることを伝えることで、学習への意欲を高めることができるようにする。	・テレビ ・パソコン
２　発表の仕方を考える ○めあてを確認する ○教師の発問に答える	めあて：相手に伝わりやすい発表をしよう。 発問:どのように発表したら、わかりやすく伝わるだろう？	
３　発表について振り返る ○発表の練習動画を見る	○発表する際には、①順番どおりに発表する、②姿勢を正しくする、③ゆっくり読む、④はっきり読む、⑤大きな声で読むことに気を付けることを促す発問と資料の提示をする。	
○発表の練習をする	○友達の発表動画を見るときは、「自分が何に一番気を付け	・iPad

	て発表しているか」、「もう少しがんばるところころはどこか」に着目しながら見ることを伝える。	
4 ゲストの前で発表する（本番） 〇発表の手順やめあてを再確認する 〇発表をする 〇ゲストの感想を聞く	〇動画で気付いた「もう少しがんばるところ」に気を付けながら発表の練習を促す。 〇生徒によっては、「相手の顔を見ながら発表する」ことなども付け加えて発表するように促す。 〇発表に向けての緊張をほぐすために、ゲストに見回ってもらう。	・タブレット PC（発表原稿）
5　まとめをする 〇ふりかえりシートに記入する 〇教師の話を聞く	〇発表の手順や時間を伝え、もう一度本時のめあてについて確認し、練習を生かしながらゲストの前で発表することを伝える。 〇前の机に座り、ゲストを前に発表をする場面設定を行う。 〇ゲストに、各生徒の発表について感想を述べてもらう。 〇Chromebook でふりかえりシートに記入する。 〇短い単語のみ書いている生徒には、「どのようなところが？」など言葉掛けを行い、振り返りを深めさせる。 〇各生徒のこれまでの学習の成果を振り返り、次時や他の教科等での発表する学習への意欲を高める。	・タブレット PC（ふりかえりシート）

（3）評価

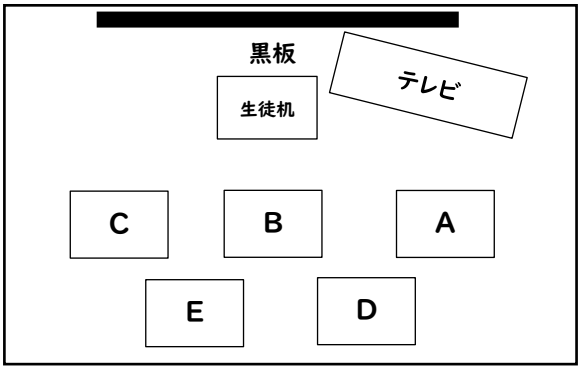
以下の項目について、観察法やワークシートへの記入により評価する。

〇自分の発表についての課題見つけ、伝える順序や姿勢、声の大きさ、読むスピードなどに気を付けて発表することができたか。（思考力・判断力・表現力等）

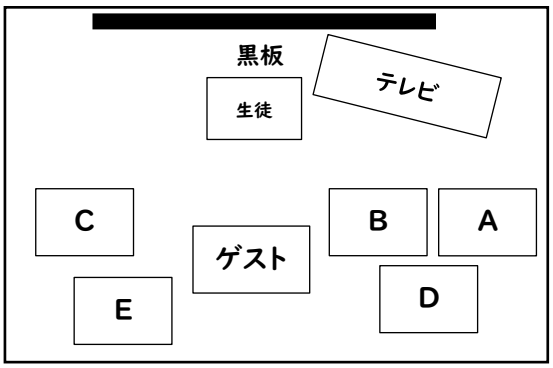
〇様々な方法で調べることに興味をもち、分かったことを他者に分かりやすく伝えようしたか。（主体的に学習に取り組む態度）

（4）備考

〇場の設定



（本番発表時）



○生徒の実態

生徒名	生徒の実態
A	○小学校低学年で習う漢字が入った文章をほぼ正確に読んだり、書いたりすることができる。 ○短い文章であれば、キーボードでひらがな入力ができる。 ○簡単なきまりや手順の提示があれば、それに沿って発表しようとすることができる。 ○動画を見て教師の言葉掛けがあれば、自分の発表で工夫したところや気を付けたことに気付き、振り返ることができる。
B	○小学校で習う漢字が入った文章をほぼ正確に読むことができるが、書くときは、ほぼ平仮名で書く。 ○感想や自分の考えを書くことが苦手であるが、書くときは短い文章で表す。キーボードでひらがな入力ができる。 ○意欲があるときは、きまりや手順の提示に沿ったり、教師の言葉掛けに応じたりして発表することができる。 ○動画を見て教師の言葉掛け等の促しがあれば、自分の発表で気を付けたことに気付き、振り返ることができる。
C	○小学校低学年で習う漢字が入った文章を読むことができるが、正確に漢字で書くことが難しい。 ○自分なりに感想をもち、キーボードでひらがな入力することができる。 ○簡単なきまりや手順の提示があれば、それに沿って発表しようとすることができる。 ○動画を見て自分の発表で工夫したところや、改善点に気付き、振り返ることができる。
D	○小学校で習う漢字が入った文章をほぼ正確に読んだり、書いたりすることができる。 ○感想や自分の考えを、キーボードでローマ字入力ができる。 ○発表のきまりや手順は理解しているが、発表について苦手意識があり、声が小さくなることがある。 ○動画を見て自分の発表で工夫したところや、改善点に気付き、振り返ることができる。
E	○小学校低学年で習う漢字が入った文章を読むことができるが、漢字で書くことが難しく、平仮名で書く。 ○感想や自分の考えを短い文で表す。キーボードでひらがな入力ができる。 ○簡単なきまりや手順についての教師の言葉掛けに応じて、発表しようとすることができる。 ○動画を見て、自分の発表で工夫したところや改善点に気付き、教師の言葉掛けで振り返ることができる。

【参考資料③】

単元計画

長崎大学教育学部附属特別支援学校

年度	6	学部	中	教科	国語Cグループ	単元名	調べて書こう

指導内容

小学部3段階
【知識・技能】
ア(ウ) 日常生活でよく使う促音、長音、などが含まれた語句、平仮名、片仮名、漢字の正しい読み方を知ること
イ(イ) 図書を用いた調べ方を理解し使うこと
ウ(エ) 読み聞かせになどに親しみ、いろいろな絵本や図鑑があることを知ること
【思考力・判断力・表現力等】
Bウ見聞きしたり、経験したりしたことについて、簡単な語句や短い文を書くこと。
Bエ書いた語句や文を読み、間違いを正すこと。
Cイ 絵本や易しい読み物などを読み、時間的な順序などの内容の大体を捉えること

単元について

予定時数	8	時間	キャリア教育を支える３本柱との関連					
			役割仕事	◎	生活健康	ー	楽しみ余暇	◎

「目指す児童生徒像の具体的な姿」との関連	「キャリア発達に向けて各部で育てたい力」との関連
生き生き 物事に興味関心を抱き、意欲的に取り組む子	役仕【中高】任された役割に責任をもち、やり遂げようとする
生きがい 生き生きと働いたり余暇を楽しんだりする子	楽余【小中】自ら楽しんで取り組むことができる活動を増やす
思決 自分の思いや考えを周りに伝えることができる子	楽余【小中】学習に興味・関心をもち、学んだことを自ら深めようとする

単元目標

【知識・技能】
・日常生活で使う言葉を正しく聞き取ることができる。
【思考・判断力・表現力】
・話を聞き取り、平仮名や片仮名で書き表すことができる。
【学びに向かう力・人間性等】
・調べたことについて発表することで、相手に伝わることの楽しさを感じることができる。

深い学びのための方策（どんな見方・考え方で学習に取り組ませ深い学びに向かわせるか）

身近な先生のことについて調べることで意欲を引き出す。また、ニュースキャスターを参考にして正しく伝えようという意欲を高め、伝わった時の嬉しさなどを味わえるようにする。

主な学習活動	教材	手立て				評価の観点			予定時数
		見通	粘強	協働	振返	知技	思判表	学び	
◎ニュースキャスターになろう ○ニュース番組をみて、キャスターのいいところを見つけよう（発表の手本） ○先生方に取材を行う ・インタビュー内容を考える ・インタビュー練習を3回行う ・実際にインタビューを行う ・書いた内容の確認をする ○「先生たちの好きなこと」について発表する。 ・キャスターになりきり原稿を読み上げる ・動画撮影を行い、保護者、教師から評価してもらう	・ニュースキャスターが話している動画 ・発表用マイク、スピーカー ・質問アンケート用紙 ・発表原稿用紙 ・ビデオカメラ ・大型テレビ	◎	○	◎	○	◎	◎	○	3
◎1回目の反省会をおこなう ・前回撮影した動画を見て、「はっきり話す」「姿勢」の2つの視点で自己評価をする ・保護者、教師からのアンケート結果を見て、自身の評価と比べる ・保護者や教師のアドバイスを参考に、改善点したい点を挙げる。	・アンケートをまとめたスライドと配布用プリント ・大型テレビ ・タブレットPC	◎	○	○	◎	○	◎	◎	1
◎真のニュースキャスターになろう ○改善点したい点について作戦を考える ・自身が考えた改善点やそれについての作戦を、発表する ・作戦実行に必要なことを教師と考える ・作戦を元に、練習を行い、撮影した動画を見てセルフチェックすることを繰り返す ○ニュースキャスター風の衣装を身に着け、本番の撮影をする	・タブレットPC ・大型テレビ ・ニュース風背景 ・シャツやネクタイ ・マイク、スピーカー	○	◎	○	○	○	◎	◎	3
◎2回目の反省会をおこなう ・前回撮影した動画を見て、「はっきり話す」「姿勢」の2つの視点で自己評価をする ・保護者、教師からのアンケート結果を見て、自身の評価と比べる ・保護者や教師のアドバイスを参考に、改善点したい点を挙げ、それについての作戦を考える ・1回目、2回目の動画と見比べ、自身の変化について感じる	・アンケートをまとめたスライドと配布用プリント ・大型テレビ ・タブレットPC	◎	◎	○	◎	○	◎	◎	1

国語科学習指導案

令和６年９月 26 日　３校時
（11：00～11：45）
中学部　国語Ｃグループ　４名
場　所　中学部２年生教室
授業者　納所　健一

１　題材名「調べて書こう」

２　本時（4／8）
（1）目標
○【思考力・判断力・表現力】
・自身の発表動画を見たり、他者からのアドバイスを受けたりすることで、相手によりよく伝わる方法を考えることができる。
【学びに向かう力、人間性等】
・相手にわかりやすく伝わるように、話し方や話す時の姿勢などを工夫し、実践しようとする態度を養う。

（2）展開

学習活動	指導上の意図・留意点	準備物
１　本時の学習を知る ○本日のめあてを確認する ２　１回目のについて振り返る	○前時の学習内容に触れ、本時の学習内容を確認する。 めあて：２回目のニュースを成功させよう！ →わたしは○○をもっとよくする！	・テレビ ・パソコン
○前回の動画を視聴する。 ○自身の発表について自己評価を行う。 ○保護者、先生からのアンケート結果を聞く。 ○次回頑張ることや、それについての作戦を考える。	○はっきり（声の大きさ、明瞭さ）、姿勢の２つを評価の基準とし、イラストで示す。 ○各個人の Ipad で動画を視聴させる。自身の「はっきり」「姿勢」について、３段階評価で「いいね」をつけさせる。またその理由を記入させる。 ○アンケート結果については、項目が多いことから、教師が１人２分程度で発表する。「いいね」が多い、少ないについても触れながら説明し、改善点について考えやすくなるようにする。 ○「わたしは○○をがんばる」について、考えさせ、記入させる。また、頑張ることについての作戦を考えさせ、記入させる。難しい生徒については、教師がアンケートを参考に、選択肢を与えながら決めさせる。	・Ipad×４ ・クロームブック ・教師用 PC ・クロームブック

3　次回に向けてシミュレーションをする。 〇みんなの前で、ニュース風に発表する。	〇がんばること、作戦について、決まった生徒から原稿を読んだり、姿勢を正したりシミュレーションをさせる。一人では難しい生徒については、教師と対話をしながら進めさせる。 〇発表する内容をテレビに表示し、顔を上げて発表できるようにする。次回頑張ることについての作戦を意識して発表できていたか、他生徒に意見を求めたり、教師がアドバイスをしたりする。	・Ipad（原稿） ・教師用PC ・テレビ ・マイク、スタンド
4　本時のまとめ 〇本時の授業への取り組み方を振り返る。 〇次時について知る。	〇本時の授業への取り組みについて、意欲的だったところや、よく思考していた点など頑張っていた点について称賛する。 〇次の時間についての内容を伝え、意欲や期待感をもたせる。	

（3）評価

以下の項目について、観察法やクロームブックへの記入により評価する。

〇次回の発表に向けて、頑張ることや具体的な作戦を考えることができたか。

（思考力・判断力・表現力等）

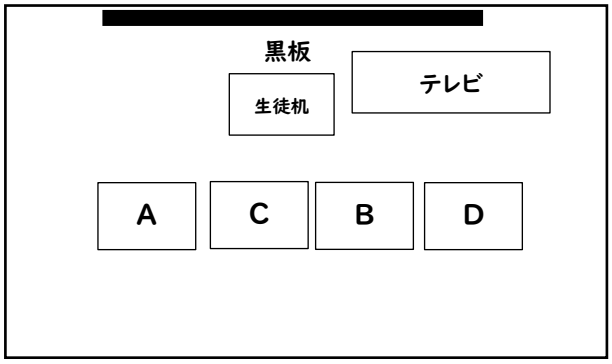
〇考えた作戦を意識しながら、みんなの前で発表しようという姿勢がみられたか。

（主体的に学習に取り組む態度）

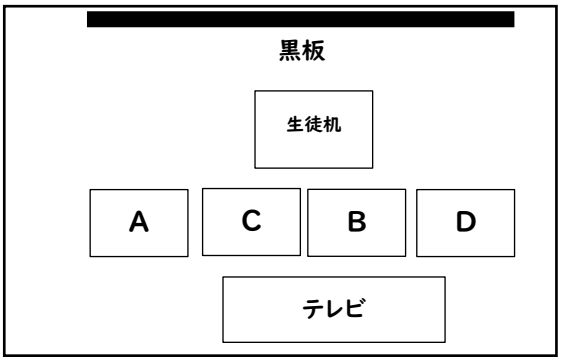
（4）備考

〇場の設定

1、2、4 場面



3 場面（発表時）



○生徒の実態

生徒名	生徒の実態
A	○小学校低学年程度の漢字は書けるものもあるが正確ではない。キーボードのかな入力はまだ慣れておらず、時間がかかる。 ○発表の場面では、言葉が不明瞭ではあるが、はっきりと声を出すことができる。 ○動画を見て、自身の改善点に気づくことは難しいが、アドバイスを聞いたりすると気付くことができる。
B	○小学校低学年程度の漢字の読み書きができる。キーボードのかな入力ができる。 ○発表するときは、最初の言葉が出にくかったり、一文字ずつの読み方になったりすることがあるが、慣れるとすらすらと読むことができる。 ○動画を見て、自身の行動などについて着目する場面を限定することで客観的に評価することができる。
C	○小学校低学年程度の漢字を書くことができる。キーボードのかな入力ができる。 ○発表の場面では、大きい文字で書いた原稿やマイクなど本人のやる気がでる小道具を使うことはっきりとした声で発表できる。 ○動画を見て、自身の行動の良し悪しについて気づくことが難しいため、場面を限定したり、教師からアドバイスを受けたりすることで改善点に気づくことができる。
D	○小学校低学年程度の漢字は書けるものもあるが正確ではない。キーボードのかな入力ができる。 ○通常の会話はスムーズであるが、発表場面などでは最初の言葉が出にくいことがある。 ○動画を見て、自身の行動などについて着目する場面を限定することで客観的に評価することができる。

【附属スタイル】

目標段階別の「引き出したい子どもの姿」と「授業の工夫（サンプル）」

		引き出したい子供の姿	子供の姿を引き出すための授業の工夫（サンプル）
Ⅰ段階	学習の見通しをもたせる	・単元の流れを知る。 ・学習の目標を意識する。 ・評価の視点を知る。	・必要に応じてイラストを用いながら、わかりやすい言葉で端的に今日の学習について伝える。 ・生徒が自分のものとして目標を自覚できるように、授業者と生徒で目標の共有をする。 ・ポイントとなる事項を簡潔に提示し、授業中に毎回掲示する。
	粘り強く学習に取り組むための手立ての充実	・自分で考える。 ・学習の習得状況を確認する。	・興味があるテーマを自分で決めさせる。 ・発表の形式を参考にしながら、発表の仕方を考えさせる。 ・単元の途中で自己評価をさせたり、教師にも発表についての声の大きさや姿勢についてのアンケートを見せたりして、改善の参考にさせる。 ・自分の発表している姿を、動画で見ることで客観的に自己評価を行えるようにした。また、動画を見るときは１人１台のタブレット端末を使用させる。
	協働的な学びの充実	・他者を意識する。 ・他者と対話する。（他者の意見を聞く）	・友達の発表の映像を見て、お互いにアドバイスをしあう場面を設ける。 ・身近な教員や保護者にアンケートをとり、アドバイスを伝える。
	振り返りの充実	・自分自身のことを考える。 ・他者の評価を聞く。 ・次の学習の目標をたてる。	・授業の１時間を使って、単元のテストと振り返りシートの記入、発表に取り組ませる。 ・学習前と学習後の様子を動画や写真で比較させる。 ・発表を聞くことで、他者の自己評価についても知る。 ・単元の途中と最後に振り返りを行い、学習の成果を実感させる。

【附属スタイル】
目標段階別の「引き出したい子どもの姿」と「授業の工夫（サンプル）」

		引き出したい子供の姿	子供の姿を引き出すための授業の工夫（サンプル）
2段階	学習の見通しをもたせる	・単元の流れを知る。 ・学習の目標を意識する。 ・評価の視点を知る。	・毎時間、前時の授業の振り返りや、本時の学習を具体的に伝えることで、学習の流れを意識させる。 ・生徒が自分のものとして目標を自覚できるように、授業者と生徒で目標の共有をする。 ・ポイントとなる事項を簡潔に提示し、授業中に毎回掲示する。
	粘り強く学習に取り組むための手立ての充実	・自分で考える。 ・学習の習得状況を確認する。	・興味があるテーマを自分で決めさせ、選んだ理由を説明させる。 ・他者に伝えるために必要な情報を選ばせながら、まとめさせる。 ・まとめた資料を書き進める中で、言葉の使い方の間違いや、誤字などを教師と一緒に訂正する時間を設定する。
	協働的な学びの充実	・他者を意識する。 ・他者と対話する。（他者の意見を聞く） ・ICT 機器を活用する。	・まとめた資料を友達と見合う時間を設定する。 ・自分がまとめた資料を、友達や学校外の人の前で発表する場面を設定する。 ・友達の発表でよかったところについて伝える場面を設定する。 ・外部の人からほめてもらったり、改善点を伝えてもらったりする時間を設定する。 ・インターネットで検索して、パソコンで資料をまとめさせる。
	振り返りの充実	・自分自身のことを考える。 ・他者の評価を聞く。 ・次の学習の目標をたてる。	・授業の１時間を使って、単元のテストと振り返りシートの記入、発表に取り組ませる。 ・友達の発表を聞くことで、他者の自己評価について知る。 ・生徒同士で気付いたことを共有する。 ・単元の途中と最後に振り返りを行い、学習の成果を実感させる。

Ⅱ－３　高等部の研究

主体的な子供の育成を目指した、粘り強く学習に取り組む手立ての充実、協働的な学び充実に着目した授業づくり

～生涯にわたって継続して運動に親しむ生徒を育むための保健体育科の授業を通して～

Ⅱ-3　高等部の研究

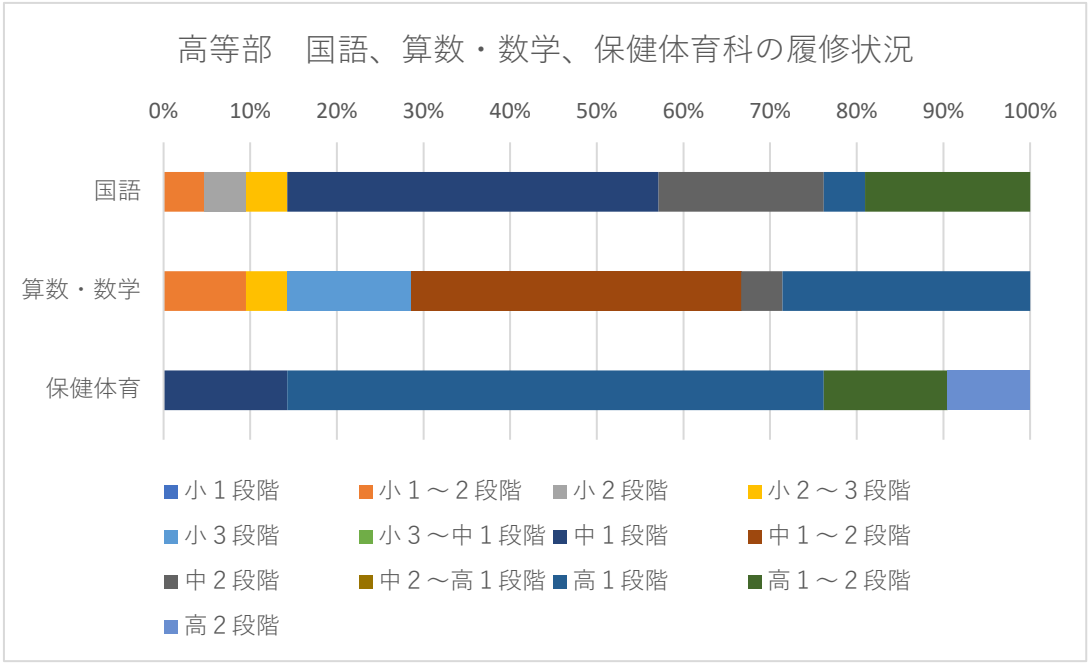
1　生徒の実態と研究テーマについて

（1）高等部の概要

現在、高等部には 21 名の生徒が在籍している（1 年生 8 名、2 年生 5 名、3 年生 8 名）。中学部から連絡入学した生徒は 15 名、近隣の中学校から入学した生徒が 6 名である。障害種別は、主障害の知的障害の他に発達障害、その他の障害などの生徒が在籍している。田中ビネー知能検査では IQ10 台から 70 台程度と幅広く、知的能力に差がある集団である。

高等部では、幅広い実態に合わせて、知的障害特別支援学校学習指導要領の小学部 3 段階～高等部 1 段階及び 2 段階の内容の習得を目標としている。年度によって違いはあるが、生徒の実態や学習グループの編成によっては小学部 1 から 2 段階の内容も取り扱う場合がある（図Ⅲ-高 1）。

身辺処理においては、言葉掛けや支援を必要とする生徒もいるが、ほとんどの生徒が自立した生活を送ることができている。高等部の学習では学校での集団生活や校外学習、現場実習などの経験を通して、多様な人と協働するための表現力を身に付けることや、自分も他の人々も大切にしながら生きるために主体的な判断力と行動力を身に付けることを目標としている。そして、高等部卒業後には、生徒それぞれに合った自立的な生活を送れるようにすることや、積極的に社会生活に参加できるようなに力を身に付けていくことを目指している。



図Ⅲ-高１　高等部　国語、算数・数学、保健体育科の履修状況（令和 6 年）

（２）研究テーマについて

①　テーマ設定の理由

第 24 次研では、国語、数学の時間において「比較」を取り入れた学習指導と学びをつなげる工夫を行うことで、学校教育目標を達成するために必要な資質能力を育成することを目指した研究を行った。その中で、本研究で提案している附属スタイルの視点、「学習の見通しをもたせる」「振り返りの充実」と関連する取組を行った。

本研究では、4 つの附属スタイルの視点から前研究で取り上げられていなかった「粘り強く学習に取り組む手立ての充実」と「協働的な学びの充実」に着目し、研究を進めた。この 2 つの視点は、主に授業の展開で意識するものである。高等部の授業において、生徒自ら目標に向かって繰り返し取り組む姿や生徒同士の話合いなど様々な学習活動が想定できる。ただし、この 2 つの視点は目新しいものではなく、これまで教師一人一人が、担当する授業の中で意識して取り組んできたものである。敢えて 2 つの視点を研究で取り上げることで、教師一人一人の大切にしたいことや授業でのノウハウ等を学び合い、教師間の意図をすり合わせ、チームでの授業づくりに生かすことができると考えた。そして、このように教師間で精選した附属スタイルの 2 つの視点に立って授業づくりを行うことによって、生徒たちが各教科の目標に向かって主体的に学ぶことができるのではないかと考えた。

また、授業づくりで有効だった手立てや働き掛けを一覧表にまとめることで、教師間の意識を統一し、授業研究会、授業反省会を進めることができるのではないかと考えた。

テーマに沿った授業研究を行う上で保健体育科の授業を選定した理由としては、高等部生徒全員が一つの集団で学ぶため、幅広い生徒の実態に応じた手立てや働き掛けを実践できることが期待されるからである。また、授業に関わる職員も多いため、授業づくりの過程で多様な手立てや働き掛けを提案し合い、より生徒の実態に合った、分かりやすい授業づくりを目指すこともできる。更に、「体育の見方・考え方」を意識した授業づくりは、学習指導要領（2019）によると「生徒一人一人の運動やスポーツとの関わり方の可能性を広げ、更には将来の余暇活動の充実を図ることにつながる」ため、本校の研究テーマである「生涯学び続ける子供の育成」と関連すると考えた。

②　研究仮説

附属スタイルの 2 つの視点「粘り強く学習に取り組む手立ての充実」「協働的な学びの充実」について、高等部の教師間で共通理解した生徒の姿を引き出すために具体的に考えられた手立てや働き掛けを授業に取り入れることによって、主体的に学ぼうとする生徒の姿を引き出すことができるのではないか。また、有効だった手立てや働き掛けを一覧表にまとめ、活用できるようにすることで、附属スタイルの 2 つの視点を職員間で共通理解した授業づくりができるのではないかと考えた。

③　内容及び方法

＜研究内容＞

ア）「粘り強く学習に取り組む手立ての充実」「協働的な学びの充実」について生徒の姿とそれを引き出すための手立てや働き掛けの一覧表作成

イ）作成した手立てや働き掛けの一覧表等を生かした保健体育科の授業づくり

＜研究方法＞

ア）について

ａ）生徒が「粘り強く取り組む態度」「協働的に学ぶ様子」とは何か、各職員が思い浮かべる生徒の言動を付箋に書き出し、ＫＪ法を使ってグループ作りとタイトル付けを行う（タイトルを授業で引き出したい生徒の姿とする）。

ｂ）授業中、生徒の言動を引き出すための手立てや働き掛けを検討し、一覧表の試案を作成する。

ｃ）一覧表の試案を基に授業研究会、授業実践、授業反省会を行い、ｂ）で挙げた一覧表の手立てや働き掛けが有効であったかどうかを検討し、一覧表を修正する。

イ）について

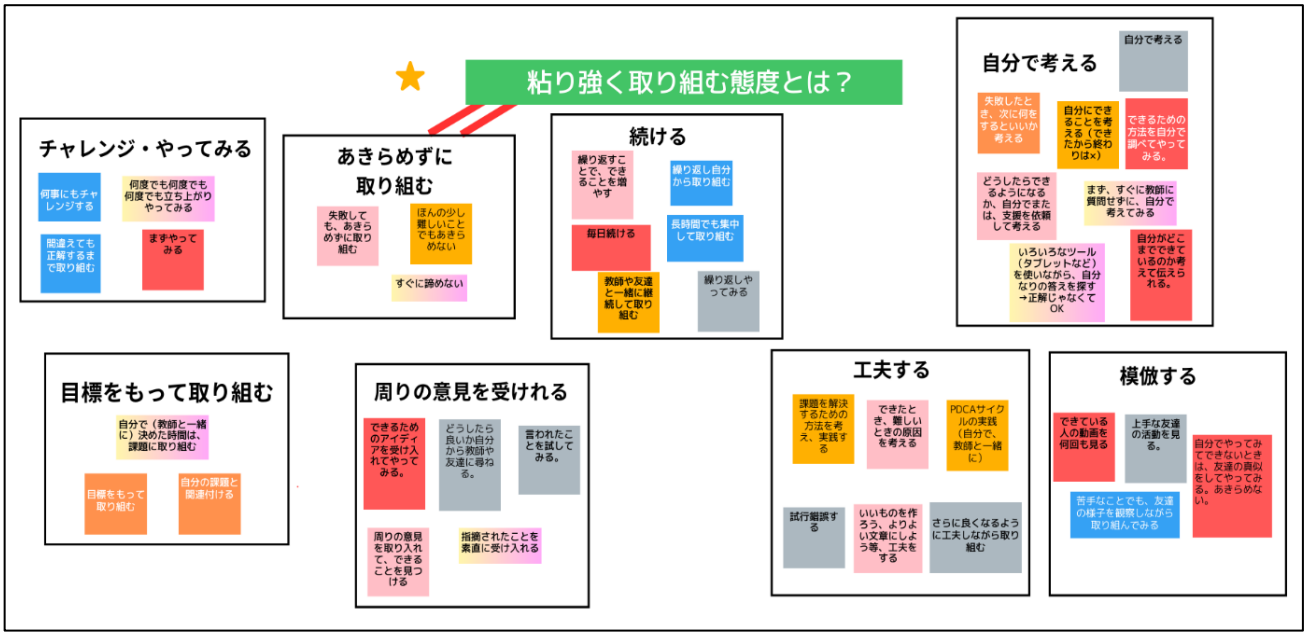
ａ）ア）で作成した一覧表の手立てや働き掛けを取り入れた単元計画の作成と授業づくりを行う。

ｂ）授業研究会では、生徒の言動から、手立てや働き掛けが有効であったかを検証する。

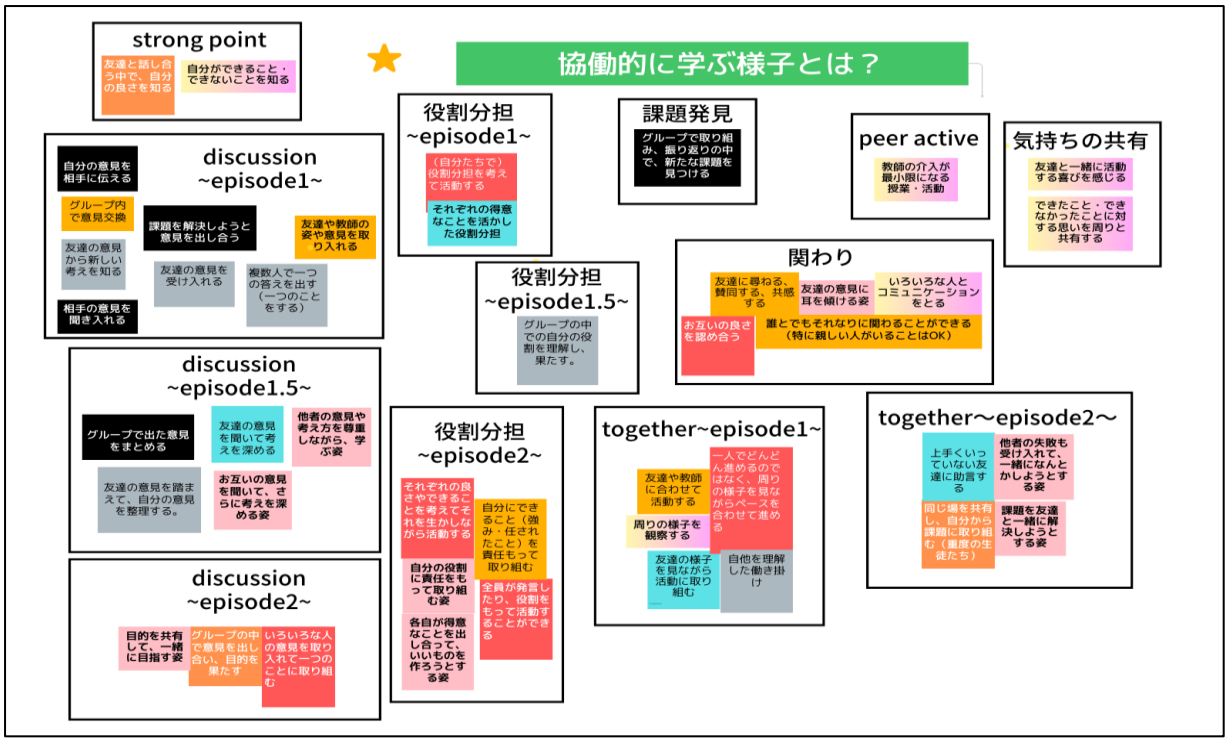
２　研究実践

（１）第１期「粘り強く取り組む態度」「協働的に学ぶ様子」について職員間のイメージの共有化

２つの附属スタイルを授業に取り入れるために、まず、「粘り強く取り組む態度」「協働的に学ぶ様子」について、KJ 法で整理し、教師一人ひとりが連想するイメージを共有した（図Ⅲ-高 2、図Ⅲ-高 3）。



図Ⅲ-高２　「粘り強く取り組む態度」について



図Ⅲ-高 3　「協働的に学ぶ様子」について

今回の研究においては、KJ 法で挙げた言葉（チャレンジする・役割分担するなど）を授業で引き出したい「生徒の姿」とした。そして、それぞれの姿を引き出すための手立て・働き掛けが附属スタイルの視点に立った授業づくりに生かされると考え、一覧表（試案 1）にまとめた（図Ⅲ-高 4）。

粘り強く学習に取り組む手立ての充実（試案 1）

生徒の姿	手立てや働き掛け	備考
チャレンジ	・励ます言葉 ・失敗してもよい雰囲気作り ・スモールステップ ・もう少しでできそうな課題の設定 ・称賛（少しの成長、具体的に）	
目標をもって取り組む	・本時の目標の提示 ・自分で目標を決める（選ぶ） ・振り返りを次に生かす	
続ける	・見通しを持たせる ・記録をつける（視覚的に） ・サポーター、仲間 ・フィードバック（視覚的に） ・活動時間を短時間で区切る	
自分で考える	・考えるポイントを提示する ・実態に応じた提示の仕方 （記述、選択肢、イラスト など） ・自分で考える時間を設定する ・実態に応じたツール （タブレット、絵カード など） ・比較させる	
周りの意見を受け入れる	・意見を視覚化する（書く、ICT の活用など） ・話型を活用する ・ポイントを明確に示す ・生徒の意見をわかりやすく教師が伝える （教師の共感、フォロー、言い換え など）	
工夫する	・わかりやすい例を提示する ・客観的な視点を入れる 美術：少し離れて、角度を変えて見る 体育：動画で自分を見る ・環境の工夫 （自分に合った道具、場所の設定、姿勢など）	
模倣する （真似してやってみる）	・上手な友達の活動を見る ・動画を見る（タブレット）	

協働的な学びの充実（試案 1）

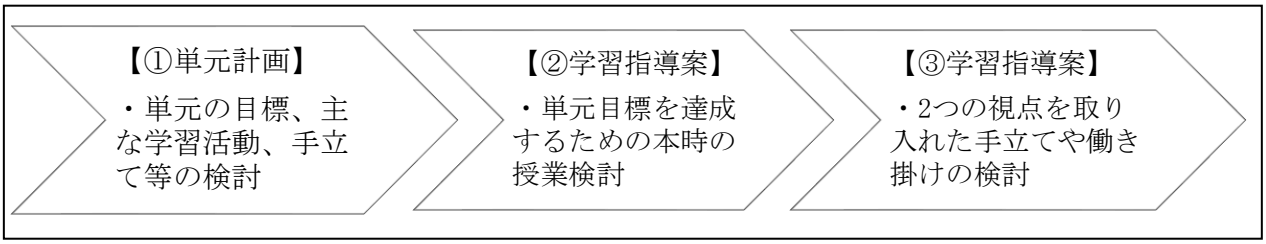
生徒の姿	手立てや働き掛け	備考
Strong point	・SSB	
役割分担	・自他の強みの共有 ・役割の理解 ・Do（最低限の声掛け）	
Discussion	・マッピング ・ICT の活用（ホワイトボード） ・ルール作り	
together	・声掛け（意識を向けさせる） ・Do（最低限の声掛け）	
関わり	・声掛け（意識を向けさせる） ・Do（最低限の声掛け）	
気持ちの共有	・Do して共有 ・振り返り	
課題発見		
Peer active		

図Ⅲ-高 4　一覧表（試案 1）

（2）第 2 期　研究授業の実施（器械運動）における成果、課題と対応策

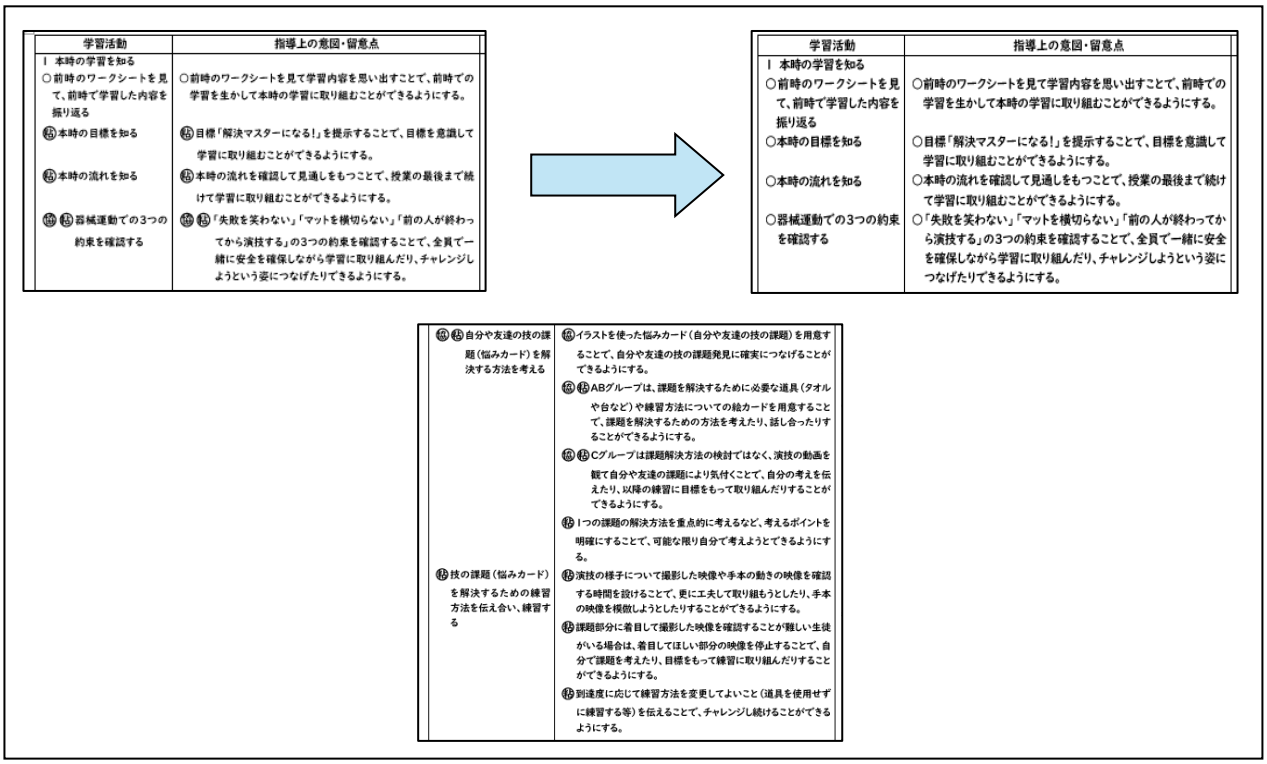
①　単元計画（参考資料 1)、学習指導案（参考資料 2）の作成

単元計画を基に、保健体育科の見方・考え方を大切にしながら、附属スタイルの 2 つの視点「粘り強く学習に取り組む手立ての充実」と「協働的な学びの充実」を取り入れた単元計画、授業内容を検討し、学習指導案の作成を行った（図Ⅲ-高 5)。



図Ⅲ-高 5　授業検討（作成）の流れ

図Ⅲ-高 5【③学習指導案】では、「粘り強く学習に取り組む手立ての充実」と「協働的な学びの充実」の視点を入れた本時の指導場面を明確にするために、一覧表（試案 1）（図Ⅲ-高 4）を手掛かりに学習指導案の「学習活動」と「指導上の意図・留意点」に㊍㊐の印を付けた。一覧表（試案 1）における生徒の姿を想像しながら指導場面を検討することで、導入、展開、まとめの全ての場面で「粘り強く学習に取り組む手立ての充実」と「協働的な学びの充実」の視点と関連が深いと考え、全ての学習活動と指導方法に㊍㊐の印を付けた。その後、授業研究会で検討する中で、導入やまとめの部分は附属スタイルの「学習の見通しをもたせる」と「振り返りの充実」に関連が深いこと、全てに㊍㊐の印が付いていることで、特に「粘り強く取り組む手立ての充実」と「協働的な学びの充実」と関連が深い部分が分かりづらいという課題が出たため、導入とまとめの㊍㊐の印を削除し、展開の㊍㊐の印を残すようにした（図Ⅲ-高 6)。



学習活動	指導上の意図・留意点
Ⅰ 本時の学習を知る ○前時のワークシートを見て、前時で学習した内容を振り返る	○前時のワークシートを見て学習内容を思い出すことで、前時での学習を生かして本時の学習に取り組むことができるようにする。
㊍本時の目標を知る	㊍目標「解決マスターになる!」を提示することで、目標を意識して学習に取り組むことができるようにする。
㊍本時の流れを知る	㊍本時の流れを確認して見通しをもつことで、授業の最後まで続けて学習に取り組むことができるようにする。
㊍㊐器械運動での3つの約束を確認する	㊍㊐「失敗を笑わない」「マットを横切らない」「前の人が終わってから演技する」の3つの約束を確認することで、全員で一緒に安全を確保しながら学習に取り組んだり、チャレンジしようという姿につなげたりできるようにする。

学習活動	指導上の意図・留意点
Ⅰ 本時の学習を知る ○前時のワークシートを見て、前時で学習した内容を振り返る	○前時のワークシートを見て学習内容を思い出すことで、前時での学習を生かして本時の学習に取り組むことができるようにする。
○本時の目標を知る	○目標「解決マスターになる!」を提示することで、目標を意識して学習に取り組むことができるようにする。
○本時の流れを知る	○本時の流れを確認して見通しをもつことで、授業の最後まで続けて学習に取り組むことができるようにする。
○器械運動での3つの約束を確認する	○「失敗を笑わない」「マットを横切らない」「前の人が終わってから演技する」の3つの約束を確認することで、全員で一緒に安全を確保しながら学習に取り組んだり、チャレンジしようという姿につなげたりできるようにする。

㊍㊐自分や友達の技の課題（悩みカード）を解決する方法を考える	㊍イラストを使った悩みカード（自分や友達の技の課題）を用意することで、自分や友達の技の課題発見に確実につなげることができるようにする。 ㊍㊐ABグループは、課題を解決するために必要な道具（タオルや台など）や練習方法についての絵カードを用意することで、課題を解決するための方法を考えたり、話し合ったりすることができるようにする。 ㊍㊐Cグループは課題解決方法の検討ではなく、演技の動画を観て自分や友達の課題により気付くことで、自分の考えを伝えたり、以降の練習に目標をもって取り組んだりすることができるようにする。 ㊐1つの課題の解決方法を重点的に考えるなど、考えるポイントを明確にすることで、可能な限り自分で考えようとできるようにする。
㊐技の課題（悩みカード）を解決するための練習方法を伝え合い、練習する	㊐演技の様子について撮影した映像や手本の動きの映像を確認する時間を設けることで、更に工夫して取り組もうとしたり、手本の映像を模倣しようとしたりすることができるようにする。 ㊐課題部分に着目して撮影した映像を確認することが難しい生徒がいる場合は、着目してほしい部分の映像を停止することで、自分で課題を考えたり、目標をもって練習に取り組んだりすることができるようにする。 ㊐到達度に応じて練習方法を変更してよいこと（道具を使用せずに練習する等）を伝えることで、チャレンジし続けることができるようにする。

図Ⅲ-高 6　学習指導案～㊍㊐の表記～

② 研究授業の実施

附属スタイルの視点に立った授業づくりを行い、実施することで、本時における教材教具や指導内容について複数の成果と課題が見えてきた（表Ⅲ-高 1)。また、それぞれの視点をねらって学習活動を設定したが、授業を実施すると、取り上げていなかった視点の成果が見えることもあったため、成果として取り上げ、その後の授業に手立てや働き掛けとして意識して取り入れた。

表Ⅲ-高 1　附属スタイルの視点に立った授業の成果と課題

学習活動	☆成果と★課題
・㊍㊐自分や友達の技の課題を解決する方法を考える。	☆㊍「解決マスターになる」と目標を掲げる。「悩みカード」を用意し、生徒同士で解決するなど、自分で考える支援ツールにした。
・㊍技の課題を解決するための練習方法を伝え合い、練習する。	☆㊐自分や友達の課題を解決するための練習場面を設けることで、友達同士や教師と一緒に関わり合って学ぶ様子が見られた。 ★㊍自分たちで伝え合ったり、練習したりする場面を重視し過ぎたことから、練習量が少なくなり、解決に向けて繰り返し挑戦し続ける機会が少なくなった。

③ 研究授業の実施から見えた課題と対応策

附属スタイルに焦点を当てた授業反省会を行うことで、主体性に関する生徒の変容を評価する方法や学習指導案の様式、一覧表（試案 1）活用方法について、課題と対応策を整理することができた（表Ⅲ-高 2)。更に、器械運動の授業で有効だった手立てや働き掛けを追記した一覧表（試案 2）を作成した（図Ⅲ-高 8)。

表Ⅲ-高 2　授業反省会で出た課題と対応策

課題	対応策
ア）附属スタイルの視点に立った授業づくりは、本時だけではなく、単元として計画することが重要ではないか。	・単元計画を作成するとき、附属スタイルの視点を確認する。
イ）附属スタイルを反映させた学習指導案の様式の検討が必要ではないか。	・一覧表（試案 2）の手立てや働き掛けを学習指導案の「指導上の意図・留意点」に明記する。
ウ）生徒の実態（グループ）によって、一覧表（試案 1）の「手立てや働き掛け」は異なるのではないか。どこまで学習指導案に反映させるか検討が必要ではないか。	・学習指導案に詳細に反映させると、学習指導案の情報量が膨大になるため、附属スタイルの 2 つの視点を中心に手立てや働き掛けを明記できるように様式を変更する。
エ）授業前後の主体性について、生徒の様子や意識を確認することが必要ではないか。	・本校の目指す児童生徒像の具体的な姿と関連させて主体性を評価する。 ・主体性についての生徒の変容を把握するために、授業前後に主体性についてのアンケートを実施する。

（３）第３期　研究授業の実施（バスケットボール）における成果、課題と対応策

①　単元計画（参考資料３）について

研究授業（２回目）では、１回目の課題ア）を踏まえ、「粘り強く取り組む手立ての充実」「協働的な学びの充実」附属スタイルの２つの視点を入れながら単元全体を構想した。また、単元内でも授業改善を重ねるために、２時間目と４時間目を研究対象の授業として授業研究会で検討し、授業反省会を行った。その際、附属スタイルの２つの視点を取り入れた授業を検討するために、授業打ち合わせ資料を作成した（図Ⅲ-高 7）。

単元の構想に当たっては、保健体育科の見方・考え方にある『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること、「粘り強く取り組む手立ての充実」「協働的な学びの充実」の２つの視点から手立てや働き掛けを、可能な限り同じ仕組みで行うことと、単元の中で繰り返し行うことの２点に留意した。

②　「バスケットボール」２時間目の検討

初めに、単元の目標を基に本時の目標と評価規準を設定し、その後、必要な学習活動や手立てや働き掛けについて、研究授業（１回目）の後、加除修正された一覧表（試案２）を参考にしながら、第２期の課題イ）ウ）を改善するために授業打ち合わせ資料を作成した。「粘り強く取り組む手立ての充実」「協働的な学びの充実」の手立てや働き掛けについては、一覧表（試案２）から、それぞれの学習活動に関係するものを抜き出して記載した。作成した授業打ち合わせ資料を基に、学部研究会で「粘り強く取り組む手立ての充実」「協働的な学びの充実」の手立てや働き掛けについて加除修正を行った。

授業打ち合わせ資料

１ 本時の目標と評価について

目標：○シュートのポイントを理解し、意識しながら打つ。（知識・技能）

○シュートについての自分や友達の課題に気付き、ワークシートに記入したり、友達や教師に伝えたりする。（思考力・判断力・表現力）

○グループでの役割やシュート練習に自分から取り組もうとする。（学びに向かう力・人間性等）

評価：○「ひざを曲げる」「ボードに当てる」の2つのポイントを押さえながらシュートをしている。（知識・技能）

○「ひざを曲げる」「ボードに当てる」の2つのポイントの中から、ゲームで意識する課題を選び、ワークシートに記入したり、友達や教師に伝えたりしている。（思考力・判断力・表現力）

○動画撮影、助言、得点板などの役割や、ドリブル練習、ゲームに自分から取り組もうとしている。（主体的に学習に取り組む態度）

２ 学習活動について

学習活動	活動の概要	「粘り強さ」について	「協働的」について
１ 本時の学習を知る	・本時の目標、流れを知る。 ・シュートのポイント（①ボードに当てる②膝を曲げる）を知る。		
２ シュート練習タイム	（１）４人組でシュート練習を行う。試技、撮影、ポイント確認・応援の役割を順番で行う。動画はそれぞれのタブレットでとる。	（１）ゴール、ボール、距離を選ぶことができるようにする。（チャレンジ③④、工夫する③） （１）グループで取り組み、上手な友達の試技を見ることができるようにする（模倣①）	（１）４人組で役割を交代しながら取り組むようにする。（一緒にする①③⑥⑦、気持ちの共有③④⑥、関わる①④⑤）
３ 自分や友達の課題について考える	（１）動画を見ながら、ポイントの達成状況をチェックシートに記入する。 （２）チェックシートを見ながら、シュートゲームで意識するポイントを決める。	（１）課題設定の基準をワークシートで示すことで、苦手なポイントではなく、もう少しで達成できそうなポイントを課題として設定できるようにする。（自分で考える①、目標をもって②③、チャレンジ④）	（１）ペアで動画を見たり、ワークシートに記入したりさせる（関わる⑤⑥）
４ シュートゲーム	（１）自分でシュートする場所を選んで一人４回ずつ（左右２回ずつ）シュートを打ち、チームの合計点数を競う。	（１）ゴール、ボール、距離を選ぶことができるようにする。（チャレンジ③④、工夫する③） （１）試技前に自分が意識するポイントを発表させる。（目標をもって②③）	（２）見ている人は応援したり、ポイントを伝えたりするよう事前に説明する。（一緒にする③⑤、気持ちの共有③④）
４ まとめ	（１）ワークシートに記入する。 （２）教師の話を聞く。		

図Ⅲ-高７　２時間目授業打ち合わせ資料

生徒の姿	全体への手立てや働き掛け
a チャレンジ	1励ます言葉 2失敗してもよい雰囲気作り 3スモールステップ 4もう少しでできそうな課題の設定 5称賛（少しの成長、具体的に）
b目標をもって取り組む	1本時の目標の提示 2自分で目標を決める（選ぶ） 3振り返りを次に生かす 4(C)目標を再設定する
c続ける	1見通しを持たせる 2記録をつける（視覚的に） 3サポーター、仲間 4フィードバック（視覚的に） 5活動時間を短時間で区切る 6(A)活動のサイクルを提示する 7(B)同じ流れでできる限り繰り返す

図Ⅲ-高８　「粘り強く取り組む手立ての充実」一覧表（試案２）一部抜粋

③　2時間目の授業実施と改善

一覧表（試案2)、授業打ち合わせ資料を基に、「粘り強く取り組む手立ての充実」「協働的な学びの充実」の視点に焦点を当てて授業者全員で情報共有を行った。生徒の姿を共通理解したことで、グループに分かれた活動においても、共通した意図をもって手立てや働き掛けを行うことができた。

授業反省会では、成果、課題と対応策をまとめた。内容は以下のとおりである（表Ⅲ-高3、表Ⅲ-高4、表Ⅲ-高5)。

表Ⅲ-高3　附属スタイルの視点に立った授業の成果

成果	
粘り強く取り組む手立ての充実	協働的な学びの充実
・シュートが上達するためのポイントを2つに絞ったことで、ほとんどの生徒が意識できた。 ・ボールやゴールを複数用意することで全員が安心して取り組むことができた。 ・個人練習のとき、シュートする回数を決めたり、シュートをする場所を示したりすることによって分かりやすく活動できた。 ・ワークシートに目標設定の目安を示してあったので、もう少しでできそうな課題を選べていた生徒が多かった。 ・自他の動画を繰り返し見て、チェックポイントに沿ってチェックしていた。	・友達がシュートを打っている様子をよく見ていた。 ・拍手をして励ます様子が見られた。 ・ポイントを意識して声を掛けていた。 ・順番を守ってお互いがじっくり練習できた。

表Ⅲ-高4　「粘り強く取り組む手立ての充実」に関わる授業の課題と今後の対応策

粘り強く取り組む手立ての充実	
課題	対応策
リングの近くにあるバスケットボールのボードの内枠に当てる意識を高めたい。	当てる場所を明確にするために、バスケットボールのイラストをリングの近くにあるバスケットボールのボードの内枠に貼る。
教師や生徒による試技を全体で見る場面があると、更に粘り強さを意識しやすかった。	教師が試技をする場面を設定する。
「シュートを決めたい」という気持ちを高めると、粘り強く取り組む姿につながる。	プロのバスケットボール選手を例に挙げ、シュートを決めることが難しいこと、シュートが1本でも決まることの素晴らしさを強調して伝える。
シュートの練習量が少なかった。	4人組から2人組にすることで練習量を確保する。

表Ⅲ-高 5　「協働的な学びの充実」に関わる授業の課題と今後の対応策

協働的な学びの充実	
課題	対応策
「みる」「支える」の役割への支援や役割を交代するために時間がかかった。	役割を行う場面を精選し、練習時間を確保する。
動画を見るときの視点が多いと、チェックが難しかった。	動画を撮る回数を減らし、見るときには 1 つずつ視点を与えてチェックする。
練習に時間がかかり、ペアで課題を考える時間を確保できなかった。	練習を 4 人組から 2 人組にすることでスムーズに進めることができるようにする。また、休憩時間にもペアで動画を確認する場面を設ける。

④　「バスケットボール」研究授業（4 時間目）について

2 時間目と同様の手順で授業打ち合わせ資料を作成し、授業者を中心に「粘り強く取り組む手立ての充実」「協働的な学びの充実」の手立てや働き掛けについて加除修正を行った。「粘り強く取り組む手立ての充実」について、2 時間目で「ポイントを 2 つに絞ったことで、ほとんどの生徒が意識できた。」と成果が挙がっていたため、4 時間目においてもドリブルのポイントを「反対の手を上げる」「前を見る」の 2 つに絞って提案した。しかし、この 2 つのポイントを達成することが難しい生徒がいるのではないかと予想されたため、改めて一覧表（試案 2）を確認し、授業で引き出したい生徒の姿「チャレンジする」、その手立てである「スモールステップで課題を設定する」を授業に取り入れる必要があることを協議して決めた。その結果、おおよそ全員が達成できると予想される「ボールを押すようにつく」をポイントに追加した。難易度の低いポイントから取り組むことで、全員がチャレンジして達成できる活動を組み立てた（図Ⅲ-高 9）。

授業打ち合わせ資料

1 本時の目標と評価について

目標：○相手からボールを守るためのポイントを理解し、意識しながらドリブルをする。（知識及び技能）
　　○ドリブルについての自分や友達の課題に気付き、ワークシートに記入したり、友達や教師に伝えたりする。（思考力・判断力・表現力等）

評価：○「ボールを押すようにつく」「反対の手を上げる」「前を見る」のいずれかのポイントを押さえてドリブルをすることができたか。（知識・技能）
　　○自身の試技の動画を見ながら、ドリブルの3つのポイントが押さえられているかどうかチェックすることができたか。（思考・判断・表現）
　　○自身の試技の動画やワークシートをもとに、ゲームで意識する課題を選び、ワークシートに記入したり、友達や教師に伝えたりすることができたか。（思考・判断・表現）

2 学習活動について

学習活動	活動の概要	「粘り強さ」について	「協働的」について
1 本時の学習を知る	(1) 本時の目標、流れを知る。 (2) ドリブルのポイントを知る。		
2 ドリブル練習	(1) ペアでドリブル練習を行う。	(1) 3つのポイントを1つずつ意識させながら練習を進める。(チャレンジ③)	(1) 練習の流れをスライドや掲示物で示し、動画をとる、ポイントを伝えるなど互いに関わり合いながら練習を進めることができるようにする。(bd グループ：関わる④、ac グループ：気持ちの共有③④)
3 自分や友達の課題について考える	(1) 動画を見ながらワークシートにチェックする。 (2) ペアになり、ワークシートを見ながら互いの課題を一緒に考える。	(2) ワークシートをもとに練習でのポイントの達成状況を振り返らせ、課題を考えさせる。もう少しで完璧になりそうなものを選ばせる（目標をもって②③） (2) 具体的な言葉で書くことを促し、自分なりに考えたポイントを目標とすることができるようにする。(ac グループ：自分で考える①)	(1) (2) ペアで動画を見ながらポイントの達成状況を確認したり、課題を一緒に考えたりさせることで、互いに関わり合いながら活動に取り組むことができるようにする。(bd 関わる④、ac 気持ちの共有③④)
4 シュートゲーム	シュート成功、課題の達成で得点が入る。		仲間を励ます声掛け（ペア以外）やポイントを意識した声掛け（ペア）ができるように、事前に説明する。(bd グループ：関わる④、ac グループ：気持ちの共有③④)
4 まとめ	(1) ワークシートで振り返りを行う。 (2) 教師の話を聞く。		

図Ⅲ-高 9　4 時間目授業打ち合わせ資料

⑤　4 時間目の授業実施

2 時間目と同様に、一覧表（試案 2)、授業打ち合わせ資料を基に、「粘り強く取り組む手立ての充実」「協働的な学びの充実」の 2 つの視点を中心に授業者全員で情報共有を行ったことで、共通した意図をもって授業の中で手立てや働き掛けを行うことができた。

授業後、附属スタイルに焦点を当てた授業反省会を行い、有効な手立てや働き掛けを追記し（表Ⅲ-高 6)、一覧表（試案 3）を作成した（図Ⅲ-高 10、図Ⅲ-高 11)。

表Ⅲ-高 6　4 時間目の手立てや働き掛け

手立てや働き掛け	
粘り強く取り組む手立ての充実	協働的な学びの充実
【目標をもって取り組む】 ・ポイントを明確に示す。 ・示範と見比べる 【自分で考える】 ・ポイントについてイメージを生徒たちで言語化する。	【話し合う】 ・教師や生徒の人数、関係性などグルーピングの工夫をする。 ・同じペアで繰り返し取り組む。 【活動的に関わる】 ・物を介した関わりをする。 ・実技と伝える時間のすみわけをする。 【気持ちを共有する】 ・関わりやすい雰囲気を作る。教師が良い手本を見せて示す。

「粘り強く学習に取り組む手立ての充実」一覧表（試案 3）

生徒の姿	全体への手立てや働き掛け	個々への手立てや働き掛け
α チャレンジ	1 励ます言葉 2 失敗してもよい雰囲気作り 3 スモールステップ 4 もう少しでできそうな課題の設定 5 称賛（少しの成長、具体的に）	【障害特性に応じた指導】 ○(B) 不安が大きい生徒に対して、やってみようと思えるツールを用意する（道具、友達同士の声掛けなど） 【重度の生徒への指導】 (C) 運動の機能面に配慮しながら、一人ひとりに応じた課題（ポイント）の設定が必要 【その他】 ○(A) 個々の心理的特徴に応じた働き掛け

図Ⅲ-高 10　「粘り強く取り組む手立ての充実」一覧表（試案 3）一部抜粋

「協働的な学びの充実」一覧表（試案 3）

生徒の姿	全体への手立てや働き掛け	個々への手立てや働き掛け
α 自分の強みを知る	1 SSB を通して自分を知る 2 (B) 自分の演技についての動画を視聴させる 3 (B) 技のできている部分の映像を止めて説明を加える 4 (B) 技を完成させるためのポイントに○を付けて気付かせる 5 (C) 教師ができている部分を生徒にやりとりをしながら伝える。 6 (A)「○○係」など明確に役割を示す	【重度の生徒への指導】 ○見通しを持てるように、手順表を提示した ○集中できる時間に合わせ、課題に取り組む量を調整した
b 役割分担をする	1 自他の強みを共有する 2 役割の理解 3 行動する（最低限の声掛け）	【障害特性に応じた指導】 ・(B) 消極的な生徒、注意散漫な生徒に対して、教師が間に入り、活動や話合いのきっかけを作り、少し離れて見守る

図Ⅲ-高 11　「協働的な学びの充実」一覧表（試案 3）一部抜粋

⑥　研究授業の実施から見えた成果と課題

授業打ち合わせ資料を作成したことで、「粘り強く取り組む手立ての充実」「協働的な学びの充実」の視点に焦点を当てて共有、反省、改善を図ることができた。手立てや働き掛けについて一覧表（試案2）を活用して教師間で検討したことで、ポイントを意識しながら繰り返し練習に取り組んだり、友達と一緒にそれぞれの課題について考えたりするなど、「粘り強く取り組む手立ての充実」「協働的な学びの充実」に関わる生徒の姿が授業の中で多く見られた。また、授業研究会で検討した手立てや働き掛けを、単元内で可能な限り同じ仕組みで繰り返したことで、単元が進むにつれて取り組むべきことが分かり、自ら進んで行動したり、友達にポイントを伝えたりするような積極的に取り組む姿が多く見られた。特に、活動中の関わりが増えたり、課題を考える話し合いが充実したりするなど、「協働的な学びの充実」について深まりが見られた。さらに「粘り強く取り組む手立ての充実」「協働的な学びの充実」の2つの視点を中心に手立てや働き掛けを充実させたことで、ほとんどの生徒がポイントを意識しながらシュートやドリブルをすることができるようになるなど、教科の目標の知識・技能面についても向上が見られた。

課題は、保健体育科の見方、考え方である「する・みる・支える・知る」の視点、「協働的な学びの充実」の視点を毎時間入れたことで、「粘り強く取り組む手立ての充実」に必要な繰り返し活動に取り組む時間を確保することが難しいことがあった点である。単元の中でバランスを考えながら入れていく必要性を感じた。

（4）主体性の評価について

器械運動の授業後、課題として挙げられた生徒の主体性を確認するために、バスケットボールの研究授業において主体性の評価を実施した。高等部職員間で協議をした結果、本校が目指す主体性のある生徒は、「目指す児童生徒像の具体的な姿」であることを確認し、単元計画に挙げられた「目指す児童生徒像の具体的な姿」からアンケート項目を作成した。また、アンケートの最後には、自由記述欄を設け、感想を書けるようにしたことで、生徒が感じたことから、次時以降の授業づくりの参考にしたいと考えた。

アンケートの概要

①　対象

本校高等部生徒２１名

②　方法

５件法、定量分析

③　回収率

日付	9月20日	9月25日	10月2日	10月7日	10月21日
授業の時間	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	7時間目
回収した人数	19名	15名	16名	16名	15名
回収率	90.4%	71.4%	76.1%	76.1%	71.4%

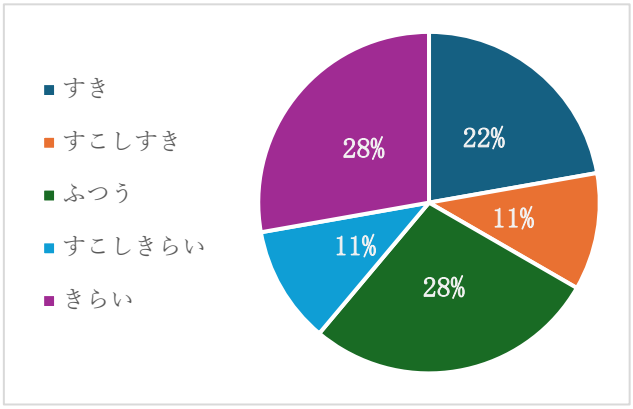
④結果

毎時間、授業終了時にアンケートを生徒に取った。

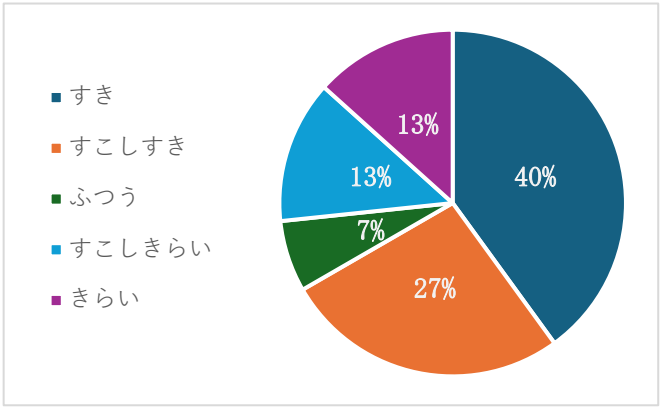
目指す児童生徒像：ものの見方や考え方を働かせて、主体的に学び、生活に生かす子

以下の項目は、単元開始時（1 時間目）と終了時（7 時間目）にアンケートを取り、結果を比較したものである。

質問 1　バスケットボールをすることは、好きですか？

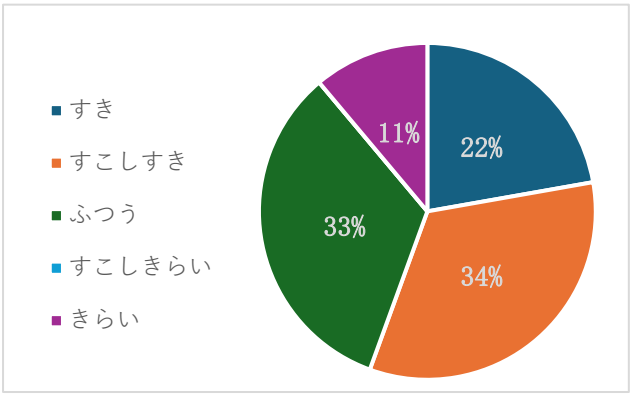


図Ⅲ-高 12　1 時間目終了時の結果

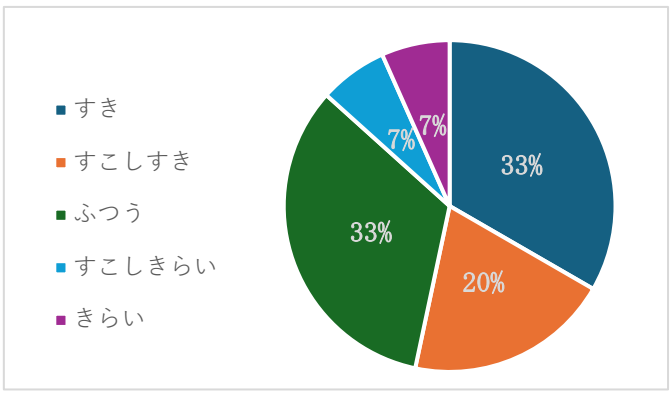


図Ⅲ-高 13　7 時間目終了時の結果

質問 2　バスケットボールを見る（観戦する）ことは、好きですか？

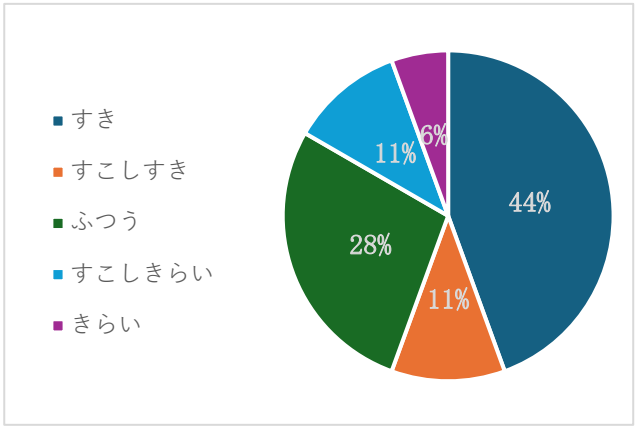


図Ⅲ-高 14　1 時間目終了時の結果

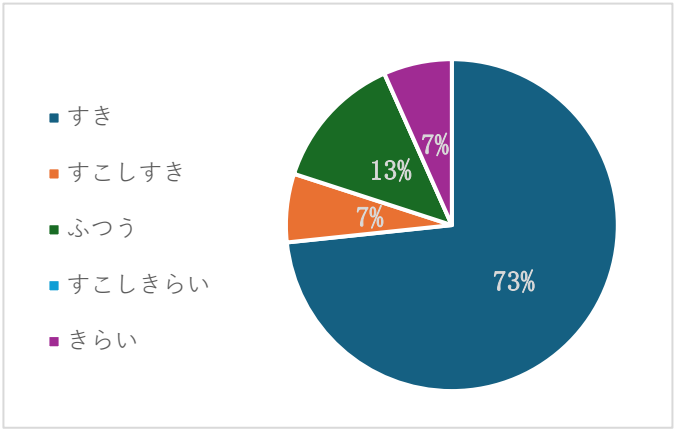


図Ⅲ-高 15　7 時間目終了時の結果

質問 3　バスケットボールをしている人を応援することは、好きですか？

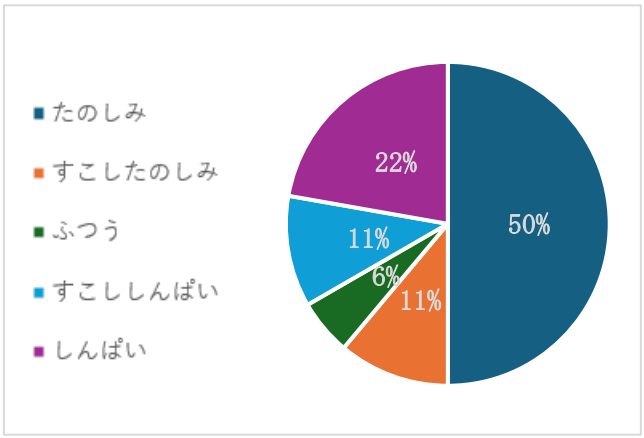


図Ⅲ-高 16　1 時間目終了時の結果

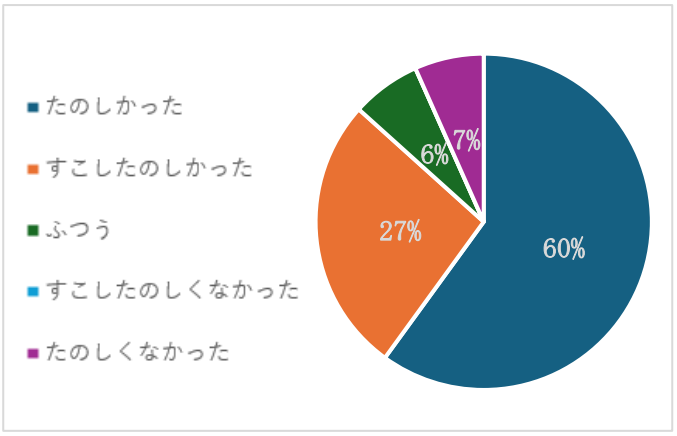


図Ⅲ-高 17　7 時間目終了時の結果

質問４　バスケットボールの勉強が楽しみ（楽しかった）ですか？



図Ⅲ-高 18　1 時間目終了時の結果



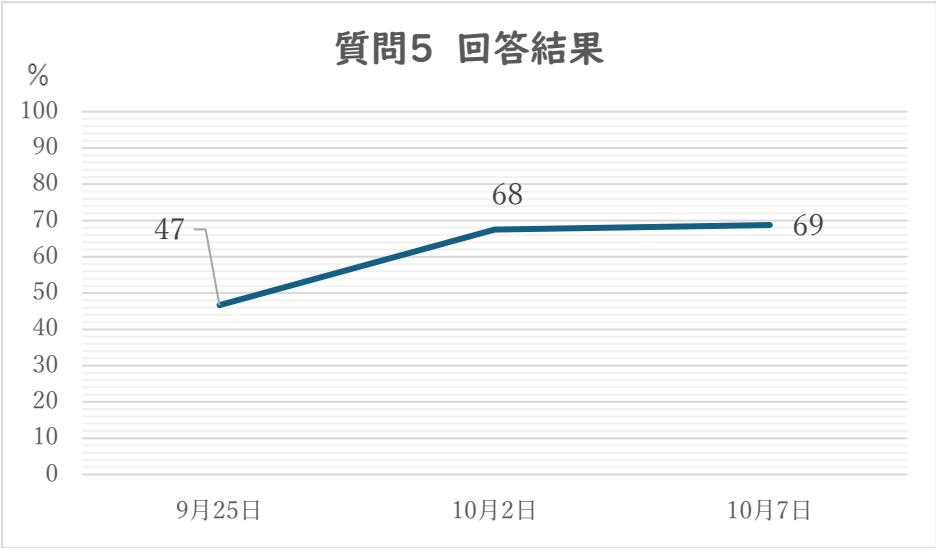
図Ⅲ-高 19　7 時間目終了時の結果

以下の質問は、P82 のアンケートの概要③回収率で記入したすべての日の授業終了時に生徒にアンケートを取った。生徒は授業での自分の様子を振り返って、達成度を%で記入するようにした。目盛りは 10%毎に線を入れて生徒に提示した。結果は、各生徒が自己評価した数値の平均を算出した。

下記の結果には、研究授業の対象である単元 2 時間目から 4 時間目までを掲載した。

目指す児童生徒像：自分の思いや考えを周りに伝えることができる子

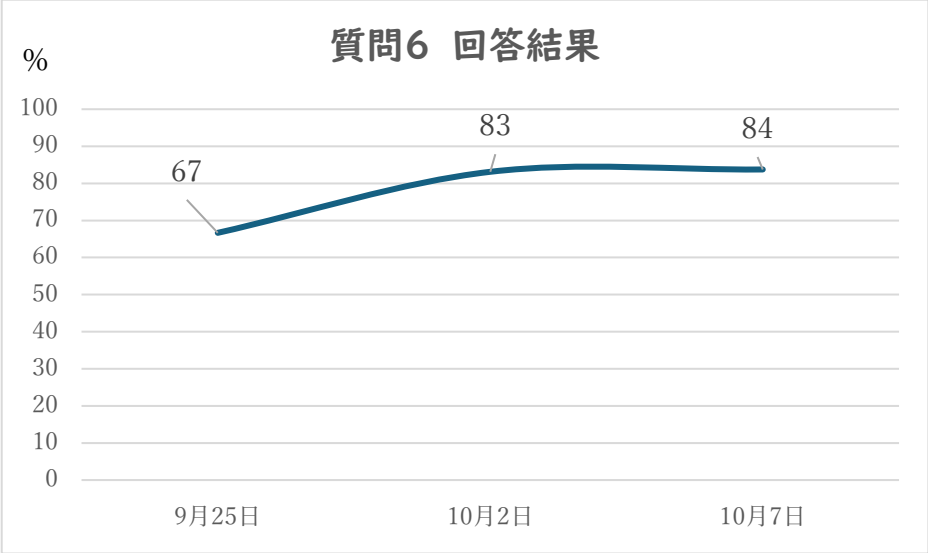
質問５　自分の思いや考えを周りに伝えることができていますか？



図Ⅲ-高 20　質問 5 回答結果

目指す児童生徒像：他者と共に協働し、学びあう子

質問６　友達と協力して勉強することができていますか？



図Ⅲ-高 21　質問 6 回答結果

⑤　考察

単元開始時と終了時の結果を比較すると、質問 1、3、4 で、「好き」「すこし好き」または「楽しみ（楽しかった）」「すこし楽しみ（すこし楽しかった）」の項目が高まった。また、質問 4、5 では、授業の回数を重ねる毎に、平均値が高くなった。

質問 1 から 4 については、授業研究会で「粘り強く取り組む手立ての充実」「協働的な学びの充実」の視点で手立てや働き掛けを考え、生徒に達成感を感じてもらえるような授業づくりを積み重ねてきた。それらの手立てや働き掛けが生徒の実態に合っていたため、意識の変容が見られたのではないかと考えられる。特に、質問 4 については、単元開始時はバスケットボールの授業に対して「心配」と選択していたが、単元終了時には、「楽しかった」を選択した生徒が複数見られた。練習やゲームを通して、できるようになった手応えを感じたり、友達と協力してゲームをしたりしたことによって楽しさを感じる場面が多かったのではないかと考えられる。

質問 5、6 については、2 時間目から 4 時間目にかけて平均値が高まった。

生徒が授業に前向きに参加したことによって、「自分の思いや考えを周りに伝えることができる」「他者と共に協働し、学びあう」ことができたと実感する場面が増えたからではないかと考えられる。ここで、アンケートの自由記述欄の生徒の感想にも注目したい（P86 表Ⅲ-高 7）。

表Ⅲ-高７　アンケート自由記述欄の生徒の感想

2時間目の感想	3時間目の感想
・自分で思ったよりシュートが苦手だった！そして、１コ目のマット（シュートを打つ場所）がゴールに近かったので、ゴールの裏側にいる友達に当たらないよう、少し力を優しく投げた。	・楽しかった。時間を重ねるほど、少しずつ楽しくなってきた。
・ボードに当てシュートをすることを学びました。当てるのが難しかった。	・シュートっていいかんじ 入ったときいいかんじ
・シュートを入れるときにボードに当てるのが難しかったです。友達のプレーを見るのは楽しかった。バスケットは苦手だと気付きました。	・シュートが１本でも入ってとてもうれしかったです。ひざを曲げたら入ることが分かりました。応援してもらうととてもうれしかったです。

2時間目は「できなかった」「難しかった」「こわい」という言葉が多かった。このことから、シュートが思うように入らず、難しさを感じている生徒が多かったのではないかと考えた。そこで、3時間目には、P78の表Ⅲ-高4、P79の表Ⅲ-高5のように今後の対応策を考え実践した。シュートやドリブルの練習に積極的に取り組むだけではなく、友達にポイントを伝えたり、自分に分かりやすい言葉で技のポイントを表現したりする様子が見られ、その結果として、質問5、6において平均値が高まったのではないかと考えられる。

そして、この授業での手立てや働き掛けをその後の授業でも継続して行ったため、単元終了時に質問1から4に対して「好き」「楽しかった」という回答をした生徒が増えたのではないかと考える。

３　研究成果と今後の課題

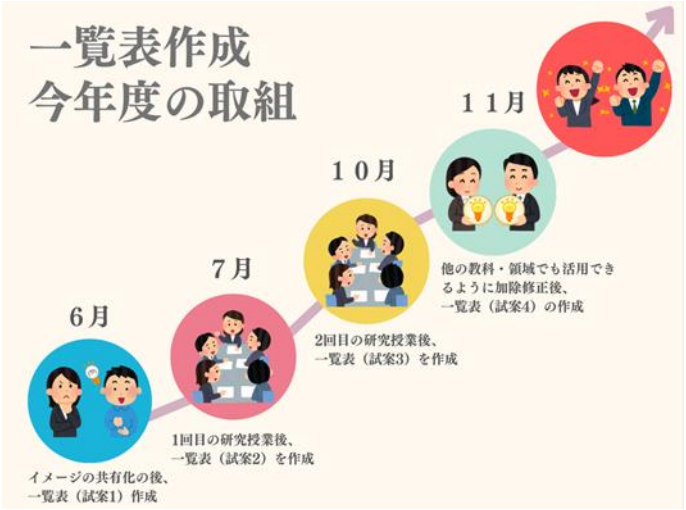
本研究では、附属スタイルの視点「粘り強く学習に取り組む手立ての充実」「協働的な学びの充実」について、2つの研究内容に取り組んだ。それぞれの研究の成果と課題を整理する。

（１）研究成果

①授業に取り入れた実践を積み重ね、更に加除修正や文言の整理などを行い、最終的に一覧表（試案4）（P92、P93参考資料4、5）を完成させた（図Ⅲ-高22）。

②一覧表を作る過程を通して、附属スタイルの2つの視点に関わる生徒の姿、手立てや働き掛けを教師間で共通理解できた。

③授業打ち合わせ資料を活用した授業研究会を行い、附属スタイルの2つの視点に焦点を絞った検討ができたため、教師同士が共通した意図をもって授業の中で手立てや働き掛けを行うことができた。



図Ⅲ-高22　今年度の取組

④主体性の評価について、「めざす児童生徒像」を基に作成したものを生徒に自己評価してもらったことによって、単元開始時と単元終了時と比較し、バスケットボールに対して楽しく、前向きな印象をもった生徒が多かったことが分かった。授業中、自分の思いを伝えたり、協力して学んだりしたと感じた生徒が増えたことも分かった。また、教師も生徒の言動や表情から同様の変容を感じており、主体性の評価の結果と一致した。

（2）今後の課題

①　一覧表（試案 4）について

本研究の振り返りを行ったとき、P92、P93 の一覧表（試案 4）の作成を通して、他の授業でも附属スタイルの 2 つの視点を意識して学習活動を考えるようになったなどの声が聞かれ、高等部の教師間では一覧表（試案 4）が少しずつ浸透してきている。今後は、他の授業での検証、一覧表の内容の検討や活用方法なども併せて検討していきたい。

②　附属スタイルの視点を取り入れた授業づくりについて

本研究では附属スタイルの 4 つの視点を取り入れた授業づくりまで検討することが難しかった。授業研究会において、単元計画を活用し、単元レベルでは附属スタイルの 4 つの視点を検討したが、回数も少なく十分に検討したとは言い難い。今後は附属スタイルの 4 つの視点を取り入れた授業づくりを一人一人の教師が実践し、附属スタイルを定着させていきたい。

打ち合わせ資料を活用した授業研究会を通して、授業の目標、評価だけではなく、附属スタイルの視点に立った手立てや働き掛けについて共通理解を図ることができるように工夫していきたい。その際、授業研究会の打ち合わせの手順や時間を事前に決めて、効率よく実施することに配慮したい。

また、主体性の評価の検討も今後の課題である。高等部では主体性を「目指す児童生徒像の具体的な姿」としてアンケートを作成した。しかし、検討が十分でないこと、高等部のみでの主体性の評価であることが課題として残る。

単元計画

長崎大学教育学部附属特別支援学校

年度	6	学部	高	教科	保健体育	単元名	器械運動

指導内容

【知識・技能】
器械運動の楽しさや喜びを味わい、その特性に応じた技能を理解するとともに技を身に付けること。

【思考力・判断力・表現力等】
器械運動についての自他の課題を発見し、その解決のための方策を工夫したり、仲間と考えたりしたことを他者に伝えること。

【学びに向かう力・人間性等】
器械運動の多様な経験を通して、きまりやルール、マナーなどを守り、仲間と協力したり、場や器械・器具の安全を確保したりし、自主的に運動をすること。

単元について

予定時数	6	時間	キャリア教育を支える３本柱との関連					
			役割仕事	◎	生活健康	ー	楽しみ余暇	ー

「目指す児童生徒像の具体的な姿」との関連	「キャリア発達に向けて各部で育てたい力」との関連
生きがい 憧れや希望を抱き、チャレンジする子	役仕【中高】初めてのことや苦手なことにもチャレンジしようとする
思決 自分の思いや考えを周りに伝えることができる子	役仕【高】自分の意思を伝える方法を身に付ける。
思いやり 他者と共に協働し、学びあう子	役仕【高】自分の意思を伝える方法を身に付ける。

単元目標

【知識・技能】
回転技や倒立技（平均台生徒：体操系やバランス系の基本的な技）に取り組み、一連の動きを滑らかに行ったり、バランスよく姿勢を保ったり、それらを組み合わせて演技することができる。
【思考・判断力・表現力】
マット運動（平均台運動）についての自分や友達の課題に気付き、課題を解決するための方法を考えたり、考えたことをグループの友達に伝えたりすることができる。
【学びに向かう力・人間性等】
マット運動（平均台運動）を安全に行うための約束を守り、友達と準備や練習を協力したり、安全に学習できる環境を確保したりして、自主的に取り組むことができる。

深い学びのための方策（どんな見方・考え方で学習に取り組ませ深い学びに向かわせるか）

子ども達が、器械運動の考え方や行い方に着目し、回転技や倒立技をよりよく演技できるように試行錯誤しながら学習に取り組んでいくことで、目標の姿に向かわせたい。

主な学習活動	教材	手立て				評価の観点			予定時数
		見通	粘強	協働	振返	知技	思判表	学び	
・マット運動（平均台運動）の様々な技に挑戦して、得意な技と苦手な技を知る。 ・発表会に向けて、今後挑戦する技を決める。	マット 平均台運動 練習道具 ワークシート	○	○		○			◎	1
・発表会で実施する技を練習する。 ・練習の様子について撮影した映像や、手本の映像を適宜振り返り、よりよい演技を目指して練習する。	マット 平均台運動 練習道具 ワークシート タブレット		◎	○	○	○	○	○	2
・練習の様子について撮影した映像や、手本の映像をグループで確認し、自分や友達の課題を明確にする。 ・自分や友達の課題について、解決方法をグループで考える。 ・考えた課題解決方法を実践し、よりよい演技を目指して練習する。	マット 平均台運動 練習道具 ワークシート タブレット		◎	◎	○	○	◎	○	2
・発表会を行う。 ・友達の演技の素晴らしかった所などについて伝え合う。	マット 平均台運動 ワークシート タブレット		○	○	○	◎		◎	1

保健体育科学習指導案

令和６年７月４日（１、２校時）
９：０５～１０：３０
高等部全学年
場　所　　体育館
授業者　　石塚大夢
ＳＴ１　　荒川皓基
ＳＴ２　　假屋健太
ＳＴ３　　板羽絵理
ＳＴ４　宮﨑美緒子

１　単元名　器械運動（マット運動・平均台運動）

２　本時（５／６）
(１) 目標
○発表会で実施する技を、滑らかに行うことができる。（知識・技能）
○自分や友達の技の課題に気付いたり、解決するための方法を考えて伝えたりすることができる。
（思考力・判断力・表現力等）
○器械運動での約束を守りながら、準備や練習に取り組んだり、自分たちで安全な学習環境を確保したりすることができる。（学びに向かう力・人間性等）

(２) 展開（㊍は協働的に学ぶ、㊌は粘り強く学習に取り組む態度についての手立てや働き掛けを記載）

学習活動	指導上の意図・留意点	準備物
１ 本時の学習を知る		
○前時のワークシートを見て、前時で学習した内容を振り返る	○前時のワークシートを見て学習内容を思い出すことで、前時での学習を生かして本時の学習に取り組むことができるようにする。	・前時のワークシート
○本時の目標を知る	○目標「解決マスターになる！」を提示することで、目標を意識して学習に取り組むことができるようにする。	・ホワイトボード
○本時の流れを知る	○本時の流れを確認して見通しをもつことで、授業の最後まで続けて学習に取り組むことができるようにする。	・ホワイトボード
○器械運動での3つの約束を確認する	○「失敗を笑わない」「マットを横切らない」「前の人が終わってから演技する」の3つの約束を確認することで、全員で一緒に安全を確保しながら学習に取り組んだり、チャレンジしようという姿につなげたりできるようにする。	・ホワイトボード
２ 発表会の技の練習をする		
○準備運動をする	○手本と同じように準備運動の動きをすることが難しい生徒は、STが支援を行うことで、準備運動を確実に行い、安全に学習を行う準備ができるようにする。	
(協)グループごとに学習に必要な道具を準備する	(協)「友達を準備に誘う」「友達の話をよく聞く」「準備する場所を伝える」など、道具を準備するために大切にしたいことを１つ選ぶことで、自分たちで関わり合いながら取り組むことができるようにする。 (協)道具を準備する様子をまずは見守り、一人で準備をしていたり、何をしてよいか分からない生徒がいたりした場合は、必要に応じて最低限の声掛けを行うことで、主体的に関わり合って取り組む	・ホワイトボード ・マット ・平均台

㊊㊍自分や友達の技の課題（悩みカード）を解決する方法を考える	ことができるようにする。 ㊊イラストを使った悩みカード（自分や友達の技の課題）を用意することで、自分や友達の技の課題発見に確実につなげることができるようにする。 ㊊㊍ABグループは、課題を解決するために必要な道具（タオルやボール、ロイター板など）や練習方法についての絵カードを用意することで、課題を解決するための方法を考えたり、話し合ったりすることができるようにする。 ㊊㊍Cグループは課題解決方法の検討ではなく、前時の授業の動画を観て自分や友達の課題により気付くことで、自分の考えを伝えたり、以降の練習に目標をもって取り組んだりすることができるようにする。 ㊍1つの課題の解決方法を重点的に考えるなど、考えるポイントを明確にすることで、可能な限り自分で考えようとできるようにする。	・ワークシート（悩みカード） ・課題解決道具（タオル等） ・絵カード ・タブレット端末 ・マット ・平均台
㊍技の課題（悩みカード）を解決するための練習方法を伝え合い、練習する	㊍演技の様子について撮影した映像や手本の動きの映像を確認する時間を設けることで、更に工夫して取り組もうとしたり、手本の映像を模倣しようとしたりすることができるようにする。 ㊍課題部分に着目して撮影した映像を確認することが難しい生徒がいる場合は、着目してほしい部分の映像を停止することで、自分で課題を考えたり、目標をもって練習に取り組んだりすることができるようにする。 ㊍到達度に応じて練習方法を変更してよいこと（道具を使用せずに練習する等）を伝えることで、チャレンジし続けることができるようにする。	・ワークシート（悩みカード） ・課題解決道具（タオル等） ・タブレット端末 ・マット ・平均台
3 振り返りをする		
○練習方法を工夫することで、ポイントを押さえて演技をしたり、前時よりも上達したりした部分や頑張りに気付く	○到達度や頑張りを振り返ることで、練習方法を工夫して取り組むことの大切さやこれからの課題などに気付くことができるようにする。	・ワークシート（悩みカード）
○優しい言葉を掛けながら悩みカードを友達に渡す	○感謝の言葉や称賛の言葉を掛け合って、課題を解決する方法を記載した悩みカードを友達に渡すことで、一緒に次時への意欲を高めることができるようにする。	
○次時の学習内容を知る	○次時に発表会を行うことを伝えることで、次時への意欲を高めることができるようにする。	

(3) 評価

・練習した技のポイントを確実に押さえて滑らかに行うことができたか。（知識・技能）

・自分や友達の技の課題について、教師が用意した道具（ボールやタオル、ロイター板など）を手掛かりに、練習方法を考え、友達に伝えることができたか。（思考力・判断力・表現力等）

・導入で提示した器械運動での3つの約束を守って準備や練習に取り組んだり、道具（ボールやタオル、ロイター板など）を使う際に安全な学習環境を自分たちで作ったりすることができたか。（主体的に学習に取り組む態度）

【参考資料 3】

単元計画

長崎大学教育学部附属特別支援学校

年度	6	学部	高	教科	保健体育	単元名	球技（バスケットボール）

指導内容

【知識・技能】
球技（バスケットボール）の楽しさや喜びを味わい、その特性に応じた技能を理解するとともに技を身に付け、簡易化されたゲームを行うこと。

【思考力・判断力・表現力等】
球技（バスケットボール）についての自他の課題を発見し、その解決のための方策を工夫したり、仲間と考えたりしたことを他者に伝えること。

【学びに向かう力・人間性等】
球技（バスケットボール）の多様な経験を通して、きまりやルール、マナーなどを守り、仲間と協力したり、場や用具の安全を確保したりし、自主的に運動をすること。

単元について

予定時数	14(10.5)	時間	キャリア教育を支える３本柱との関連					
			役割仕事	◎	生活健康	ー	楽しみ余暇	◎

「目指す児童生徒像の具体的な姿」との関連	「キャリア発達に向けて各部で育てたい力」との関連
生き生き ものの見方や考え方を働かせて、主体的に学び、生活に生かす子	役仕【中高】 初めてのことや苦手なことにもチャレンジしようとする
思決 自分の思いや考えを周りに伝えることができる子	役仕【高】自分の意思を伝える方法を身に付ける。
思いやり 他者と共に協働し、学びあう子	楽余【高】実践を通して、楽しみや余暇の過ごし方を自分で選んだり決めたりする

単元目標

【知識・技能】
バスケットボールの楽しさや喜びを味わい、シュート、パス、ドリブル、守備の仕方、ボールを持たないときの動きなどの技能を理解するとともにそれらの技を身に付け、ハーフコートの3対3やオールコートの5対5などの簡易化されたゲームを行う。
【思考・判断力・表現力】
バスケットボールのシュート、パス、ドリブル、守備の仕方、ボールを持たないときの動きなどについての自分や友達の課題に気付き、課題を解決するための方法を考えたり、考えたことをグループの友達や教師に伝えたりする。
【学びに向かう力・人間性等】
バスケットボールの多様な経験を通して、きまりやルール、マナーなどを守り、仲間と協力したり、場や用具の安全を確保したりし、自主的に運動をしようとする。

深い学びのための方策（どんな見方・考え方で学習に取り組ませ深い学びに向かわせるか）

バスケットボールの技能の習得を目指し、自分の課題に粘り強く取り組んだり、友達の課題を協力して解決したりする学習を通して、バスケットボールの特性に着目し、楽しさや喜びを味わうとともに、「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方に気付くことができるようにすることで目標の姿に向かわせたい。

主な学習活動	教材	手立て				評価の観点			予定時数
		見通	粘強	協働	振返	知技	思判表	学び	
○バスケットボールについて知る。 ・技やルール、チームや選手などについて知る。 ・バスケットボールへの関わり方（する、みる、支える、知る）を知る。 ・基本的なボール操作の練習をする。（シュート、ドリブル、パス） ・お試しのゲーム（ハーフコート3対3）をする。 ・振り返り	・スライド ・ワークシート ・ボール ・簡易ゴール ・マット （スペシャルゾーン）	◎			○	○			2
○狙ってシュートをする。 ・シュートするときのポイントを知る。 （狙う場所、ひざを曲げる、手をまっすぐ伸ばす） ・チームごとにシュート練習 ・自分や友達の課題について考える。 シュートゲームを行う。 ・振り返り	・スライド ・ワークシート ・ボール ・簡易ゴール		◎	◎	○	◎	◎	○	4

○ドリブルでボールを運ぶ。 ・ドリブルするときのポイントを知る。 （相手から遠い手、相手にとられない位置、逆手の使い方、前を見る） ・チームごとにドリブル練習 ・自分や友達の課題について考える。 ・ドリブルでボールを運んでからシュートを行う。（ゲーム） ・振り返り	・スライド ・ワークシート ・ボール ・簡易ゴール		◎	◎	○	◎	◎	○	2
○作戦を考えて試合をする。 ・作戦会議 ・作戦を遂行するための練習 ・ゲーム（オールコート5対5） ・振り返り ※大会を実施する。（最後）	・スライド ・ワークシート ・ボール ・簡易ゴール ・マット （スペシャルゾーン）		○	◎	◎	○	◎	◎	6

【参考資料４】

「学習に粘り強く取り組む手立ての充実」一覧表（試案４）

生徒の姿	全体への手立てや働き掛け		
	環境・機会の設定	かかわり	教材教具等
チャレンジする	・失敗してもよい雰囲気作り ・スモールステップで課題を設定する ・集中できる時間に合わせ、課題に取り組む量を調整する ・できるだけ多く実践する機会を設定する	・励ます言葉を掛ける ・称賛する（少しの成長、具体的に） ・友達同士の声掛けを促す ・個々の心理的特徴に応じた働き掛けをする	・個々の課題に合った教材 （補助具、道具を選択する など）
目標をもって取り組む	・自分で目標を決めさせる（選ばせる） ・ポイントを明確に示す ・学習活動後すぐに振り返りをさせる ・目標を再設定させる ・振り返りを次に生かすことができるような活動を設定する	・目標を意識し続けられるように、適宜声を掛ける ・ポイントをより意識するための合言葉を決める ・良い例と見比べさせる ・課題に気付くことができる提示を行う（言葉、写真、動画 など）	・本時の目標の提示 ・目標を常に確認できるツール ・自分の活動を客観的に振り返ることができる教材（写真、動画 など）
続ける	・見通しを持たせる ・活動時間を短時間で区切る ・同じ流れで繰り返すことができる活動を設定する ・やるべきことを明確にする ・できる経験を積ませる	・励ます言葉を掛ける ・称賛する ・友達からの励ましや称賛を受けることができるようにする ・視覚的なフィードバックをする	・手順表 ・視覚的な記録
自分で考える	・考えるポイントを明確に設定する ・自分で考える時間を設定する ・比較させることで気付きを引き出す	・考えるポイントを確認する ・教師が介入し、自分で考えるきっかけを作る ・少し離れて見守る ・教師と一緒に考える	・個々に応じた方法で課題を提示する （記述、選択肢、イラスト など） ・実態に応じた表現ツール （タブレット、絵カード など）
周りの意見（助言）を受け入れる	・グルーピングを工夫する	・生徒の意見をわかりやすく教師が伝える （教師の共感、フォロー、言い換え、見本、一緒にする など）	・意見を視覚化する（書く、ICT の活用 など）
工夫する	・個々に応じて環境を工夫する （自分に合った道具、場所、姿勢 など） ・客観的な視点を入れられるようにする	・生徒の考えを受け入れる ・可能な限り生徒の考えを取り入れる ・成功、失敗を問わず、工夫したことに対して称賛する	・わかりやすい例を提示する ・選択肢でヒントを示す（具体物 など）
模倣する （真似してやってみる）	・上手な友達の活動を見ることができるようにする	・真似する部分を具体的に伝える	・手本を示す（教師の示範、動画 など）

※個の手立て・働き掛け
○個別に身体的な誘導を行って促す
○個別にモデル提示をして促す
○個別に指さしやジェスチャーなどの身ぶりで促す
○個別に言葉掛けをして促す

【参考資料５】

「協働的な学びの充実」一覧表（試案４）

生徒の姿	全体への手立てや働き掛け		
	環境・機会の設定（立案時に想定できること）	かかわり（教師の授業中の直接的関わり）	教材教具等
自分の強みを知る	・生徒が自分の強みを確認できる方法を提示する（動画、教師の助言、友達の意見、比較）	・自分の強みはどんなところかを問いかける ・過去の自分と比較させて考えるよう促す ・友達の強みを考えて伝え合わせる ・できている部分をやりとりしながら伝える	
自分の強み生かす役割分担をする	・自他の強みを共有できるようにする ・個々の生徒に合わせた役割を提示する ・役割を選択する機会を設定する ・自分の強みを考えて選択する時間を設定する ・生徒同士で活動の準備できるような仕組みを作る	・生徒同士をつなぐための言葉掛けをする ・自分にできることは何か考えさせる（準備に誘う、声を掛ける、一生懸命運ぶなど） ・自信をもって自分の強みを生かせるように言葉掛けをする	・役割を視覚的に示す教材（役割表など） ・活動内容や必要な物を示す教材（手順表、準備物一覧表など）
話し合いをする	・話し合いの話型を設定する ・話し合いのルールを設定する ・グルーピングの工夫をする（教師や生徒の人数、関係性、同じペアで繰り返し取り組むなど） ・話し合いのポイントを設定する	・生徒が話したことを分かりやすい言葉で簡潔に説明したり、動きで伝えたりする ・話合いが深まりにくいグループに対しては、教師が質問をしながら意見を引き出す ・生徒自身が考えを表出するまで待つ ・生徒の意見をつなぐ	・話し合いの仕方を視覚的に示す教材（ルール表、話型など） ・考えを視覚化する教材（マッピング） ・意思表示をするための教材（ ICT の活用、ホワイトボードなど）
活動の中で関わる	・活動内容を明確に示す（すること、場所、順番、必要な道具など） ・対人への苦手さがある生徒に対しては物を介して関わることができるようにする ・活動の様子を共有する場面を設定する（動画の活用） ・グルーピングを工夫する（人数、関係性、同じペアで繰り返し取り組むなど） ・意見交換の時間を設定する	・注目してほしい場面を繰り返し伝える ・友達に助言をするタイミングを伝える ・生徒の実態に合わせて、ペア以外の友達への助言を促す	・相手に自分の意図を伝えるための教材（ホワイトボード、絵カードなど）
気持ちを共有する	・気持ちを共有する機会を設ける	・教師が雰囲気づくりをする（いい見本を見せる） ・個々に合った気持ちの表出を促す ・他者の気持ちに気付けるような働きかけをする（生徒のできている部分を拍手などで伝え、生徒同士が喜びを共有できるように促す、できなかったことに対して、励ます、共感するような言葉掛けを促すなど）	

※個の手立て・働き掛け
○個別に身体的な誘導を行って促す
○個別にモデル提示をして促す
○個別に指さしやジェスチャーなどの身ぶりで促す
○個別に言葉掛けをして促す

【附属スタイル】

「引き出したい子どもの姿」と「授業の工夫（サンプル）」

	引き出したい子供の姿	子供の姿を引き出すための授業の工夫（サンプル）
学習の見通しをもたせる	・単元全体への見通しをもつ ・本時の学習への見通しをもつ ・前時を思い出す ・これから学ぶことへの興味関心が高まる ・既習事項を忘れずに、生かそうとする	・単元計画の掲示（各グループの実態や教科のねらいに合わせる） ・発問の工夫（前時の学習とのつながりを意識した発問） ・前時の教材の提示 ・目標の提示
粘り強く学習に取り組む手立ての充実	・チャレンジする ・目標をもって取り組む ・続ける ・自分で考える ・周りの意見（助言を）を受け入れる ・工夫する ・模倣する（真似してやってみる）	※「粘り強く学習に取り組む手立ての充実」一覧表（試案 4）参照
協働的な学びの充実	・自分の強みを知る ・自分の強みを生かす、役割分担をする ・話し合いをする ・活動の中で関わる ・気持ちを共有する	※「粘り強く学習に取り組む手立ての充実」一覧表（試案 4）参照
振り返りの充実	・できたところに気付く ・以前の自分と比較して、変容したところに気付く ・学習したことを自分の中で価値付ける ・友達の意見や以前のワークシートを手掛かりにしながら考えをまとめる ・自分の課題に目を向ける ・次時とのつながりに気付く	・ワークシートの工夫（評価規準に沿った自己評価、感想など） ・実態に合わせた発問 ・動画や写真の活用

第４章　研究のまとめ

Ⅰ　研究の成果と課題

本研究では、生涯にわたって学び続ける児童生徒を育成するために、下記の研究仮説を立て研究を進めてきた。本研究の成果と課題を研究仮説に基づいて整理する。

〇研究仮説

これからの社会を生きる児童生徒に求められる資質・能力を反映した指導体制の構築と児童生徒の主体性を育む授業を実践することで、学校全体で校訓「生きる喜び」「生きる力」の実現を目指した教育を推進する。このことにより、児童生徒が自ら学び、多様な社会で活躍できる力を身に付けていくことができるであろう。

1　児童生徒に求められる資質能力を反映した指導体制の構築についての研究

今回の研究では、現在及び将来において児童生徒に関係する方々を対象に、児童生徒が社会生活を送る上で必要となる資質・能力について「働く力と余暇」の視点からアンケートを実施した。この調査を通じて、今後就労を目指す児童生徒に必要な力を明確にするとともに、障害者を取り巻く時代の流れを含めた学校に求められる役割についても知見を得ることができた。また、本校では、児童生徒が在籍している間にできる限り多くの日常生活に必要な技能や社会生活を送る上での態度を育成する必要性を改めて認識させられた。

さらに、「目指す児童生徒像の具体的な姿」の検討は、全教員が校訓および「目指す児童生徒像」について深く考える良い機会となった。この検討を通じて、学校在籍中から社会生活に結び付く学びの一貫性やキャリア教育の在り方を整えると同時に、本校が育てたい子供像を再確認することができた。

本校の「キャリア教育全体計画」を中心としたキャリア教育の見直しについても、本研究に関連している部分も多いため、進路指導部が中心となり協働で見直しを図った。全体計画がうまく運用されなかった要因を明らかにし、ビジュアルやキーワードを多く取り入れ、系統性を再整備することで、全教員が日々の指導で意識しやすい計画を策定することができたと考えている。

また、本校版キャリアパスポート「セルフサポートブック（SSB)」については、当初高等部で活用していた物を全校で一貫して取り組めるように改訂した。これにより、従来のキャリアパスポートに比べ、自分自身を客観的に捉え、発達段階に応じた成長や課題を把握できるようになった。このツールは、日々の姿では見えにくい多様な成長を本人だけではなく、児童生徒に関わる人々が実感できるツールとなった。現在は検証期間が浅く、発展的な改善の余地は十分にあると考えているので、運用を重ねながら本校独自の形を築き上げていきたいと考えている。

新たに策定した「目指す児童生徒像の具体的な姿」と「キャリア教育全体計画」の各項目を指導に反映させるために、各教科の学習単元計画表に項目記入欄を設け、授業に反映する取組も進めた。しかし、学習単元計画表を活用する方法には難しさがあり、授業の取組だけでは十分ではないことも確認された。このことから、教育課程全体への反映など、大きな視点で取り組みが必要であることを再認識した。今後は、様々な指導場面において、本校が育てたい子供像を意識しながら実践を進められるよう学校全体で系統的かつ一貫性のある指導を研究し、深化させていく必要性があると考えている。

2　児童生徒が自ら学び、多様な社会で活躍できる力を身に付けていく力を育成するための研究

本研究では、生涯にわたり主体的に社会に関わろうとする力の育成には、学校における児童生徒の「学習への主体性」を促進することが必要であるとの考えに基づき、主体性を育成するための授業スタイル「附属スタイル」を設定し、各部で研究と検証を行った。

小学部では、「学習の見通しをもたせる」「学習の振り返りの充実」を中心に取り組んだ。その結果、教師にとっては、題材や学習活動を考える視点や授業における手立ての視点が広がり、より児童主体の授業づくりを考えるようになったことが成果として得られた。また、児童にも単元や授業を振り返る学習の流れと仕方が定着しつつあることが成果としてあった。一方で、児童の実態によっては「附属スタイル」の活用に難しさがあり、実践を重ねながら引き続き検討が必要であることが課題として挙げられた。

中学部では、「学習の振り返りの充実」を中心に取り組んだ。学習の振り返りを授業で意識的に行うことで、教師が児童生徒の変容や成長に以前より注目出来るようになったという成果を得ることができた。また、ある教科で学習したことを他の授業で般化させようとする姿が見られ、学んだことを生かそうとする主体性の育成につながったと考えられる。ICT 機器を活用した振り返りには課題もあるものの、生徒が学習したことを表現しようとする意欲を引き出す効果が見られたので、実態に合った振り返りの方法を模索することで更なる広がりが期待される。

高等部では、「粘り強く学習に取り組む手立ての充実」「協働的な学びの充実」に取り組んだ。実践を進める中で、それぞれの要素に関する一覧表を作成し、授業における働き掛け方や授業づくりを教員間で共有するツールとして活用することができた。生徒同士のかかわりが深まり、変容が見られたとの意見もあった。一方で、研究期間が短かったため、「附属スタイル」を踏まえた授業づくりの検証や評価の在り方について十分な検討が行えなかったことが課題として残った。

主体性を育てるために作成した「附属スタイル」は、各学部の成果報告に示されているように、一定の成果を上げることができた。特に、学校全体で統一した視点を設けて研究を進めたことで、新たな気付きが得られ、教員間での意見交換が促進され、児童生徒の主体性の育成に対する意識を高めるきっかけになったと考える。「附属スタイル」の各要素を組み合わせた授業実践を行ってみたいとの声もあり、今後も研究を継続することで更なる深まりが生まれてくることを期待している。一方で、児童生徒の主体性の育成を確認するには長い期間での検証が必要であると考えている。日々の児童生徒の成長を確認しながら、教員が相互的に確認できるシステムづくりについても考えていきたい。

Ⅱ　本研究を振り返って

本研究では、子どもたちが将来の生活で必要とされる多様な力の中でも特に「主体性」に着目し、キャリア教育の視点から体制づくりと授業づくりの研究に取り組んできた。学習指導要領が掲げる「主体的・対話的で深い学び」の実現に加え、「OECD ラーニングコンパス 2030」が提唱する共同エージェンシーの視点を取り入れ、主体性を発揮しつつ、社会や他者と協働してよりよい未来を想像していく力の育成を目指してきた。

本研究を通じて、児童生徒の主体性の育成を目指した授業づくりの重要性について確認するとともに、児童生徒が教員や保護者と成長の過程を振り返る中で、自信を深め、さらなる成長を目指す姿勢が育ってきたことを確認することができた。

しかしながら、本研究での取組は、複数ある児童生徒の「主体性」を育成する方法の一例に過ぎず、他の指導方法についても検討していく必要はあると考える。主体性の育成を重視した授業づくりは、本校の指導の根幹をなすべき部分でもあるので、今後も全教員が継続して研鑽を積み重ね、指導実践を繰り返しながら探究を続けていきたい。

次期学習指導要領の公示が数年後に控える中、更なる教育の深化が求められることは確実である。そのような状況において、本校は、時代が求める教育を常に把握し、全教員が研鑽を重ねながら、校訓である「生きる喜び」「生きる力」を身に付けた児童生徒が社会で活躍できる教育実践を今後も探究していきたい。

研究紀要バックナンバー一覧（第１集～第 24 集）

■ 特殊学級時代

1)第１次研究〈表現力を豊かにする学習指導〉

精神薄弱児の表現力を伸ばすために、身体表現・絵・文字に視点をあて、文献の研究と授業研究で指導方法を追究した。

2)第２次研究〈事象の認識過程〉

精神薄弱児の認識の過程を知るため実態調査をした。この結果をどう生かしていくかをまとめた。（「精神薄弱児の研究」金子書房、1970）

3)第３次研究〈小中学部の一貫した教育課程の編成〉

以前の研究をふまえ、基礎資料となる計画案をもちより、討論と作業をくりかえして、要素表作成へ第一歩を踏み出した。

■ 養護学校時代

研究紀要　第１集（1972.2）

ひとりひとりの力を伸ばすには

養護・訓練をどのように計画し指導したらよいか（ｉ）

Ⅰ　研究のあゆみ

Ⅱ　養護・訓練の研究と実践

1. 研究へのとりくみ

⑴養護・訓練のうけとめ

⑵内容へのとりくみ

⑶障害・遅滞について

⑷実態調査

2. 授業へのとりくみ

⑴小学部

⑵中学部

3. 仮説へのとりくみ

⑴初期の実践から

⑵現在のとりくみ

Ⅲ　今後の課題

今次の研究を、精神薄弱教育の本質にせまる問題としてとらえ、3 か年の研究計画とした。そして、そこから派生すると思われる精神薄弱教育の諸問題を基本的に解決しようと試みた。

第１年次〈養護・訓練の受けとめと児童・生徒の障害・遅滞の把握〉

養護・訓練とは、障害と遅滞を対象にした教育であり、個人的サービスであるとした。テーマは、児童、生徒の障害・遅滞の把握とし、日常生活の観察、言語障害児選別テスト、狩野・オゼレツキー運動能力発達検査から、実態把握につとめた。課題として「障害・遅滞とは」を残した。

第２年次〈障害・遅滞に応じた指導の方法をさぐる〉

対象児選定の方法の確立と診断テスト、および指導のあり方を中心に実践した。

第３年次〈教育課程の中に養護・訓練を位置づけ、教科等と関連を明確にする〉

養護・訓練の目標や内容をあきらかにし、教育課程の位置づけを考える。

研究紀要　第２集（1974.10）

ひとりひとりの力を伸ばすには

養護・訓練をどのように計画し指導したらよいか（ⅱ）

Ⅰ　はじめに

1. 研究の経過

2. 障害と遅滞

Ⅱ　養護・訓練と教育課程

1. 養護・訓練の位置

2. 養護・訓練の目標

3. 養護・訓練の内容

⑴内容のとらえ方

⑵他領域との関連

Ⅲ　養護・訓練の指導

1. 対象児の選定と診断テスト

2. 指導形態と指導時間

3. 言語班での指導

4. 運動班での指導

Ⅳ　おわりに

養護・訓練の実践面での問題点や課題を追究して、本校における養護・訓練についてまとめた。子どもたちは、ひとりひとりちがう」ことや「教育課程の二重構造性」についてまとめた。

研究紀要　第３集（1978.3）
「意欲的な学習」をめざした精神薄弱児の指導はどうあればよいか　～教育課程の改訂をめざして、欲求の発達をさぐる～

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　研究テーマについて
Ⅲ　意欲・欲求・動機づけ
Ⅳ　研究計画と方法
Ⅴ　実践
1. 授業の展開および記録
2. 各グループのとりくみ［生活科、家庭科、技術科、作業、体育科グループ］
Ⅵ　考察および今後の課題

学習意欲という視点から「意欲」「欲求」「動機づけ」をキーワードに教育課程を見直し、改訂していこうとした。

研究紀要　第４集（1979.6）
生活力を伸ばすための合宿単元学習はどのように計画したらよいか　～生活単元学習のあり方を求めて～

Ⅰ　研究主題と設定理由
Ⅱ　合宿単元の実践
Ⅲ　合宿単元における課題研究

【小学部】合宿の個人目標設定［身辺処理能力に関すること、集団参加能力に関すること］
【中学部】合宿の個人目標設定［基本的生活習慣、心身の鍛練、集団適応能力］
【高等部】記録と個人評価［働きかけを受けないで、促されて、指導を受けて］～生活意識の評価［積極性、分担の自覚、協力性、完達性、指導性、素直さ］

研究紀要　第５集（1981.6）
教育課程の編成　～教育課程の手順をさぐる～

Ⅰ　研究主題と設定の理由
Ⅱ　研究の目的
Ⅲ　研究の方法
Ⅳ　各学部の研究
1. 小学部
2. 中学部
3. 高等部
Ⅴ　研究の結果と考察

生きていくために必要な能力や資質を整理する中で六つの領域が設定された。「身辺の自立」「社会性」「感覚・運動」「知的能力」「情操」「態度的能力」がそれである。特に「情操」や「態度的能力」は、次のような下位項目で構成されている。

情操：情緒、欲求、興味、余暇の利用、表現、鑑賞、飼育、栽培
態度的能力：意欲、協調性、積極性、持続性、注意力、責任感、素直さ、自主性、明朗性、忍耐力、公共心、競争意識

意欲づくり（小学部）、基盤づくり（中学部）、適応づくり（高等部）の段階的な構造を構築。
特に高等部では、指導領域を「くらし」「しごと」「たのしみ」「からだ」四つにまとめられた。この頃、「目指す人間像」が下記のように示された。

○愛される人間
○けじめのある人間
○頑張る人間
○自分でお金をかせげる人間
○余暇利用
○ 社会に役立つ人間

研究紀要　第６集（1983.6）
指導法の研究～よりよい授業の創造をめざして～

Ⅰ　研究主題と設定の理由
Ⅱ　研究の具体化
Ⅲ　小学部の研究
Ⅳ　中学部の研究
Ⅴ　高等部の研究
Ⅵ　考察および今後の課題
（付）保健室における女子の生理指導

研究紀要　第7集（1985.10）
教育課程の見直しの方法をさぐる
～「数と計算」の学習を通して
Ⅰ　研究主題と設定理由
Ⅱ　研究の具体化
Ⅲ　内容班の研究
Ⅳ　方法班の研究
Ⅴ　調査班の研究
Ⅵ　小学部の研究
Ⅶ　中学部の研究
Ⅷ　高等部の研究
Ⅸ　考察および今後の課題

研究紀要　第8集（1987.6）
一人ひとりの子どもをみつめた実践と評価
Ⅰ　主題設定の理由
Ⅱ　研究方法
Ⅲ　各班の研究［重い子班、運動班、養護・訓練班、国語班、作業班、職場実習班、性教育班］
Ⅳ　結果と考察

研究紀要　第9集（1989.6）
社会生活を豊かにするコミュニケーションの指導（その1）　～発達段階に応じたコミュニケーションの指導内容を探る～
Ⅰ　主題設定について
1. コミュニケーション研究の必要性
2. コミュニケーションのとらえ
3. 研究の焦点化
Ⅱ　研究構想
Ⅲ　研究の目的と方法
Ⅳ　各学部の研究
Ⅴ　考察と課題

研究紀要　第10集（1991.6）
社会生活を豊かにするコミュニケーションの指導（その2）　～コミュニケーション指導内容表、コミュニケーション基本指導プログラムの作成と実践事例を通して～
Ⅰ　研究テーマの設定理由
Ⅱ　研究の目的
Ⅲ　研究の手続き
Ⅳ　本校のコミュニケーションの様相
1. コミュニケーションの考え方
2. 本校の児童・生徒の実態とコミュニケーションの指導内容
3. コミュニケーションの指導方法
4. コミュニケーションの指導の評価
Ⅴ　小学部の研究
Ⅵ　中学部の研究
Ⅶ　高等部の研究
Ⅷ　まとめと今後の課題

研究紀要　第11集（1993.6）
「自らが生活を充実させようとする」教育を求めて
Ⅰ　テーマとその背景
Ⅱ　小学部の研究
課題に自ら取り組み、自ら解決する子供をめざして、自己選択・自己決定するための効果的な指導法をさぐる
Ⅲ　中学部の研究
生活に生き、生活を楽しむための教科別指導(国語)のあり方をさぐる
Ⅳ　高等部の研究
卒業生の実態調査を通して、よりよい生活を願った高等部教育を考える

研究紀要　第12集（1995.11）
自立を支える指導法の研究　～自ら考えて行動する子供を育てる授業のあり方を探る～
Ⅰ　研究テーマについて
Ⅱ　研究の目標
Ⅲ　研究の方法
Ⅳ　小学部の研究
子供が工夫して遊びを楽しむような課題あそびの仕組み方と働きかけの方法を探る
Ⅴ　中学部の研究
自ら思考し、解決する力を引き出すための授業計画や働きかけの方法を探る
Ⅵ　高等部の研究
生活中心の授業を通して、将来も自らの意思と判断で生活を充実させようとする指導のあり方を

探る
Ⅶ　研究の結果と提言

研究紀要　第13集（1997.6）
子どもの内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善
～一人ひとりが主体的に取り組める授業をめざして～
（その1：診断的評価から目標設定を考える）
Ⅰ　研究基調
Ⅱ　小学部の研究
のびのびと自分らしさを発揮する子どもを育てるための内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善
Ⅲ　中学部の研究
生き生きと個性を発揮し、自ら生活に取り組もうとする生徒を育てるための内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善
Ⅳ　高等部の研究
生きることに自信をもち、向上心と思いやりのある生徒を育てるための内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善

研究紀要　第14集（1999.6）
子どもの内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善
～一人ひとりが主体的に取り組める授業をめざして～
（その2:形成的評価から授業改善の方法を考える）
Ⅰ　研究基調
Ⅱ　小学部の研究
のびのびと自分らしさを発揮する子どもを育てるための内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善
Ⅲ　中学部の研究
生き生きと個性を発揮し、自ら生活に取り組もうとする生徒を育てるための内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善
Ⅳ　高等部の研究
生きることに自信をもち、向上心と思いやりのある生徒を育てるための内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善

研究紀要　第15集（2002.2）
教育課程の再編成　その1　～アセスメント機能をもった内容表試案を作成し、指導形態等の改善の手がかりを探る～
Ⅰ　研究基調
1. はじめに
2. 目的
3. 研究の基本姿勢と方法
4. 結果と考察
⑴教育課程に関連した学校教育の動向
⑵教育課程のとらえ
⑶内容表試案の機能と構造など
⑷今後の教育課程の研究の手がかり
5. 最後に
Ⅱ　小学部の研究
Keyword：教育課程、意欲づくり、発達的な視点、育てたい子ども像、不易の視点、教育内容、中核的内容、順序性、発達のステージ、領域別教育内容表、生きる力
Ⅲ　中学部の研究
Keyword：厳選の視点、中核的内容、根源的な力、基盤づくり、問題解決的な学習、内容知、内面、方法知
Ⅳ　高等部の研究
Keyword：教育課程、内容表試案、完全学校週5日制、個別移行支援計画、自己選択・自己決定、自己理解

研究紀要　第16集（2004.6）
教育課程の再編成　その2　～実践的課題研究と卒業生の実態調査をとおして、自立と社会参加をめざした教育課程の編成の手がかりを探る～
Ⅰ　研究基調
1. 全体研究テーマについて
2. 全体研究目的
3. サブテーマについて
4. 研究方法
5. 研究成果と教育課程再編成への提言のまとめ

6. 研究その２のまとめと研究その３の展望

Ⅱ　小学部の研究

一人一人の教育的ニーズに応じる教育課程への再編成の手がかりを探る　～現教育課程で指導の難しさを感じる子どもの事例をとおして～

Keyword：生活のニーズ、発達のニーズ、教育的ニーズ、情緒の育ちと安定、一人一人に応じる、集団学習のよさ、発達的な視点、柔軟な構造をもつ教育課程

Ⅲ　中学部の研究

思春期を迎える中学生の発達と「からだの学習」の検討をとおして、教育課程再編成の手がかりを探る

～アイデンティティの形成につながる自己意識・自己概念の発達に焦点をあてた発達課題の検討に基づいて～

Keyword：思春期（青年期前期）、発達課題、からだの学習（性教育）、自己意識・自己概念、アイデンティティ

Ⅳ　高等部の研究

自ら進路を切り拓く生徒を育てる「進路学習」の在り方の検討をとおして、教育課程再編成の手がかりを探る　～卒業生の実態調査と高等部段階における個々の発達をふまえて～

Keyword：進路を切り拓く、進路指導、進路学習、自己選択、自己決定、発達段階に応じた進路学習、「“大人の自分”づくり」、自己理解、前向きな姿勢

Ⅴ　卒業生の調査研究

「卒業生保護者への本校教育課程についてのアンケート調査」と「卒業生の生活についてのアンケート調査」をとおして、教育課程再編成の手がかかりを探る

Keyword：アンケート調査、卒業生、卒業後の生活実態、労働実態

研究紀要　第17集（2007.2）

教育課程の再編成　その３

～自己の形成へつながる教育課程の創造～

Ⅰ　研究基調

Ⅱ　グループ研究

1. 区分「くらし」

2. 区分「いきがい」

3. 区分「まなび」

4. 区分「からだ」

5. ４区分を支える「こころ」

Ⅲ　小学部の研究

小学部における自己の姿：「自己活動の充実期」～身近なものとかかわるなかで自分に気づき、発見していく自己～

Ⅳ　中学部の研究

中学部における自己の姿：「自己の拡大・肯定期」～自分の成長を実感し、他者と協調しながら新たな自分をみつめる自己～

Ⅴ　高等部の研究

高等部における自己の姿：「客観的な自己の形成期」

～客観的な自己評価や生き方のイメージをもち、自立的な社会生活の場への積極的な参加を志向する自己～

Ⅵ　今後の課題

■ 特別支援学校時代

研究紀要　第18集（2009.6）

自己を育む授業実践～「こころチェックリスト」を取り入れた授業設計～

Ⅰ　研究基調

1　研究の概要

2　全体研究テーマについて

3　研究の目的

4　研究の方法

5　研究の経過

Ⅱ　小学部の研究

自己活動に視点をおいた授業づくり

Keyword：自己活動の発現期、行為主体の自己、要求主体の自己、自己調整の芽生え、こころチェックリスト、授業分析表、重要な他者

Ⅲ　中学部の研究

自己調整に視点をおいた授業づくり

Keyword：自己調整、個別目標チェック表、授業分析表、仲間関係

Ⅳ　高等部の研究

自己決定に視点をおいた授業づくり

Keyword：自己決定、自己理解、自己選択、自己評価、他者評価

Ⅴ　研究の成果と展望

研究紀要　第19集（2012．2）
自己の育ちを支える小・中・高一貫した進路学習の授業の在り方を考える
～「進路学習のステップ」の作成と指導形態「進路」の実践～
Ⅰ　研究基調
Ⅱ　小学部の研究
「なりたい～なれるかなぁ？」～わくわくドキドキ　夢ふくらむ「しんろ」の授業づくり～
Ⅲ　中学部の研究
支えあっている生活に気づき、これからの自分に期待する授業づくり
Ⅳ　高等部の研究
大人になっていく自分を見つめ、将来へのビジョンを描く授業づくり

研究紀要　第20集（2014．2）
児童生徒の生活と授業のさらなる結びつきを目指して
Ⅰ　研究基調
Ⅱ　小学部の研究
実生活につながる「からだの学習」の授業づくり～内容・方法の見直しを通して～
Ⅲ　中学部の研究
実生活に結びつく豊かな言語活動を目指した授業づくり～国語の学習「話す」に着目して～
Ⅳ　高等部の研究
くらしふくらむ授業づくり～生活のニーズを考えた言語・数量の学習を視点として～

研究紀要　第21集（2016．2）
児童生徒の将来につながる「自己」を育むプロセスを探る～自尊感情を大切にした教育的支援の在り方～
Ⅰ研究基調
Ⅱ小学部の研究
意欲や自信を育てるためのアプローチの仕方を明らかにする実践研究
Ⅲ中学部の研究
こころの特性を生かした授業づくり
Ⅳ高等部の研究
仲間との関係の中で育む“大人の自分”づくり

研究紀要　第22集（2018．2）
キャリア発達を支援する系統的な指導を目指して
～子どもたちの「考える姿」に着目した授業づくり～
Ⅰ　研究の概要
Ⅱ　研究の経過
1　一貫性・系統性のある教育活動の充実に向けた取組
2　児童生徒のキャリア発達を促す授業実践
⑴ 小学部の取組
⑵ 中学部の取組
⑶ 高等部の取組
Ⅲ　学校と社会の接続を目指した取組
Ⅳ　研究のまとめ

研究紀要　第23集（2020．2）
生きる喜び・生きる力を育む教育課程の編成
～「何を学ぶか」「どのように学ぶか」の整理を通して～
Ⅰ　研究の概要
Ⅱ　小学部の研究
1　小学部の教育課程を編成するに当たって
2　新しい小学部の教育課程
3　今後の課題
Ⅲ　中学部の研究
1　中学部の教育課程を編成するに当たって
2　新しい中学部の教育課程
3　今後の課題
Ⅳ　高等部の研究
1　高等部の教育課程を編成するに当たって
2　新しい高等部の教育課程
3　今後の課題

研究紀要　第24集（2022．2）
生きる喜び・生きる力を育む教育課程の編成　その2

～新学習指導要領を踏まえた授業改善と評価～

Ⅰ　研究の概要
Ⅱ　小学部の取組
主体的・対話的で深い学びの視点における国語、算数の授業改善の取組
Ⅲ　中学部の取組
1　新単元計画を生かした国語の授業実践
2　仲間とチャレンジし、自分の成長を実感することができる生徒の育成を目指して
～「総合的な学習の時間」全体計画の作成と実践・検証から～
Ⅳ　高等部の取組
生徒の思考力・判断力・表現力の育成を目指した国語・数学での取組

≪引用・参考文献≫

○尾高邦生（2017）HP⑩特別開発研究報告書概略版
https://www2.u-gakugei.ac.jp/~suisin/pdf/2017/report_17_10.pdf
○勘田陽子・鈴木保巳・石川衣紀（2020）個別の教育支援計画・移行支援計画の運用における知的障害当事者の参画についての提案―高等部進路指導におけるセルフサポートブックの作成―長崎大学教育学部教育実践研究紀要第19号別冊
○勘田陽子・鈴木保巳・石川衣紀（2022）「知的障害特別支援学校高等部の進路指導における生徒版個別の移行支援計画：セルフサポートブックの活用とその効果」長崎大学教育学部教育実践研究紀要,21,pp.35-44
○勘田陽子（2021）セルフサポートブック（SSB）活用冊子～特別支援学校高等部進路指導のために～
○菊地一文監修（2021）知的障害教育における「学びをつなぐ」キャリアデザイン　ジーアス教育新社
○京免徹雄（2023）令和5年度長崎県教育センター公開講座資料
○内閣府（2013）障害者基本計画第3次計画
○内閣府（2018）障害者基本計画第４次計画
○長崎大学教育学部附属特別支援学校(2020)研究紀要第23集「生きる喜び・生きる力を育む教育課程の編成 -「何を学ぶか」「どのように学ぶか」の整理を通して-」
○長崎大学教育学部附属特別支援学校(2022)研究紀要第24集「生きる喜び・生きる力を育む教育課程の編成 その2-新学習指導要領を踏まえた授業改善と評価-」
○西村健一・水内豊和（2023）新時代を生きる力を育む知的・発達のある子のウェルビーイング教育・支援実践　ジアース教育新社
○寺本妙子(2022) キャリア教育における主体と自己に関する概念と教育実践上の課題についての一考察 開智国際大学紀要第21号
○東京学芸大学附属特別支援学校（2022）研究紀要NO66
○東京学芸大学附属特別支援学校（2023）研究紀要NO67
○独立行政法人教職員支援機構(2024) NITSニュース第230号エージェンシーの視点から考える主体性
○文部科学省（2011・2022）小学校キャリア教育の手引き
○文部科学省（2017）特別支援学校学習指導要領・学習指導要領
○文部科学省（2018）特別支援学校学習指導要領・学習指導要領解説　総則編（幼稚園・小学部・中学部）、特別支援学校学習指導要領解説　各教科編
○文部科学省（2019）特別支援学校　高等部学習指導要領
○文部科学省（2019）障害者の生涯学習の推進方策について
○文部科学省（2023）教育振興基本計画
○渡邉昭宏（2021）余暇支援・意思決定支援×ライフキャリア教育　明治図書

＜小学部＞
○鹿児島大学教育学部附属特別支援学校（2023）「子どもが、目標を捉え，自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができる授業づくり～「学びに向かう力、人間性等」の目標設定と評価の在り方に視点を当てて～研究紀要第24集

○国立教育政策研究所教育課程研究センター（2020）「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（小学校生活科）
○筑波大学附属大塚特別支援学校（2023）知的障害特別支援学校における小中学校教科の授業実践－生活科・理科・社会科に関する教科等横断的な学びを通して－研究紀要第 67 集
○文部科学省（2017）小学校学習指導要領
○文部科学省（2017）特別支援学校小学部・中学部学習指導要領
○文部科学省（2018）特別支援学校学習指導要領解説　総則等編（幼稚部・小学部・中学部）
○文部科学省（2018）特別支援学校学習指導要領解説　各教科等編（小学部・中学部）

≪中学部≫
○池田和馬・諸岡美佳・藤井慶博（2022）「知的障害特別支援学校における「振り返り」に焦点を当てた授業改善―共通実践事項の設定とその実践状況の評価を通して―」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要　第 44 号
○池田和馬・藤井慶博・諸岡美佳（2023）「生徒が自らの学びを振り返り、次の学習や生活に生かすための授業づくりの検討－知的障害特別支援学校高等部の職業科、家庭科の授業実践を通して―」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要　第 45 号
○臺明子（2016）「知的障害のある児童の主体的に学ぶ意欲を高める振り返り活動の工夫－単元全体をつなぐ「振り返りファイル」の活用を通して－」広島県立教育センター平成 28 年度教員長期研修（前期）

＜高等部＞
○石井英真,熊本大学教育学部附属小学校(2020)「粘り強くともに学ぶ子供を育てる」明治図書
○群馬大学共同教育学部附属特別支援学校(2023)「子供が自ら考え　学び合う授業実践」
○小林博幸・上仮屋祐介・今林俊一(2016)「特別支援学校（知的障害）における協働的な学びに関する一考察」鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要第 25 巻 265-274
○内藤理子(2022)「生徒の思考力・判断力・表現力の育成を目指した国語・数学での取組」
○長崎大学教育学部附属特別支援学校(2020)研究紀要第 23 集「生きる喜び・生きる力を育む教育課程の編成 その 2-新学習指導要領を踏まえた授業改善と評価-」
○長崎大学教育学部附属特別支援学校(2022)研究紀要第 24 集「生きる喜び・生きる力を育む教育課程の編成 その 2-新学習指導要領を踏まえた授業改善と評価-」
○分藤賢之(2023)「年間指導計画システムの理念と実践　知的障害教育スタンダード」ジアース教育新社
○宮城県教育センター(2021)「特別支援学校 特別支援学級 知的障害教育のためのみやぎ授業づくりガイド」
○文部科学省(2019)「特別支援学校学習指導要領解説知的障害者教科等編(下)（高等部）」
○涌井恵(2011)「学び合い、支え合い、高め合う協同学習が成立するための条件」国立特別支援教育総合研究所メールマガジン
○涌井恵(2011)「障害のある子どもも参加する協同学習における配慮や手立て」国立特別支援教育総合研究所メールマガジン

あとがき

本校は、「生涯をとおして自ら学ぼうとする子供を育てる授業の在り方」をテーマに、３年間にわたり研究に取り組んできました。この研究を通じて、児童生徒が主体的に学び続けるための授業づくりや、学校全体での学びの体制づくりについて多くの知見を得ることができました。

私たちは３年間のコロナ禍を経て、急激な社会的変化をこの身をもって経験してきました。学校教育もコロナ禍前後では大きく変化しています。授業ではタブレット端末が日常的に使われ、オンラインによる交流学習なども特別なものではなくなりました。また、運動会の午前中開催や校外学習の見直しなど精選されたものも少なくありません。このような変化の中、これまで培ってきた本校教育が障害のある子供達、家庭、地域の求めに応えられるものになっているのか、変化が激しく予測困難な時代を生き抜く子供達を育成するものになっているのか、研究を通して考えることが重要だと考えました。

本研究では、「児童生徒の主体性の育成」がキーワードになっています。児童生徒が卒業後、社会変化に主体的に関わっていくことを目指し、授業づくりの柱でもある「目指す児童生徒像」「キャリア教育全体計画」を整理しなおしました。その中で、本校高等部で以前から取り組んできた「セルフサポートブック」を本校のキャリアパスポートとするべく、小学部版、中学部版を作成し、教育活動の一部に位置付けました。児童生徒が主体的に自身のキャリア発達に関わる取組です。また、学校全体で主体性の育成を目指した授業実践に取り組むために「附属スタイル」を策定しました。教師が同じ方向性をもって、児童生徒の主体性を引き出す授業づくり行うための取組です。これらの取組は実践してからまだ日も浅く、今後も本校の教育課程のもと繰り返し実践し、その効果を検証する必要があります。ぜひ、多くの方に本校職員の創り上げた授業と子供達の姿を本研究発表会で御覧いただくとともに、本研究紀要をお読みいただき、忌憚のない御意見をいただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、本日、御参会いただきました皆様には、本校の研究に対しまして貴重な御意見や御助言をいただき厚くお礼申し上げます。また、後援をいただきました長崎県教育委員会、適切な助言をいただきました助言者の先生方、私たちが進むべき道を示してくださいました講師の東京学芸大学特別支援教育・教育臨床サポートセンター　橋本創一先生、全ての方に感謝申し上げます。皆様との今回の出会いを大切にし、教育の充実に向けて今後とも連携・協力を深められることを祈念いたしまして、お礼の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

令和７年２月

教 頭　　伊　藤　公　裕

研　究　同　人

【校長】田　中　昭　二　　【教頭】伊　藤　公　裕

《小学部》
篠　原　裕　美（部主事）
〇宮　川　　明
吉　岡　ももか
池　田　麻　希
寺　﨑　真季子
森　　美紗樹
山　田　恵　美
山　中　祐　造
山　中　り　な（養護教諭）
修　行　莉　央

《中学部》
國知出　幸　美（部主事）
小　原　芳　恵
〇神　嵜　慎　也
〇髙　野　歩　実
八重石　憲　佑
納　所　健　一
三　浦　由香子
近　藤　好　夏
平　山　美沙都
山　下　和　美

《高等部》
稲　垣　和　宏（部主事）
石　塚　大　夢
谷　本　かおり
假　屋　健　太
〇宮　﨑　美緒子
内　藤　理　子
荒　川　皓　基
板　羽　絵　理
勘　田　陽　子

（〇は研究部）

《共同研究者》
鈴　木　保　巳（長崎大学大学院教育学研究科教授）　高　橋　甲　介（長崎大学教育学部准教授）
石　川　衣　紀（長崎大学教育学部准教授）　荻　布　優　子（長崎大学教育学部准教授）
西　村　大　介（長崎大学大学院教育学研究科准教授）

《令和５年度研究同人》
菅　　昌　徳（校長）
得　永　　剛（部主事）
浦　江　活　子
吉　川　　透
桂　　杜　成
峯　　信　幸
中　村　詩　織（養護教諭）

《令和４年度研究同人》
森　川　　元（教頭）
網　代　比呂恵（部主事）
杉　田　　崇（部主事）
竹　下　成　彦
佐　藤　公　彦
山　田　勝　大
青　木　良　美

《令和４・５年度共同研究者》
吉　田　ゆ　り（現・九州大学基幹教育院教授）※令和５年度まで長崎大学大学院教育学研究科教授

研究紀要　第 25 集　　**令和 7 年 2 月発行**

編　集　者　　長崎大学教育学部附属特別支援学校
長崎市柳谷町 42 番 1 号
TEL (095)845-5646
FAX (095)845-0521
発行代表者　　田　中　昭　二